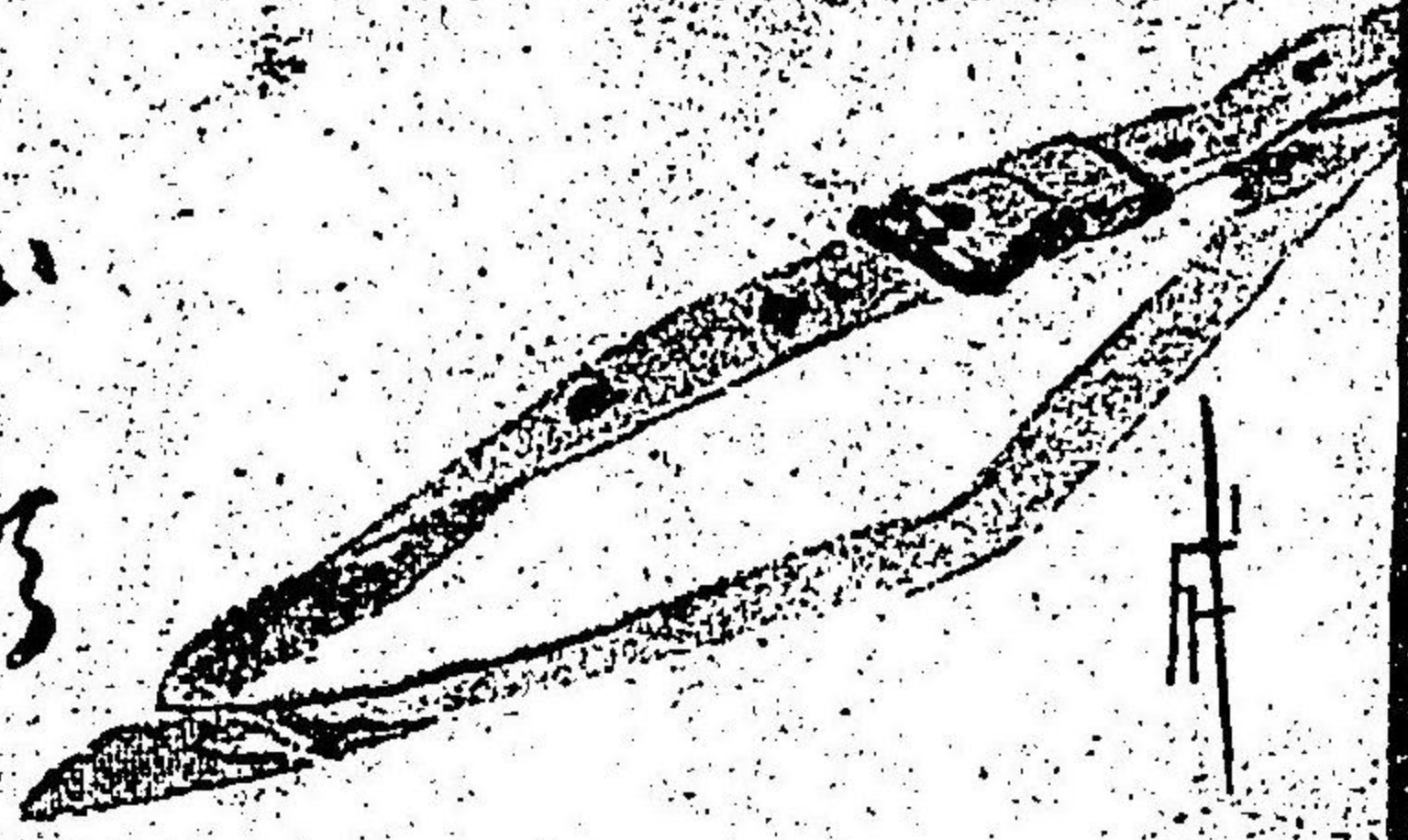


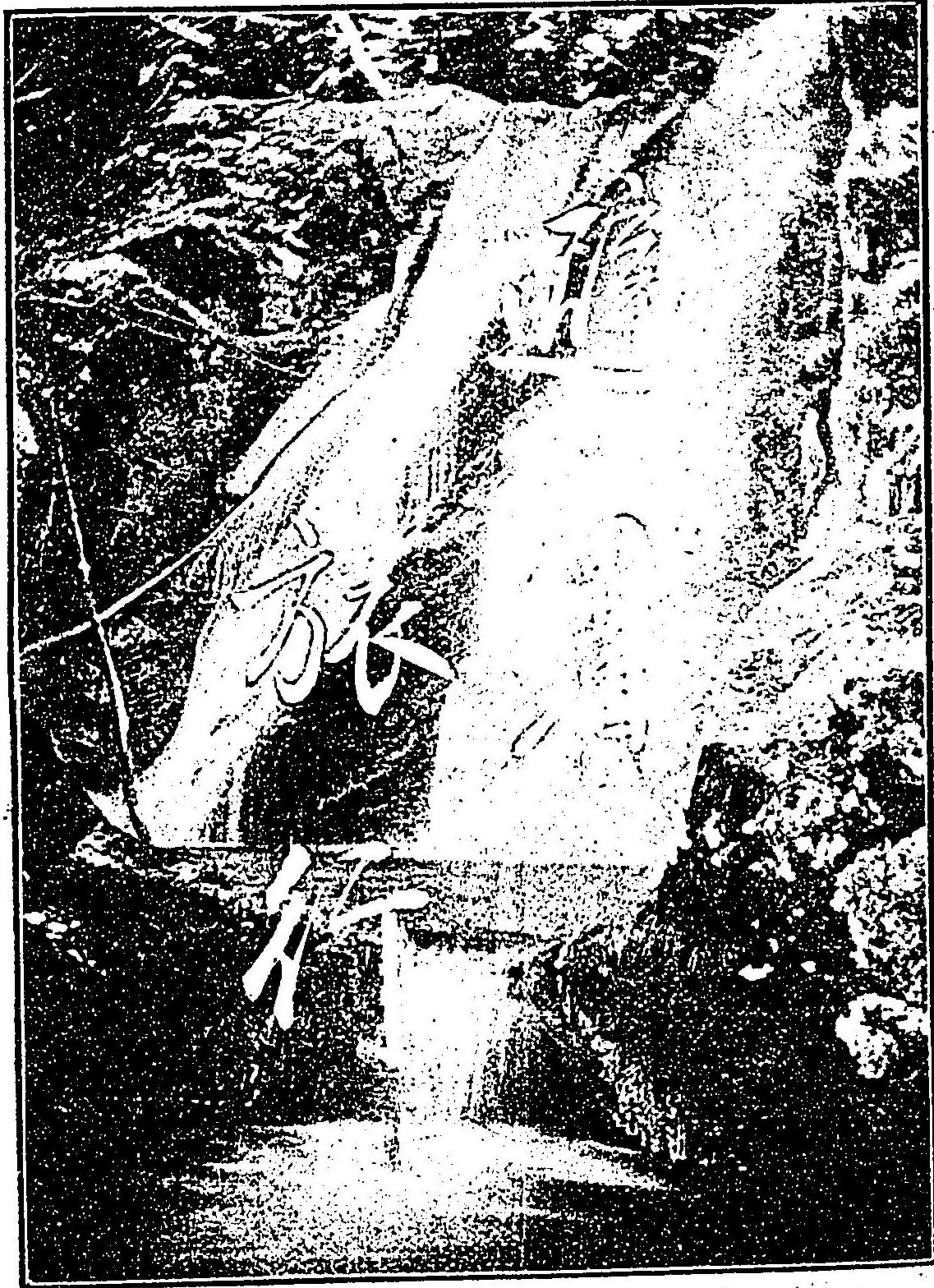
29
275



山影
水聲

避暑旅行

枕流
山人





何處飛流去不閑。 扳接直下幾層看。 千尋白浪轟蒼壁。
 萬丈銀河舞翠幃。 素色噴出三伏雪。 餘波流作万年瀾。
 誰懸月落猿啼底。 時有山僧獨往還。

たかどの、たかきもあれど日盛りの
 涼みは森のこいけなりけり

時分は好し土用はじめの舟遊山



梅林に兵士を誘ひて渴を醫せしめしもそれなり。 雪景の山水を披
 きて涼を覺ゆしめしもそれなり。 炎天の巨燧、秋風の團扇、何と
 て時の興應となるべきぞ。 年の如き永晝、燬くか如き烈日、何と
 のれ先づ堪ぬやらねば、もろ人もさぞいと推し量られ。 何と
 を趣向もと一入の汗に搾り出でて、相も變らぬ避暑の旅なり。
 彼の山寺の寂びたる、彼の温泉の静かなる、懸瀑に對して、川先
 子葉下、清波に浴して暑氣を滌ふ、一たび熱の巻を出れば、
 の喜び、の興味を喫ふべし、さはいへ、行衛定めず飄乎々々と
 飛び出づる能ともいはずまじ、されば著者が道するべせんなど、
 大口開いて言ふは笑止の極みなれば、ソツと思ふまゝを叫きて、
 彌次喜多を學ばんとまでの趣向なり、よしや旅を俱にせずとも、

縁樹の下、清泉のほとりに、この書を繕かんには、午睡の夢は
山影水聲の間に通ひて、梅に渴、雪に涼のもてなしともなるべ
けんかや。

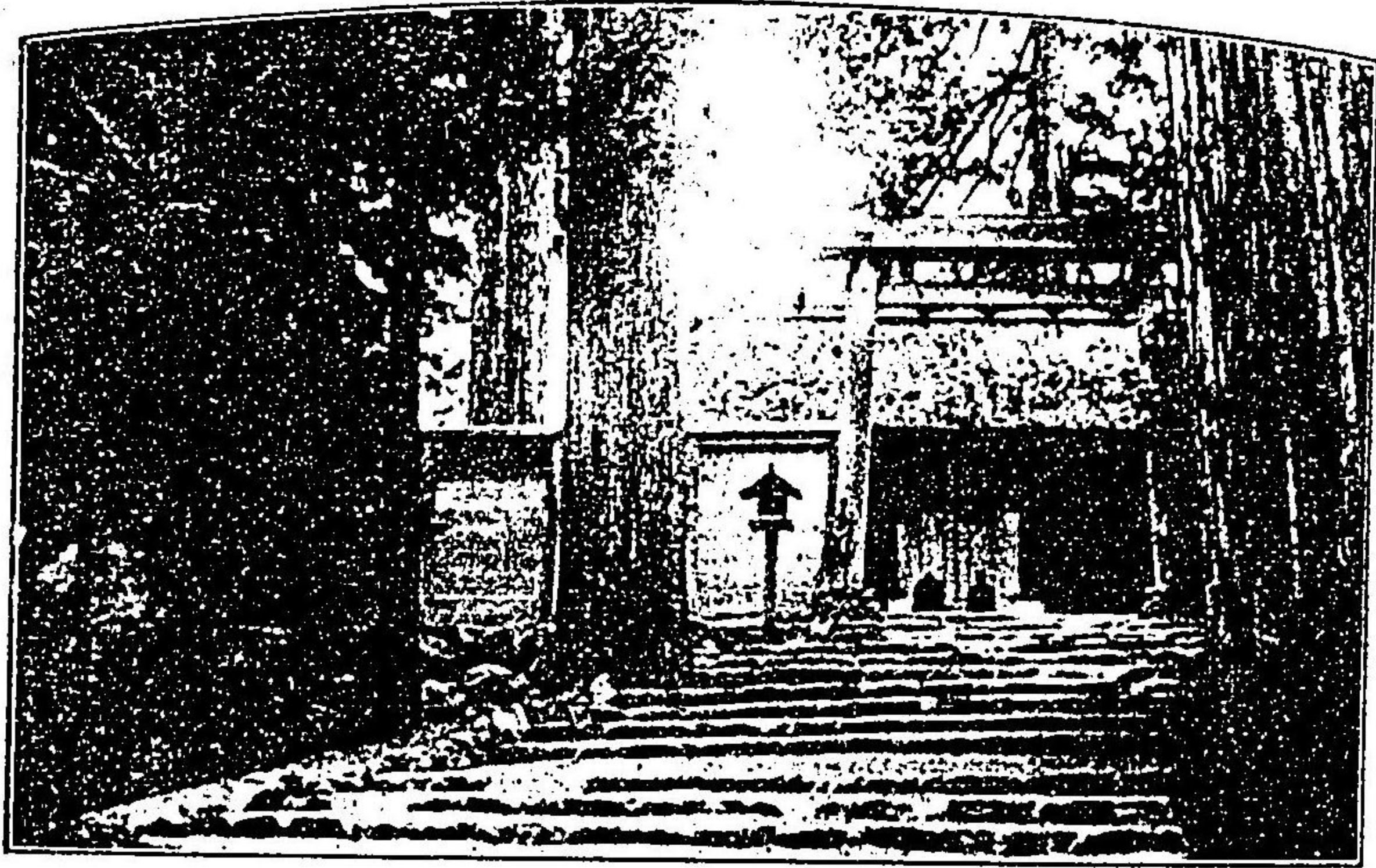
終りに一言の謝すべきは、この書を編するに就て、四方の雅
客よりうの材料や寫眞を贈り給はりしことなり、もとよりこ
の冊子に載せつくすことを得ざりしといへど、うの力を假さ
れしや多しといふべし、二集を編するに於いて高意を空しく
せざらんことを期す、こゝに謝意を表すること爾し。

明治辛丑夏涼雨芭蕉に擬ぐの下にて

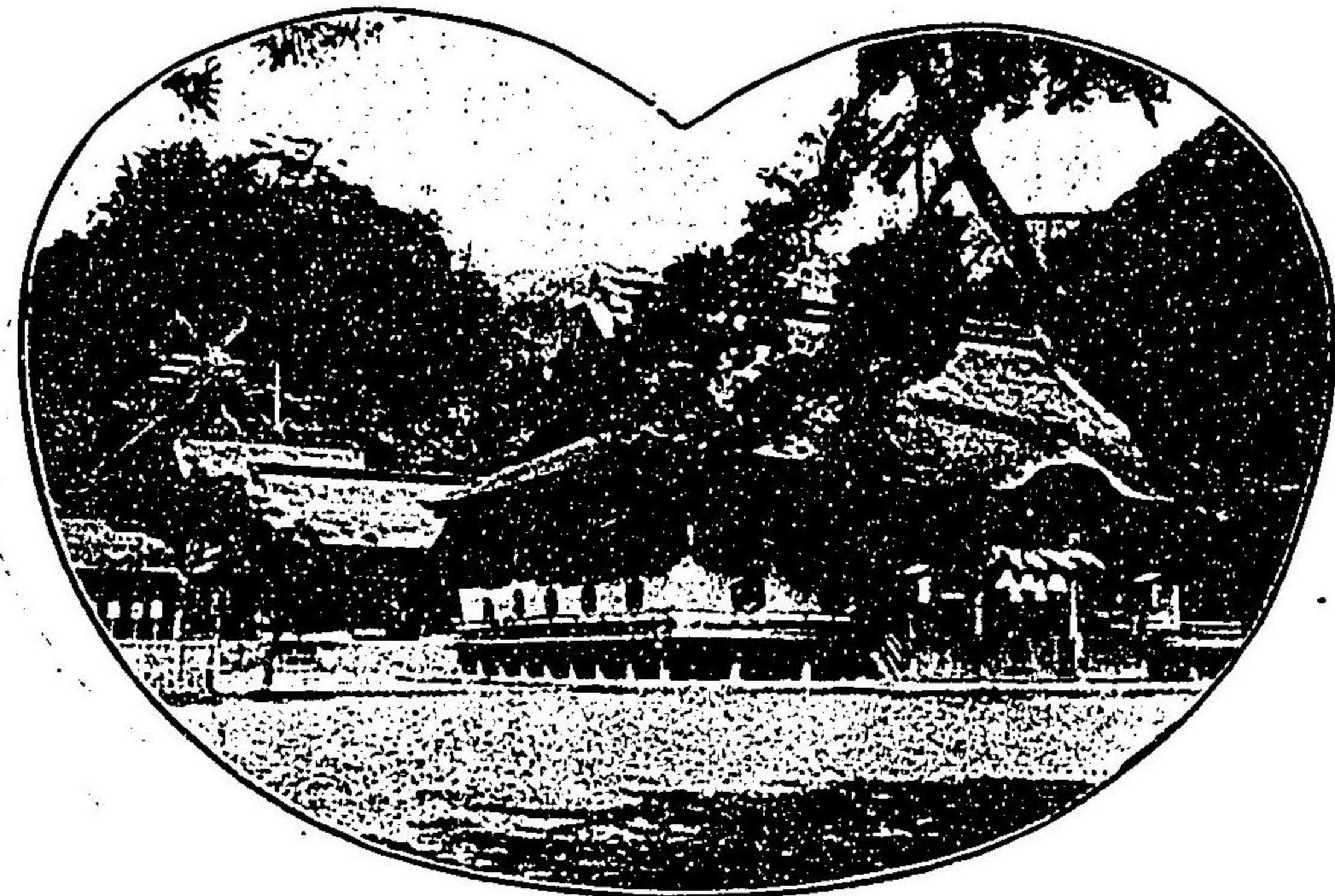
枕流生識



(大隅玉照繪類屏風)



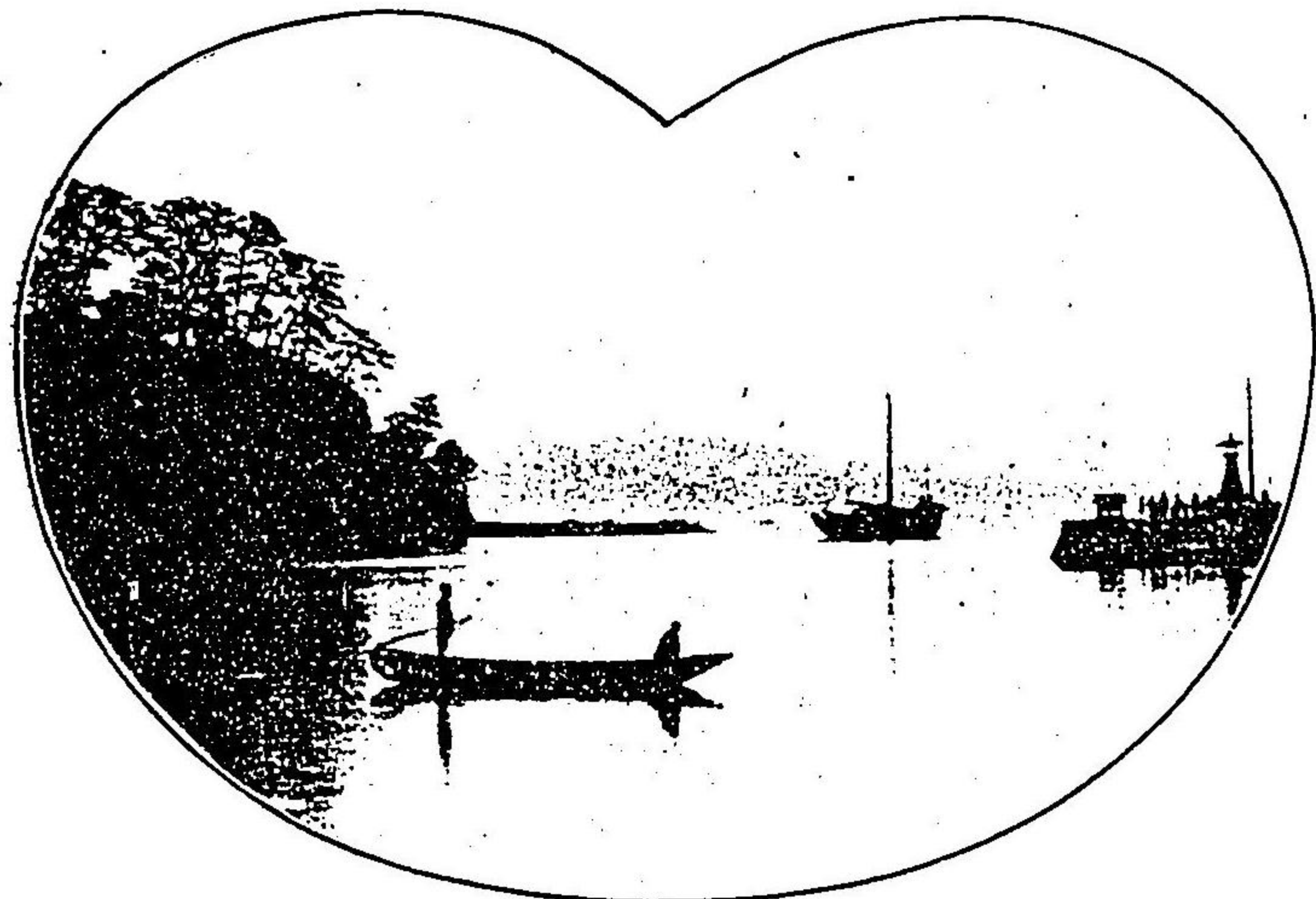
宮 内



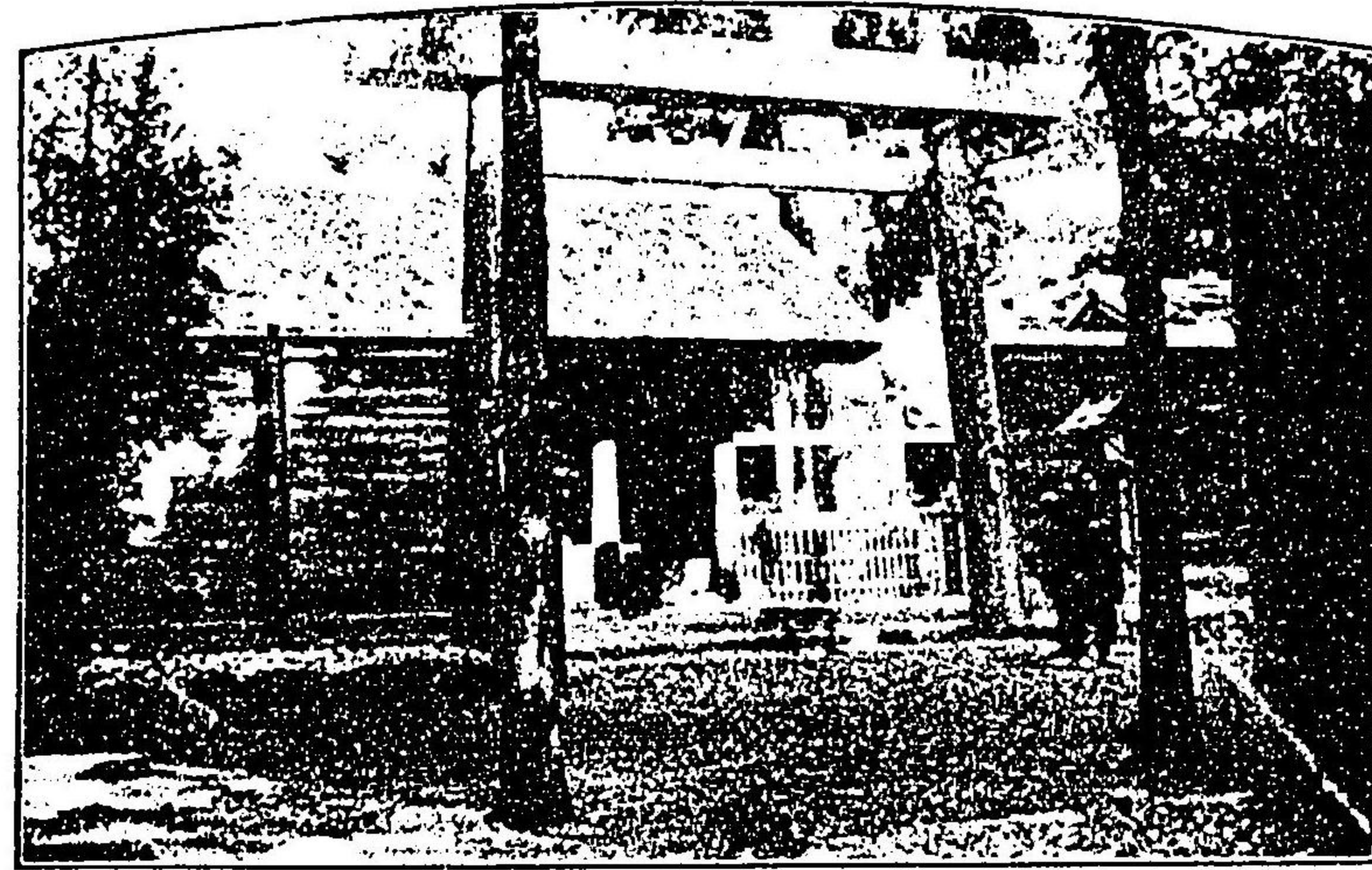
社 大 笠 出



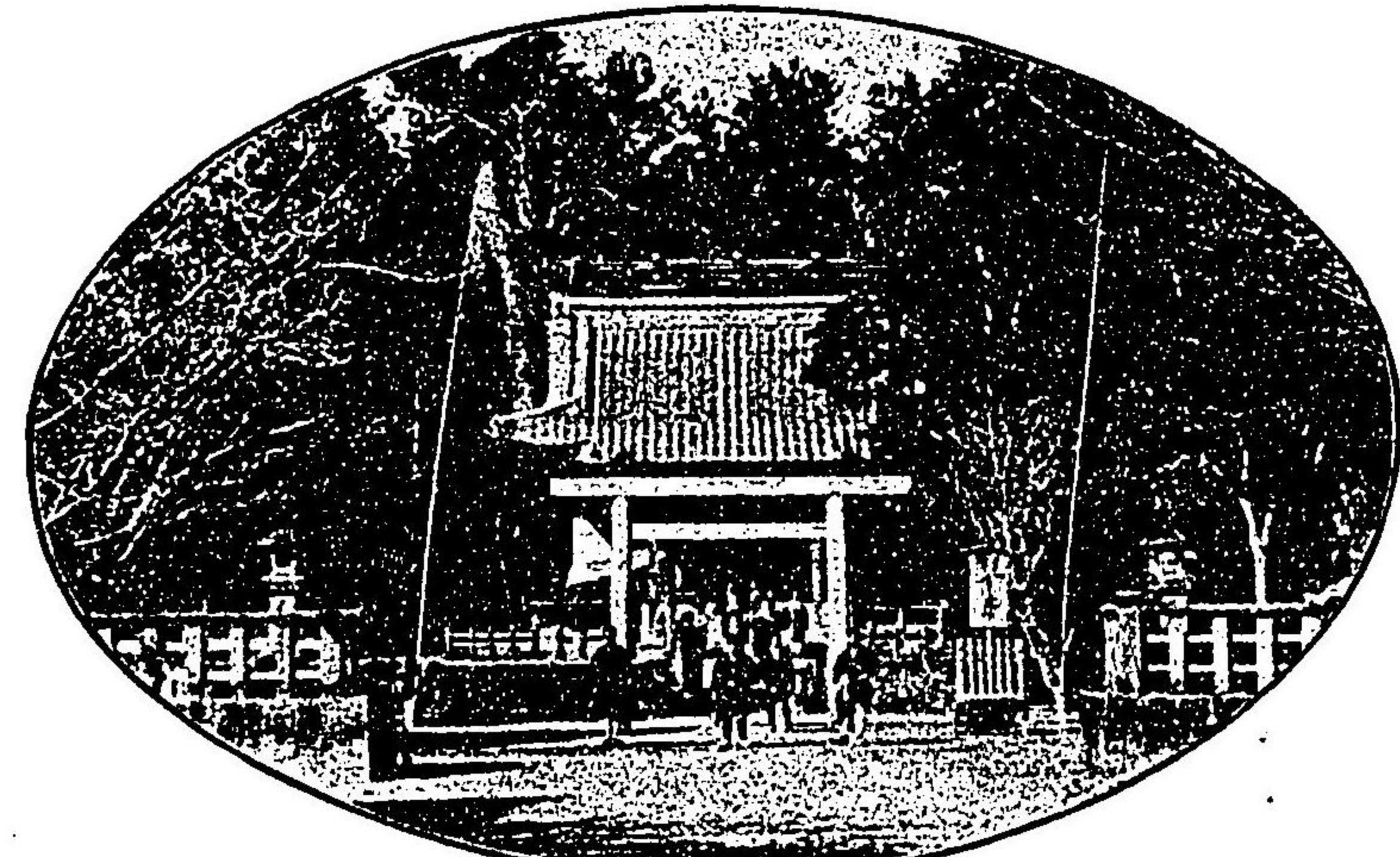
小望ヲ湖波仙ヲヨ園樂若



關保三雲出



宮 外



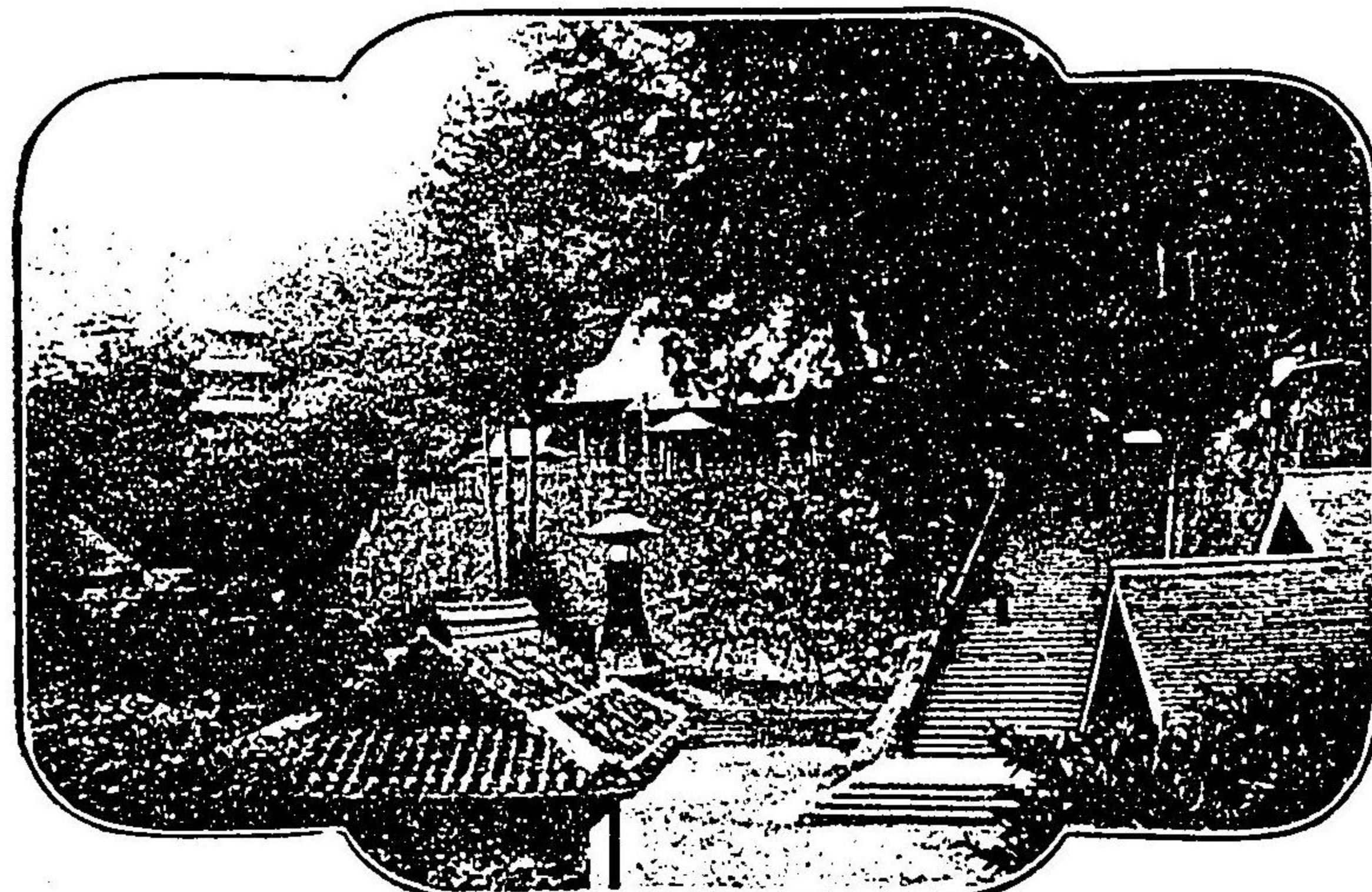
殿神宮崎宮向日



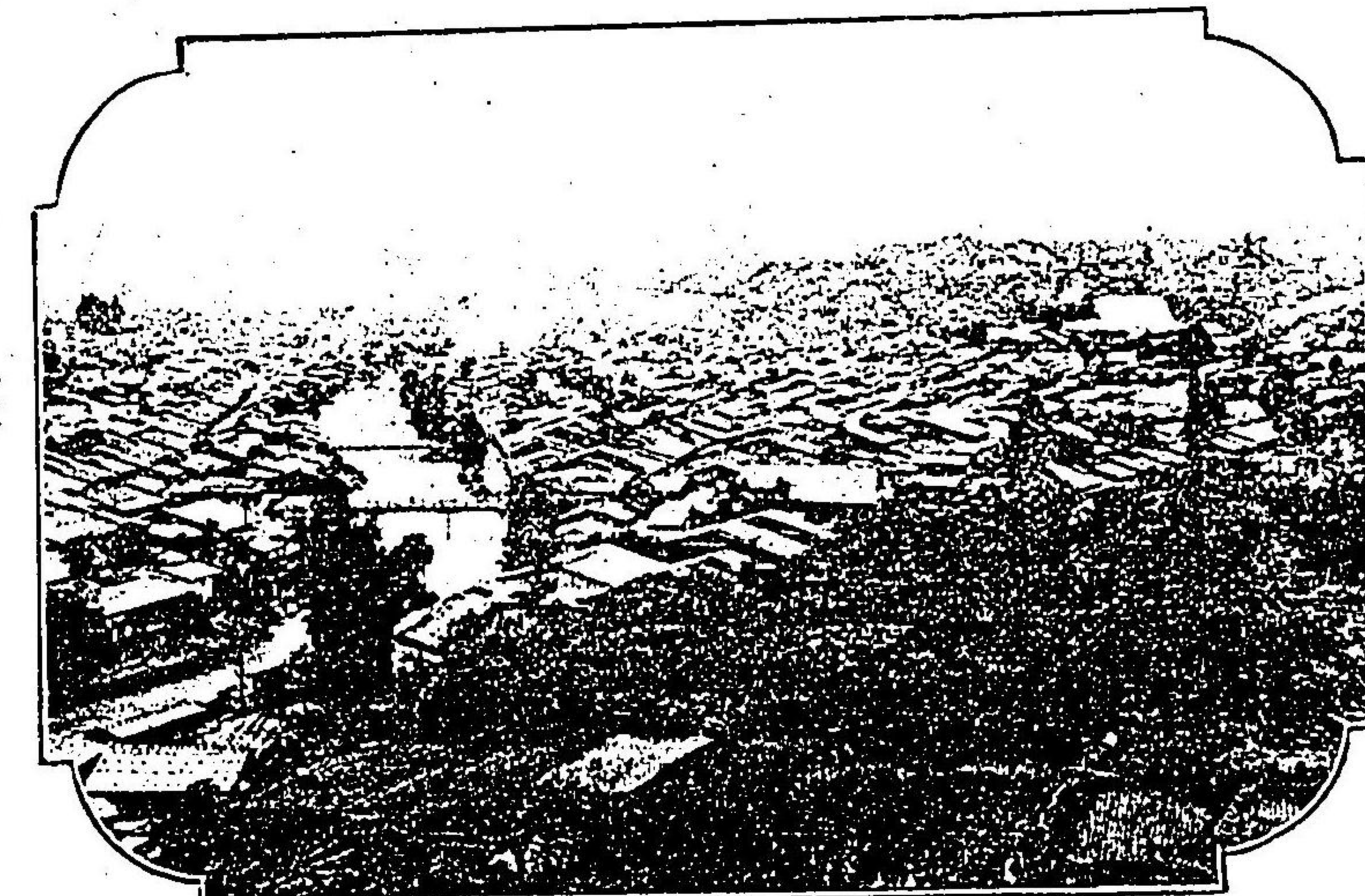
江之島稚兒ヶ淵



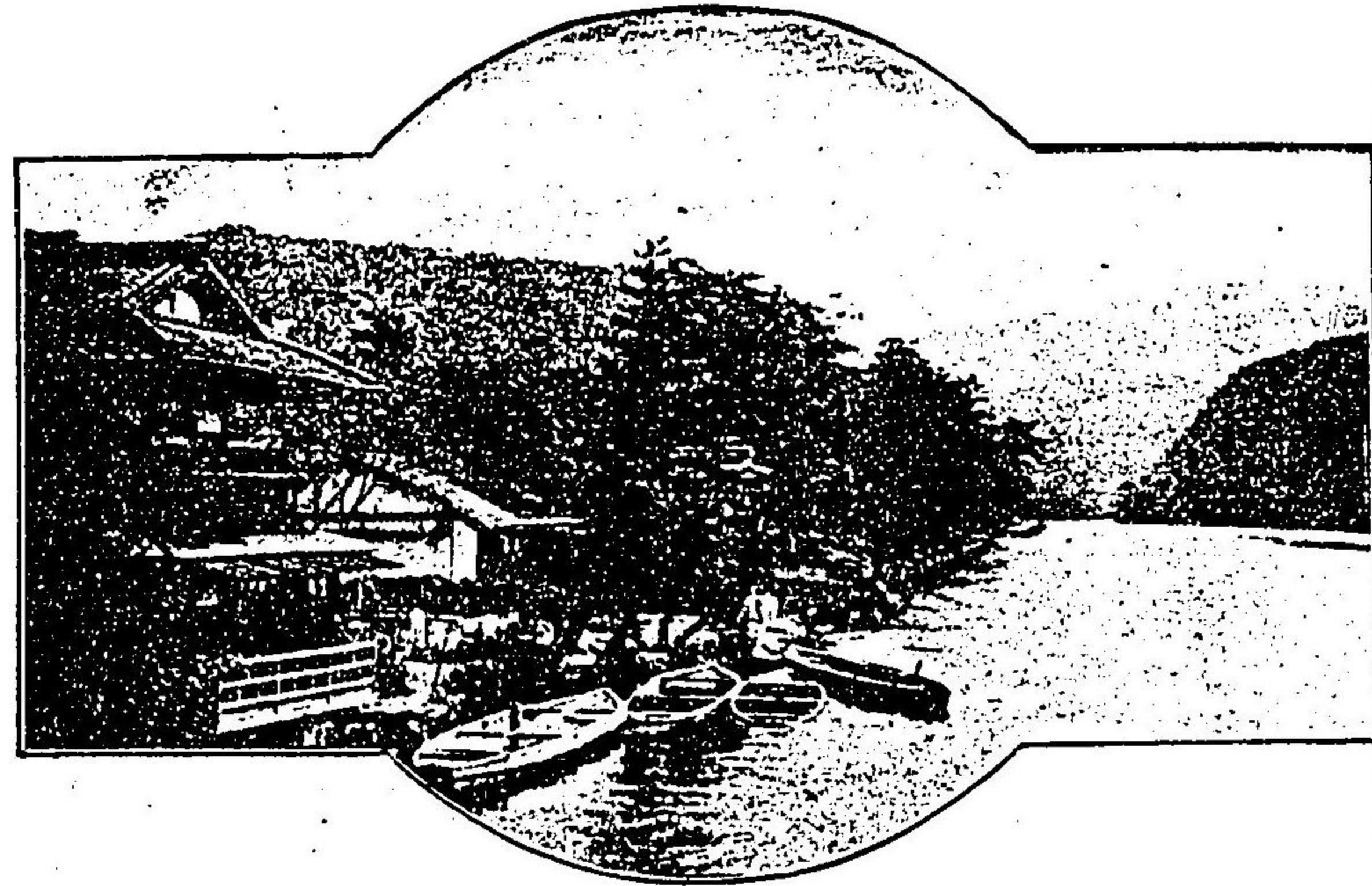
伯耆大仙



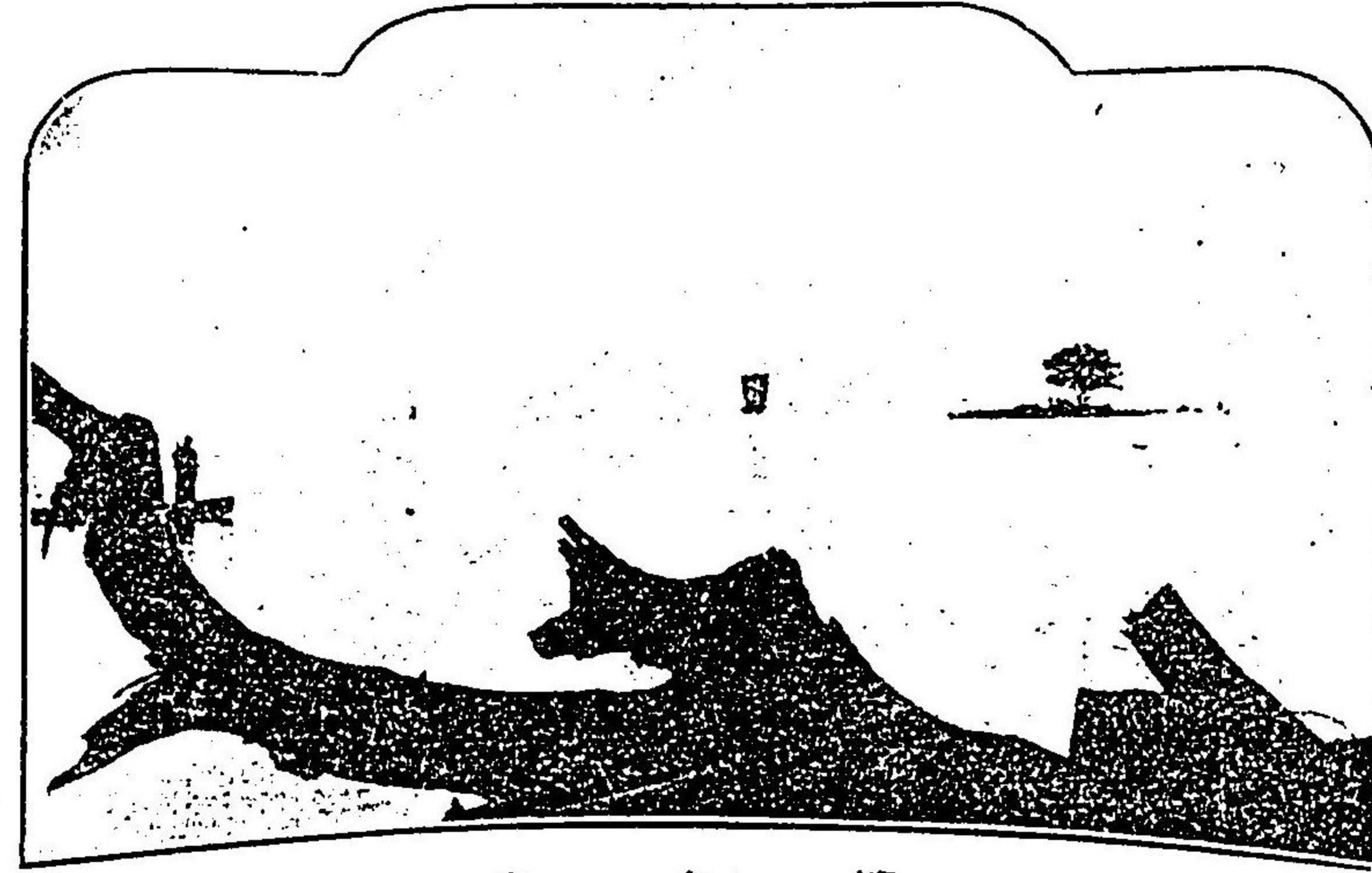
出雲國瑞光山淨永寺



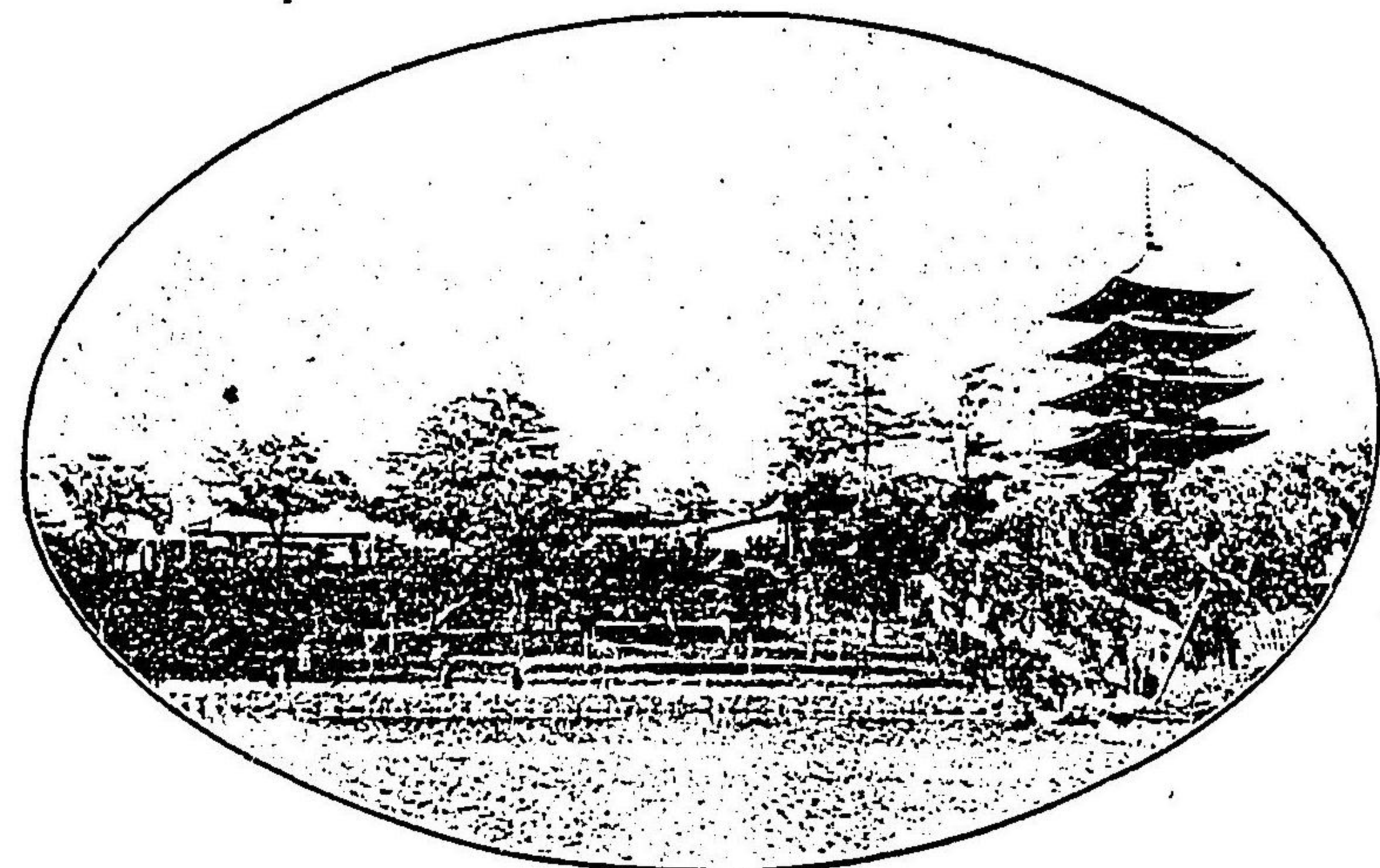
高松公園ヨリ高松市街ヲ望ム



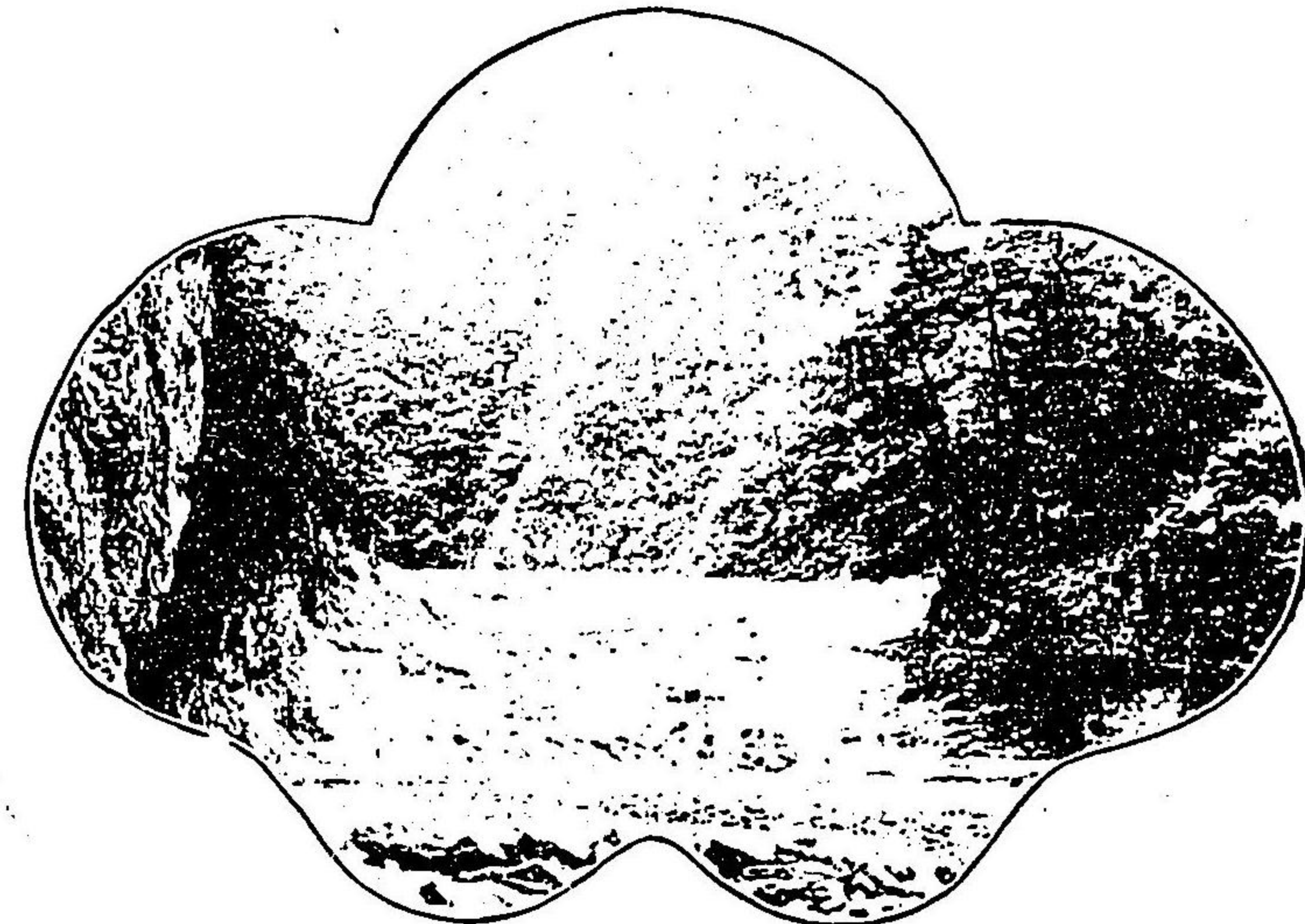
宇治ノ川瀬



嫁ヶ島



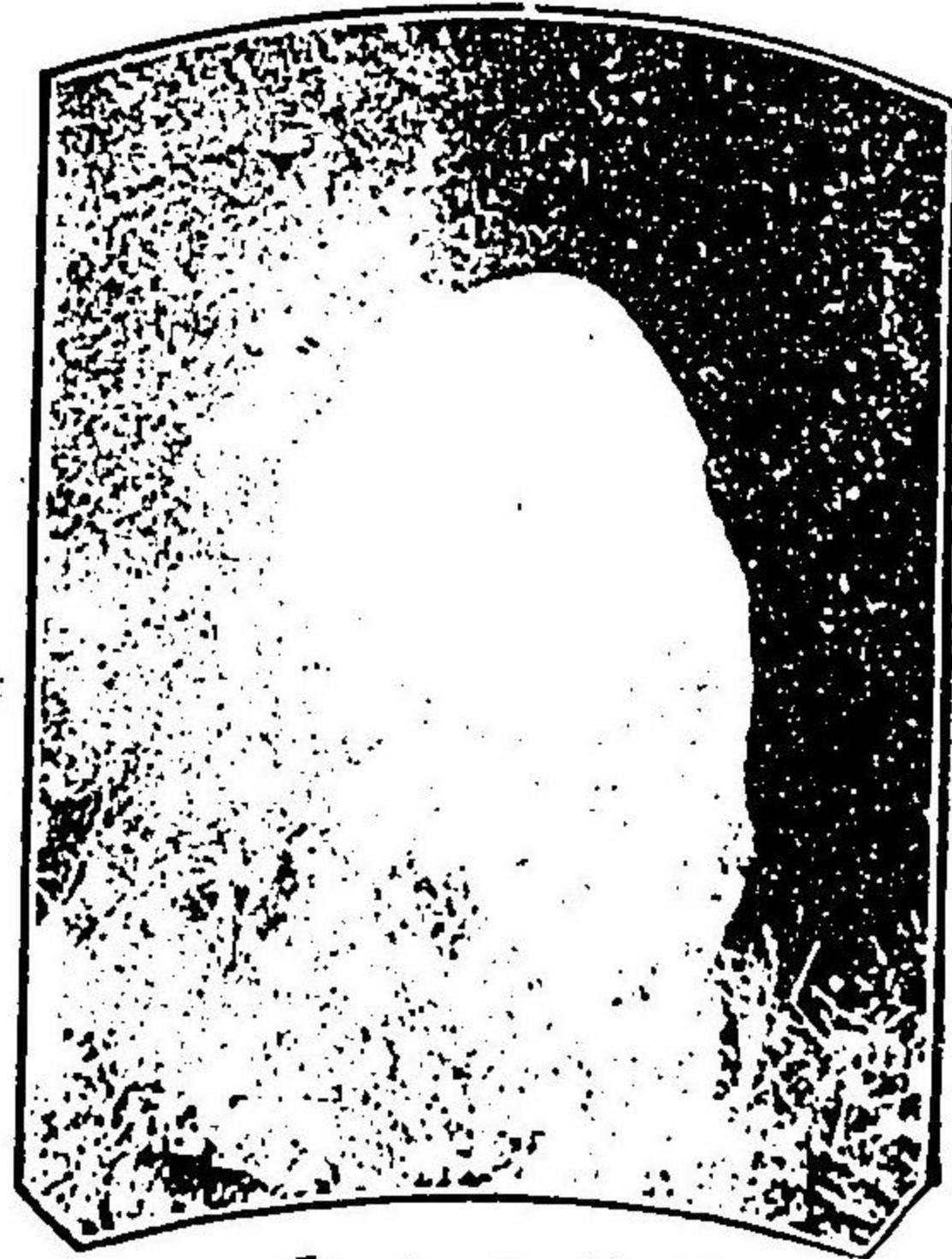
奈真ノ塔影池光



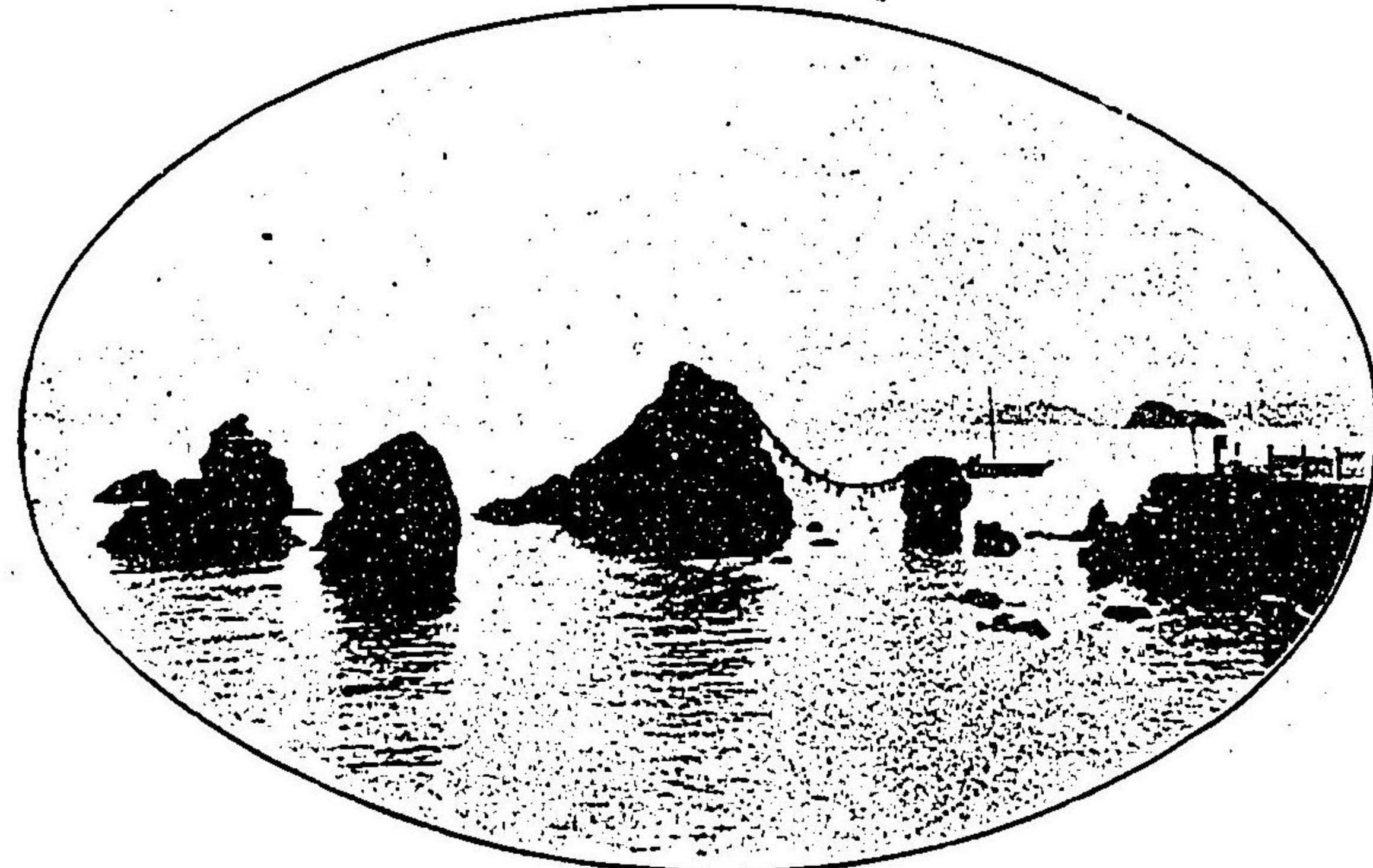
石見斷魚溪



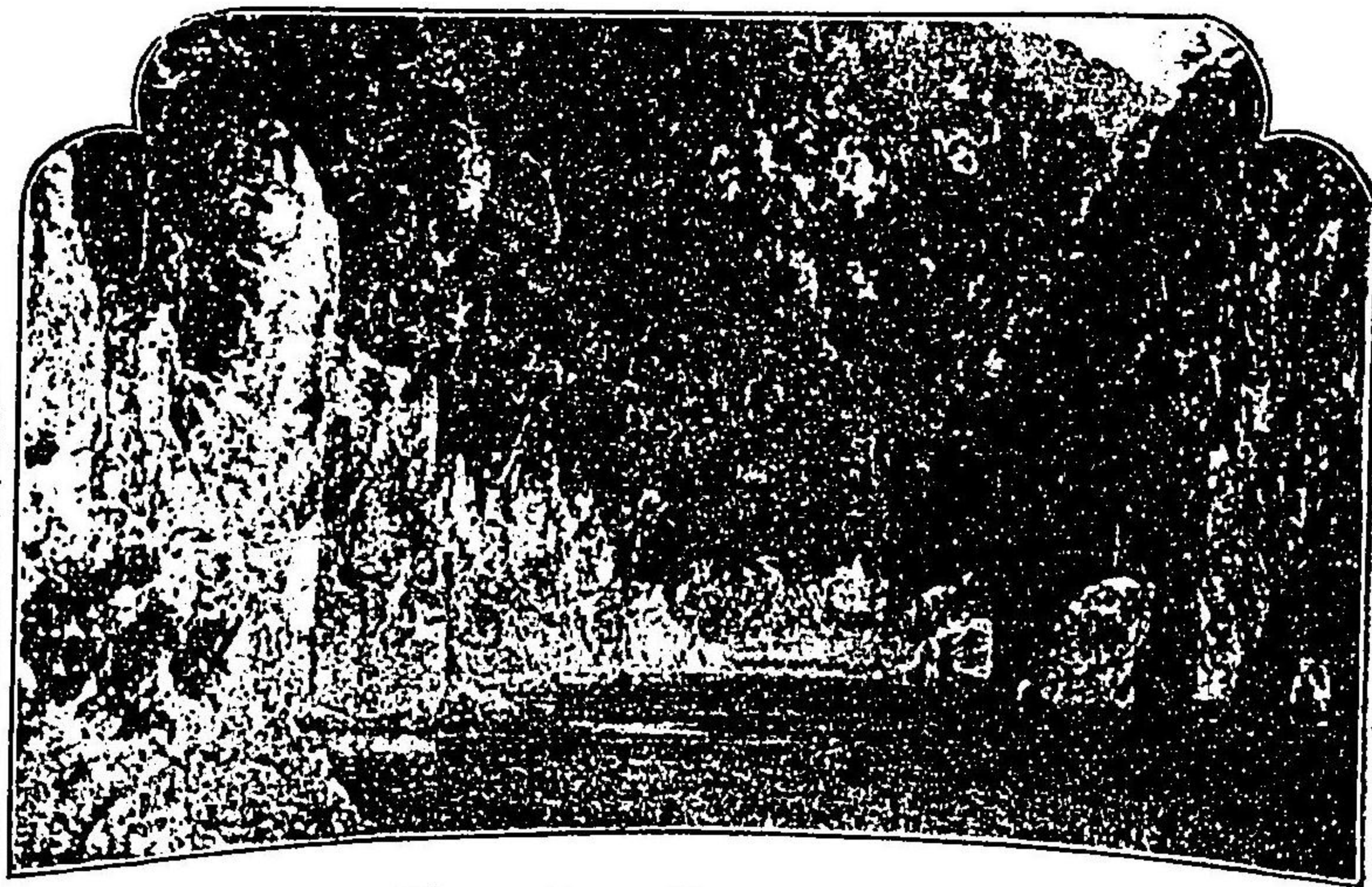
泉布瀑ノ頭龍郡石飯



内ノ山義妙



魚曉ノ浦見二

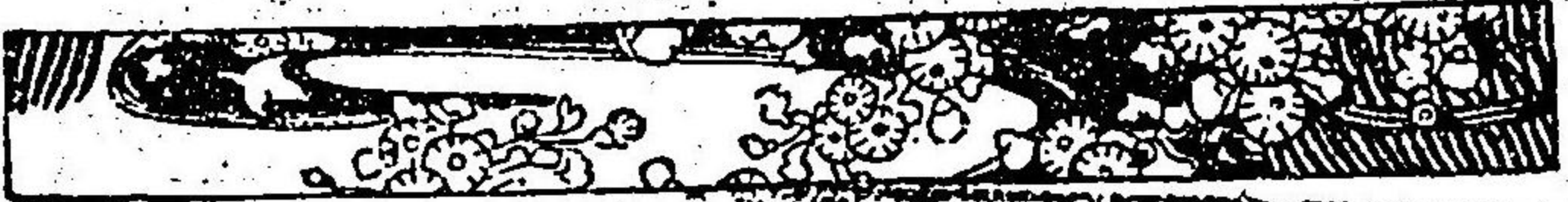


火筒玉隈調製所内

丁八湖州紀



内境神天岡長西洛



山影避暑旅行



枕流山人



ついて

三休の素熱にありて、
 生れその境に置れれば、
 暑い、それを出、
 杖の紅塵中に起臥せんことは、その地に
 さまでの苦勞もないといはるへ、ア、
 あちらにころく、こちらにころくと
 何一つはたらしませぬに汗水ばかり流して、日の傾く、風の出る、
 をばかりたよりとするは、知りつゝ、生命を縮めるの道理、その日暮
 しのならぬ身ならば言はず、財囊の可也まゝになる身にてすら、庭
 前の焦石をのみ睨みて日をくらさんとは、よくく我が身でわが身
 を責むるといふものにあらざるや、さればこの近年は避暑といふこと

避暑旅行について





避暑旅行について

の上下ともに口癖にされることとなりて、やゝもすれば避暑旅行でふことを誘ふやうになりしは、人はこれを時好を趁ふといはいいへ物好きといはいいへ、われはこれに與みして勧誘者の一人たらんとするなれ。これは事新らしくいふまでもなく、都鄙上下ともに勢の傾けるがまゝに、その手引草として、避暑の案内なんといふ書も多く世に出でたるは、いと喜ぶべきの限りなれど、とかく一地方に偏するが如き傾きのなしともいへず、猶ほまた世に聞かぬところの片山陰に埋もれたるもあるべく思はるれば、少年に似たりといふ長き日を、太古の如しといふ静けき山の中に案内して、九夏の暑熱を忘れて過す清涼劑にもと、先輩の跡をおふて避暑旅行てふ一冊子を裏め成せり、これとて委しくせば巻を累ねべく、巻を累ねては旅中の行李の重からんことを思へば、一寸浴衣の袂に入れ、兵兒帯の中に挟まれん便りにもと、こゝかしこの名あるところも割愛してさつ



く道といそいで北のはしより西の端まで、四五百頁の中に書き列ねたれば、もとより遺憾なることは山々なれど、そは是非もなきこと、断念たまはるべし、まして東京近傍には、多くの名勝もありておのづから避暑に適せしものも數あれど、そは多くの案内書、手引草が世に公にせられれば、そのあたりはわけてこれを略したれば、疎漏なりとて責めたまふこと勿かるべし。

この書はもとより名勝を紹介せんの主意にあらねば、社寺の縁因や舊蹟の事由はこれを詳略せり、たゞ轟々たる瀑聲に熱腸を寒からしめ、四散せし飛沫に皮膚に粟せしめ、鬱蒼たる緑樹の蔭に午眠を試み、混々たる清泉の流に熱睡を滌ぎ、時として萬尋の懸崖に嘯傲し、時としては千里の江山に快吟し、寺堂の幽邃なるに宿を投じて仙境を想ひ、海樓の快豁なるに醉を估ふて俗界を罵るなど、要は避暑の二字より割り出したる思案の手引なれば、若しこの書によりて

避暑旅行について

幾多の顯はれざる所を著し、知れざる名をも尋ねあつることも得ば、わが心の程も水の泡とは消えざるべし、その案内は大坂の附近よりとして、いざござれ参りませう。

大坂のほごり

浪華の地は、商業の目貫の地といへど、景色といふことに就ては、さまで誇るべきところもなし、随つて避暑に適するの地も多くは見認めざるを遺憾なれ、されど東より西より南より北よりと、日夜に湊ひ来る客人の多きに、大坂の避暑場はと問はれて、數里の先なる箕面の瀧とか、堺の濱とか答へんも、足元を見らるゝ心地のせらるれば、片すみより搜し出して、市中のほとりの避暑場をへに集め列ねんとす、郊外の三里の地に至りては、おのゝその地方に就てこれを案内すべし。

大坂市は、俗に八百八橋ともいふほどにて、大小の溝渠縦横に疏通し、随つて大小の橋梁は多くこれに架せらるゝが中に、西横堀、東横堀、土佐堀、江戸堀、長堀、堀江、道頓堀、京町堀などは稍々本にして、船を行るに便なれば、その中の横堀、道頓堀などは、夏夜の涼舟を泛ぶるによろし、而して堂島川、大川の涼舟は殊に多くして、中にも大川はこれを以て一の名勝となせり、しかれども實際をいへばあまりの群集にて、そのあたりを俗了し、雅致といふものは少しもなきを遺憾なる。

橋上の納涼なり、眺望なりは随分よろしきものありて、中にも三大橋といへる、天神、天満、浪花は頗る繁華なり、しかれども是も亦寒氷々々などの聲に俗了せられて、平明のころにあらざれば、わが有にはあらざるなり。

中之嶋公園といへば誰も知るところなるが、この地の公園としては



寝めたものにあらず、たゞ堂島川へ枕みたるだけが、および一つの噴水あるだけが、些トといふべし。北に巡れば、凌雲閣は七層の高樓にして、四圍の風景を眺むるによろしきと、その高さだけに風の透きよく、往くも亦よろし。大融寺は一寸俗氣をはなれ、殊に藤棚の下など小憩にはよろし。妙徳寺は、俗に五百羅漢ともいふ、福嶋より浦江に至る途中にあり、此地眺望によろしく、午睡には足るべし。野田の藤もよけれど、時候後れにて、避暑にはいふも益なし、遙かに巡りて天保山は、遊園地もあり、海水浴場もあれば往く甲斐は十分であり、こゝより對岸の櫻嶋にわたり、西成鐵道に乗れば、路も遠くて近きものなり。南の方にては、高津神社、生國玉神社、いづれもその舞臺の眺望によろしく、月夜の納涼には殊に適せり。



天王寺は、その地域廣くして、幾分か幽靜の趣を有せり、こゝには五層の寶塔高く聳え、その縁起も難有さふしあれば、遊ぶによろし、寺中には涼味の掬すべきところあり。茶臼山は天王寺の西南にあたる小丘にして、綠樹鬱葱たり、こゝは避暑として取る可きところとす、この麓なる雲水といへる禪刹は、その庭園四季の觀眺に富み、殊にその遊息亭といへるには、普茶料理の需めに應ずれば、こゝに一日を暮らすもいと樂しかるべし。こゝより北にあたりて新清水寺といへるあり、その眺望は近くは大坂の全市、遠くは淡路嶋を翠雲の中に望み、頗る快豁なり、人造の飛泉ありて夏時はこゝに浴するもの多し、しかれどもその上に旗亭ありて俗了せしむるには遺憾といふの外なし。夕陽ヶ岡も、これに連れる地にして、その眺矚のさき前者に譲らざるなり。

東にしては産湯の清水、真田山稻荷社など、その好地區たるには相違なきも、訪ふもよし訪はぬもよしなり。
 郊外近くにては南に天下茶屋あり、一寸小憩するに足る、これより南が住吉にして、こゝは名高きだけに避暑にもよきところあり。
 社頭には風景の賞すべきなし、賞すべきは公園、高燈籠などにして、その最たるものは海水浴なるべし、浴場は松林の盡くるところにして、夏日は來浴の客多し、
 この他猶ほ多少の風景なきにあらざれども、殊更に書き立つるほどにはあらざればこれを略すべし。
 全体大阪にては、社寺もしくは、名所は随分多くして、その一二をいへば天満の天神、豊國神社、土佐稻荷、今宮神社、或は東西の御堂、博物館、水源池、櫻の宮、曰く彼れ、曰く此れ、而して春の花の如きは、随分と賞すべきものあり、いかんせん夏といふことに就

ては、動もすれば郊外に飛び出さるべからず、これは唯だ大阪に止らず、商業繁昌の區には此の如きはいと多くして、而して時として郊外數里に出養生せしめんと天公の配劑なるやも、計り知るべからざるなり。
 もしその大坂城、造幣局、大阪築港をはじめとし、或は五座の演劇、日本一の淨瑠璃、新町、堀江、北新地、南新地等の狹斜をたづねんとせば、その觀るべきもの幾何なるを知らざるなり。

京都から

京都といへば我が國の遊園の如くおもふは、實に無理からぬことにして、山に川に明媚なりとや謂はん、幽邃なりとやいはん、かくも幽邃に明媚なる京の名勝は、とても限りある紙中に案内せんことは、爲し得べきのわざにあらず、そして既に遊人といふ遊人はおほむ



ね疾くはげに御承知ごしょうちのこと、もし御承知なくとも、これを案内するの書に乏しこぼからざれば、事新ことあらたらしくものせんは、却かへつて野暮やぼとや笑わらはれん、されど全くこれを欠くも何んとなう物足らぬ心地せらるれば、先づ避暑ひすい、納涼なすやうに適あてすべきところのみを記すべし、而してその稍々委しくせしものは、遊客いうちやくの遊覽いうらんを勸告くわんこくせんとなり、道の次々も一々それからそれとは順じゆんを遂ははざるもの多ければ、そこらは許ゆるしたまへかし。

東山西嶺とうざんせいりやうの幽邃閑雅いうすいけんがなるに、加茂川の水長かまがわのみぢなへに清きもの、この二つにて避暑の觀は足れりといふべし、先づ山は後のこと、して加茂川は水上のさまで遠きにもあらぬを、水はいつも清冽せいれつにして、平時は水嵩みづかさも深からざれば、裳褰もすゝかけて渡らんも興きやうあるべし、川に架けたる三條の大橋は、その長さ五十六間、石柱をもて支へたり、盛夏せいげの候



は、橋下に涼棚りやうたなを設けて、午睡ひるね、晚酌ばんしやくの清娛せいごに供せり、亦納涼の好區こうくといふべし、その下の四條の橋、橋の東は祇園町、西は先斗町と、而して宮川町などといふ、妓館ぎくわんは橋を夾んで列れり、毎年七月に至れば、この兩岸なる青樓せいろうは、水に臨んで涼棚を構へ、又河中の磧上には多くの假床を填列して、納涼の觀に供せり、脚を清水に浸して氷片を呼び、清酒を行る、その興幾何ぞや、これを四條河原の夕涼といふ、たどへ熱鬧ねつたうは熱鬧なりとせよ、京都に遊ばん人は、是非一遊すべきものに在る。

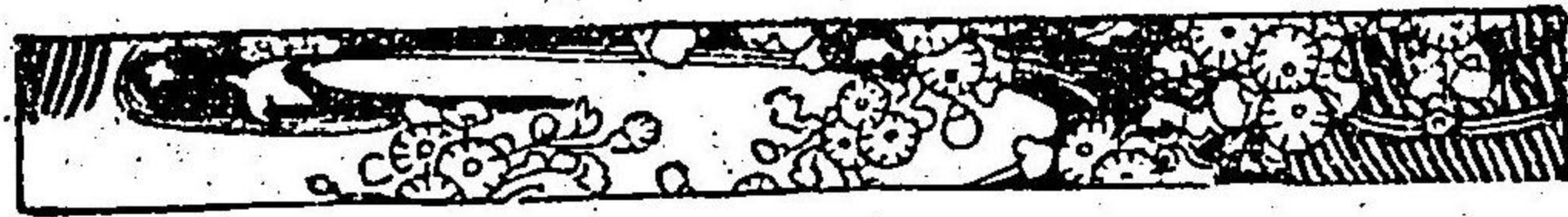
圓山の鑛泉、祇園社即ち八坂神社の東、東山の半腹はんぶくにあり、高樓を架し泉石の景を集め、清潔にして閑雅を稱するが上に、一欄の間に京都の繁華を收めれば、浴客は心神をして頼たのみに清爽快豁せいさうくわいならしむ亦一の避暑場といふべし。

およそ此の間、知恩、長樂寺、建仁寺、双林寺、若くは芭蕉堂、大

雅堂など、一として避暑に適せざるはなけれど、疾くより御案内のこと、思へばこれを記せざるなり。
 清水寺の音羽の瀧、西大谷の眼鏡橋など亦一訪すべきの價値ありとす。されどこれ等をはじめ、およそ市内の各處、これを述べんは、すでに前にことわりし通りなれば、すべてを略して他の方角に向はん。
 疏水運河は近江の琵琶湖の水を引きしもの、南禪寺の側を過ぎて加茂川の新運河にそへぐ、涼舟を泛べて上下するなど、月夜には殊に妙なり。
 南禪寺、永觀堂など亦景色に富む、若王寺には、その山中に同名の飛泉かゝれり。高さは一丈餘のみ、されどその水は清冽なるが上に樹陰緑鬱、炎暑を避くるに可なり、たゞ俗客の喧囂するものあるは厭ふべきものとす。



鹿ヶ谷は若王寺の北にあり、その上方には松虫鈴虫の二姫後鳥羽院の寵女の遁れたりしといふ安樂寺と、万無寺との二つありて、別にこれそといふ風趣も見すといへども、老松枝を支へ何となく別天地の状を呈するを覺ふ、賃して暑を避くるに宜し。
 如意ヶ嶽の大文字は、人の知るところ、その山中に樓門の瀧といふあり、高さ九丈餘、白布を樹梢にかけたるが如し、尤も旱天の時は水勢左までに急ならず。
 銀閣寺を訪ふて足利義政の昔を憶ふも佳なり、近年火災にかゝりしが爲め、舊觀に似ざるを遺憾なれ、眞如堂、黒谷、百万遍などの訪ふべきあるも訪はず、北白川に至れば、はや幾分か俗氣をはなれて、白川の流の白さを賞するも可なり、白川の瀧といふは、これを瀧といはずして、溪流といふこそ至當ならん、その怪石奇岩の間より逆流するぞ愉快なれ。




詩仙堂を過ぎて山端に出づ、こゝは高野川に沿えたる地にして、山水の奇勝は得もいはれぬが上に、雅致ある旗亭あるれば、避暑の客は常に溱へり、京都市中の三條大橋よりは一里半ばかりなり。修學院離宮は、こゝより程遠からねば、好き傳手もありて拜觀を許さるれば、暑熱は頓に忘れぬべし。八瀬および大原の里は、これより遠からぬ地なり、こゝにも暑を避くべけれど、避暑の目ざすところは比叡山なるべけれど、近來遠くより故らにこゝに訪へ來るものもありと聞けば、これを案内せんことは、用なきわざにあらざるべし。比叡山は京都の東北に巍然たり、こゝに登るの路は山城よりするものと、江州よりとするものとあれど、京都よりするものに二つありて、一は修學院村の東なる雲母坂よりし、一は八瀬の里よりし、八瀬よりせば先づ横川に入り、雲母坂よりせば先づ無動寺に入るべし




いづれよりするも随意なりといへども、雲母坂の方少しく険を免かるにあらずや、さてこの山は海面を抜く二千七百尺ともいへば、その高さことは言はずもがな、老松喬杉は峯を蔽ひ、その陰森なること晝も猶は暗きところあり、而して清爽なる山氣と、快澗なる眺望とは、實に避暑は勿論、他の時といへども登臨の客を引く材料なりとす、抑々この山には東塔、西塔および横川の三塔ありて、東塔の南に無動寺といへるあり、さて一般の眺矚をいはい、遠くは四國の山々をも望むべく、近くは江の琵琶湖を掬すべし、その他の名勝なり古蹟なりは、こゝに言ふに違わらず、さればその登降の路は遠しとするも避暑には好位置たるを失はざるなり、外國人は妻子朋友と共に、天幕を張りて暑月を消暑するもの多しといふ、亦以て如何に好場區なりやを知るに足るべし。

叡山の勝景はこれまでとして、前路を辿り融通寺といふに出づ、こ



は大原村に近きところなり、その東の方に音無瀧といふあり、その高さは六十尺幅十七八尺とす、懸崖にかゝりて流るゝ水は、その水量のさまで少なきにもあらねど、落下するの聲は有るも無きが如し、この名のある所以なり、四邊陰森たる樹木を以て蔽ひ、夏猶ほ寒さを覺ふ、亦一遊するに足る。

京都にて最も淋しき地を訪はんとせば、寂光院といはずは、大悲山といふべし、寂光院は京都より北方凡そ四里にあり、大悲山は凡そ十里もあるべし、奇を好むの士にあらざれば、訪ふものもなかるべし、偏者も亦これを訪ひしことなければ、案内せんことも得ならぬぞ、遺憾なるわざなれ、聞く大悲山の東方には、瀧谷の瀧といへるありて、その傍には太古の穴居の跡なりといへる石窟もありとかや、その奇巧は聞きしばかりにて、これを見しことなければ、案内する便りもあらざるなり。



これにて京都の北東の方は先づ盡くしたりとなさん、歸路に休むへきは、糺の川原なり、京の町はづれよりは遠からぬところにして、納涼にはまたとあるまじきところなりとす、この地は加茂川と、高野川との相會するの地にして、後ろには森々たる樹陰を負ひ、加茂御祖神社の社地に沿へり、その森を糺の森といふ、川原には御手洗川の一派が社頭より流れ来て、清は一段に清なり、毎年炎暑の候には涼棚を構へて酒茶をひさぐを例とす、人はその繁華を四條の夕涼に及ばすといふといへども、編者はその涼味の彼れに優れるを喜ぶ、されば俗客は多く彼れに遊ぶといへども、雅客は必らず此れに集れり。

上加茂、下加茂の兩社の嚴然と冒すべからざるは人の知るところ、亦これを説くの要なし、これより漸く北して市中より凡そ三里も行きたらんか、鞍馬山に入るべし、山は鞍馬口より市原、市原より野

中をいふを順路とす、牛若の天狗に習ひしといふを以て名あり、山は老杉亭々として日光の透射することなく、夏も猶は寒さを覺ふ、その道は怪石奇岩出沒して、行歩も殆んど艱めり、この山の鎮守は鞍馬山にして、こゝより東望すれば比叡山の相輪塔を見るべしとは、野崎左文字の名勝誌にて見たる様覺ゆれど、天氣模様のためによ、一点のこれかと思擬ふものもなかりしは遺憾なりき、されど地勢よりいへば、晴朗の日には見得べきには相違なからん、たゞ群巒重嶺の波濤とも見るほどに脚底に起伏せるさまの壯絶快絶なるは、眞に塵外の思あらしむるなり、彼の天狗の棲居といへるは、これは尙ほ十數町も上りたる所と聞けども、こゝにて脚を止めたり、若しこの上方に登りなば、種々の妙境を探り得るならんに、こゝにて逆戻りするは、遺憾なることどもなり。

鞍馬山よりの順路は、貴船神社なり、社内の光景夏時に適すれば、



これを拜するも可ならん、社は下の社と奥の社に分れ、その奥の社は極めて深邃幽靜にして、殊に寒人少なければ、所謂俗塵に超脱するものといふべし、止宿せんことは難けれど、一日の清閑を擅にするには足りて尙ほ餘りありといふべし。

これより北西に隣りて岩屋山といへるあり、金峰寺といふ精舎は山の中はどにあり、山中には飛龍の瀧をはじめとして、種々の名勝も多ければ、この寺に宿を假りて暑を避けんには、夏日の長さも忘るべく思はる、たゞ京都よりの路少しく険なるが上に、五里あまりもありといへば、人の訪ふものなきぞ遺憾なれ。

船の送り火といへるは、西加茂なる正傳寺の後ろにあり、この邊の勝景は頗る多けれど、多くは秋楓紅於の時を佳とすれば、こゝにはこれを詳らかにせず。

これより西山に至るの間に、大徳寺ありてその幽雅なるはいはずも



がな、こゝに止宿するを得ば夏も忘るべけん、それより建勳神社で
織田信長を祀れる社、櫻花に名高き平野神社などを過ぎて、次は
金閣寺に立寄るべし、閑は足利義満の築きしところ、林泉の巧みな
るはこれを筆するこそ却つて野暮のわざと笑はれん、固より四時の
眺めを分たねば、必らず訪ふてその幽趣を咀ふべし。

西山にて名高き三尾の地はこれからなり、三尾とは梅尾、楨尾、高
雄を稱せり、いづれも名は紅葉をもて稱せられたれど、楓緑の間に
杖を曳くも、亦消夏の一策なるべけれ、されども紅葉を本場とす
るの地なれば、今は多く口をたかざるべし。

梅尾の高山寺、楨尾の西明寺、高雄の神護寺いづれも登臨の勝地
たり中にも神護寺の鐘は、橋、廣相、菅是善、藤敏行の合作にな
る三絶の名鐘にして、その鐘樓は板倉勝重の建てしものといへば
、消夏の餘事としてこれを訪ふも可ならんか。



これよりしては御室の仁和寺、その東の龍安寺、この南の妙心寺、
西の等持院など、いづれとして避暑の區ならざるはなし、妙心寺よ
りは西なる双の岡、こは兼好法師の跡として、好事者は訪ふも可な
らん。

太秦にては廣隆寺より廣澤の池、この池は觀月を以て知らるれども、
夏夜の納涼にも風味自から多かるべし、池の周回は十二三町もあ
らん、その西北は大澤池、その西が大覺寺、その又西が清涼寺なり
、寺はその名に背かぬ清涼の地にして、消夏にはその一室を假るも
可ならん。

嵯峨の上方に峙てるか、愛宕山と呼べる峻嶺なり、山上を白雲山と
いふぞ樂しけれ、山の半腹なる一寺は月輪寺にして、寒蟬の瀧、高
野の瀧、もしくは龍女水などありて、渴を療するの便あり、この山
にても暑を避くるには適すれど、前の比叡山の如きにはあらざるな



り。
 二尊院即ち小倉山にある一寺は定家の昔をしのばれてゆかしく、野の宮は齋宮のことを想ひ出づべし、天龍寺、鹿王院など、尋ねんと思はれたづぬるも無益にはあらず、されを急ぎて観たきは嵐山なり、この山は京都より程近きが上に、今は京都鐵道の便さへあれば、往來は何のたゆたふこともなし、山はもと櫻花を以て著はれ、花時の風景は全國の罕に見るところといふ、殊に紅葉の勝にも富めば、その名の囂々しく、公園中の公園たりとはやさるゝも無理からぬこといふべし、こゝに此地の勝景と稱するものを列挙すれば

渡月橋

千鳥ヶ淵

戸難瀬川

戸難瀬瀧

大悲閣

鑛泉場

などその呼びものなるべし、而して舟遊の地は、鑛泉場より渡月橋



畔、三軒家あたりまでとす、たとへ俗客の集り湊ふといはいらへ、俗も亦雅に化せしむべきものあり、避暑にはもとよりいやしくも京都に遊ばんものは、こゝを餘外にしてならぬことなり、猶ほこゝにて紹介せんとするは保津川の奇勝なり、保津川は大堰川の上流にして丹波より來れるもの、その水急駛にして、これに遡らんことは容易のわざにあらず、舟行既に容易にあらざれば、舟中の探勝も幾何か愉快を殺ぐものあるべし、如かず、波の龜岡に陸行してこれを下らんに今は瀛車の便あればいとやすきことなり。
 保津川といへば、誰れ知らぬものもなき絶景の川なるか、こは桂川の上流にして、保津川に至りて大堰川と呼べるものなり、その絶景を賞せんには、前にいへるが如く龜岡より嵐山までの間を下る三里ばかりのところなりとす、この間は兩岸といへば削るが如きの絶壁なるに、緑樹芳草が枝より面白しその間に点綴し、河身は奇石怪岩

の大や小や、磊々落落として縦横に点出し、急端のこれに激して飛び散るさまは、時ならぬ雪かとも思はれ、それかと思れば渦まくととき深き潭となり、一瀉奔下矢を射るが如くも見え、得もいはれぬ景色なるが間を、舟夫はよく慣れて、その縦横に点出せる奇岩怪石の間に櫓櫂を用ゐず、一竿の棹を手にして舟舳に立ち、彼を避け是を轉じ、巧みにその間を操るさま、舟を以て岩石の間を縫ふといふも、中々景容し盡すにあらざるなり、この川下には香魚を網すること多ければ、漁夫を命ずるも樂しかるべく、晩春に躑躅花の勝を併せ賞するも樂しかるべし。

保津川の奇勝を以て西山の探勝を終へたるものとして、一ト先づ京都にと歸り、これより更に轉じて他の夏を賞せん。

伏見街道を南にと走りて、二十六町ばかりを行けば東福寺なり、名たる通天橋の紅葉の勝地にして、緑楓の間に小憩するも一佳なり、こゝより十餘町にして稻荷神社あり、御山廻りも興なきにあらねど、消夏としては些、

社の南に寶塔寺といへるあり、その地は幽寂にして固より俗塵の侵すこともなければ、避暑の客はその一室を假りて夏を消するもよかるべし、路を南に取りて伏見街道を行けば、深草の里や、藤森神社や、墨染寺や、いづれも訪ふべしといふはどにはあらず、その間桃山は宇治見臺の觀あれば、上るも亦一樂ならん、その觀るところは淀川より巨椋の池なぞにして、一語これを評すれば、清絶ともいふべきか、これより伏見の町にはほと近し。

伏見も一寸したよいところなり、淀川の流を帯びたれば、夏は一段とたのし、御香宮、伏見城趾など見るもよからん、されど夏の伏見としては、また夜の明けはなれぬに、巨椋の池を訪ひてその蓮の清きを賞し、歸りて觀月橋下に舟を僦ひ、網を命ずるを一番の快とは



すなれ。
巨。棕。の。池。は。そ。の。周。回。四。里。に。及。ふ。と。い。ふ。大。池。に。し。て。池。に。は。蓮。花。多。く。
又。尊。榮。に。富。め。り。夏。の。拂。曉。に。舟。を。翠。蓋。重。々。の。間。に。棹。せ。ば。露。珠。点。
々。と。涼。衣。に。灑。ぐ。さ。へ。あ。る。に。紅。唇。の。佳。人。は。行。く。先。き。に。迎。ひ。て。清。香。
の。涼。風。に。動。く。な。ど。多。く。は。得。が。た。き。の。光。景。な。り。惜。め。か。な。近。來。蓮。花。
の。數。を。減。せ。し。こ。と。を。

觀。月。橋。は。そ。の。本。名。を。豐。後。橋。と。い。ふ。觀。月。の。勝。あ。る。を。以。て。こ。の。名。を。
命。せ。し。も。の。な。り。橋。の。上。下。水。深。く。し。て。清。し。游。泳。に。熟。す。る。も。の。は。一。泳。
を。試。む。る。も。可。な。ら。ん。こ。の。邊。鯉。鮒。な。ど。の。多。け。れ。ば。こ。に。網。を。投。
じ。て。そ。の。鮮。を。割。き。こ。れ。を。下。物。と。し。て。一。酌。を。催。す。な。ん。ど。晝。間。の。納。
涼。と。し。て。愉。快。な。る。も。の。と。い。ふ。べ。し。

伏。見。よ。り。汽。車。の。便。に。よ。り。て。宇。治。に。至。る。べ。し。宇。治。に。は。名。た。ゝ。る。茶。の。
産。出。あ。り。建。造。物。と。し。て。は。平。等。院。あ。り。遊。觀。に。は。宇。治。の。螢。狩。な。ど。

その消暑の具としても一ならざるなり。

宇。治。町。は。宇。治。川。に。沿。へ。る。一。市。街。に。し。て。地。は。清。麗。瀟。洒。に。富。み。旅。館。
菊。屋。な。ど。に。俺。留。し。て。思。ふ。が。ま。に。輾。轉。以。て。夏。を。消。せ。ば。こ。よ。な。き。
愉。快。な。る。め。り。新。緑。の。頃。と。な。れ。ば。茶。摘。の。歌。に。一。種。の。風。趣。を。添。へ。夏。
夜。の。清。娛。に。は。撲。螢。の。遊。び。な。ど。た。れ。か。こ。れ。を。否。認。す。る。も。の。あ。る。べ。し。
平。等。院。は。避。暑。と。し。て。の。觀。は。こ。れ。な。し。と。い。へ。ど。も。兎。に。角。そ。の。鳳。凰。堂。
の。名。は。世。界。に。聞。え。た。る。も。の。か。な。ら。ず。や。一。覽。す。べ。き。な。り。

こ。の。他。近。邊。に。存。す。る。縣。神。社。淀。の。城。趾。な。ど。は。別。に。尋。ね。ず。と。も。の。
こ。と。な。り。

横。島。は。宇。治。よ。り。は。十。町。ば。か。り。も。あ。ら。ん。も。し。月。夜。に。も。遊。近。せ。ば。一。
遊。す。べ。し。釣。月。と。て。名。あ。る。觀。月。場。な。り。

興。正。寺。は。宇。治。川。の。畔。に。あ。り。山。吹。を。以。て。名。を。得。たり。そ。の。庭。園。は。泉。
石。の。雅。を。稱。せ。ら。る。れ。ば。一。遊。す。る。も。よ。し。聞。く。こ。の。寺。近。來。請。ふ。人。の。

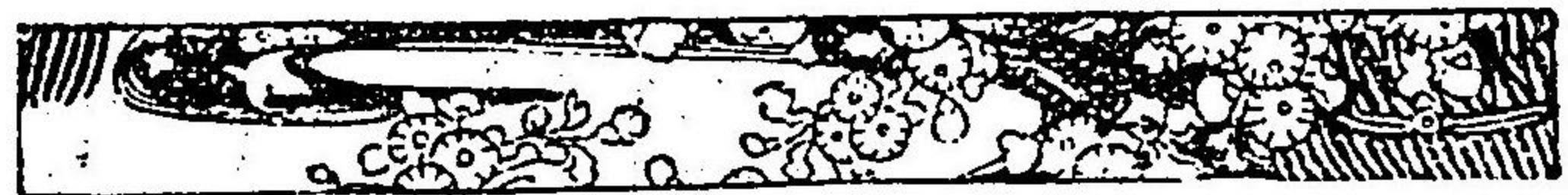




便によりて臨時その室を貸すといふ、避暑の客には幾多の快ならんか。
 黄檗山は、その伽藍壯嚴にして、その境内幽静なれば、路すがらこれを訪ふも可なり、寺號は萬福寺といふ、支那風に模したる建造物にして、域内の各堂は今こゝに筆せずといへども、餘所に見るべからざるの巨刹なり。

こゝにいふ、京都より官線鐵道によりて山科停車場に下車し、醍醐より、山科など一遊せんも樂しかるべし、こゝは別に物するほどにあらねば順路として少しくこゝに附記すべし。

醍醐寺は深雪山といふ、山科停車場よりは十町あまりなり、この地老松古杉蒼蔚として、もとより日光を見ざるが上に、山氣は森々人の肌骨を侵し、酷暑の候といへども、身に汗せしことを知らず、その伽藍の壯なる、由緒の古きなどはこゝにこれを略せり。



三寶院は醍醐寺の山門外にあれば、これまた訪ふべしとす。

こゝより北西にあたりて小山といへる地あり、その村に牛尾山法嚴寺と呼べるありて、地はもとより幽寂、遊人などは稀にも見ざるほどなるに、銚子瀧、仙人洞、白糸瀧など呼べる消暑の材料は著へられぬ、半日の閑を偷んで一遊せば、蓋し快哉を三呼するものあらん。

四の宮河原、大石の舊宅、奴茶屋など、その名は猶は残れど、亦以て消暑の料とするには足らず。

勸修寺、山科御坊、元慶寺など、訪はんと欲せば訪ふもよからん、別に案内するほどにはあらざるなり。

さて宇治よりは再び汽車の便によりて木津驛にむかふ、この行笠置山の勝を探り、避暑の區を求めんとするなり、木津は小市街なり、されど別に訪ふところもなし、その近傍なる瓶の原、柞の森なども



亦別にこれを案内すべきはなし、これよりかよいよの笠置山なり、笠置山は、元弘のむかし後醍醐天皇の行宮を定め玉ひしより、多くの名勝も稱せられたり、山は笠置村に屬し、木津川の南に聳へたり、その山嵯峨登り易からずといへども、鬱葱たる樹木は日光を遮りて登攀に便にす、さてこの山の勝景といへば、その數一二にして足らずといへども、寺は文珠院および福壽院などありて、行客には快よく宿を貸すが故に、大に便利なるを覺ふ、文珠院の傍には虚空藏、薬師などいへる三巨石あり、こゝを過ぎて北すれば大石門あり、彼の東のぞきの岸とは、こゝをいふなり、こゝより見下せばその懸崖幾十仞なるを知らず、崖の東に小瀑かゝれるも愛らし、その他古蹟もいと多けれど、後醍醐天皇の行宮の蹟といふは、その石門よりは西に去りしところとおもはる、笠置石なども聞けど、一々はこれを述べがたし。



笠置村に一の炭酸泉を湧出せり、地は村の大字有市に屬し、木津川の中にありと、その温度は華氏の四十六度にして、炭酸氣にして曹達および塩鉄土分を含めり、腸胃病、肺病、咳嗽等には効ありといへり、一浴も登山の疲れを休ふに足らん。伊賀の國境なる大河原村大字北大河原に一の瀑布あり、明神の瀧といふ、その高さ百五十丈、左右に巨岩峙立して、その風景の壯觀なるは、僻境の多く觀るを得ざるところなり、その下流は木津川となる、觀瀑者は一遊すべきところとす。このあたりその深山相重なるの境に、訪ふべきもの少しとせず、今その一二をあぐれば、湯船村の西に百丈山大智寺といへるあり、東和東村に鷲峰山金胎寺といふあり、これ等はいづれも絶奇絶快なる勝景を有すれば、すでに笠置の諸勝を訪ふものは、そのかへるさにかならず一遊すべきものなりとす。

この他瀑布の小なるものは、猶ほ處々に多く見聞せりといへども、別に案内すべきはとにあらざるなり。

京都からの觀覽すべきものは、ザツと是位のものならん、が今一線の残りしものあればこれを掲げて最終となさん。

京より西へ向つて向日町に下車し、勝持寺および西岩倉金藏寺、西山三鈷寺、柳谷觀音などを順次に訪ふもの亦一の樂みなるべし、されど納涼なり避暑なりとしては長岡の天満宮ならんか、これも別段に數へたつるはとにあらざるなり。

少しく離れて八幡の男山神社の如きも、賽詣すべきの地なりとはいへども、本書の趣旨と異なるものあれば、別に案内もせざるべし、この方面にては椎尾瀧、井堤玉河など、路すがらこれを尋ねるも可なるべし、その他、このあたりにて別に避暑なり、納涼なりの同伴とすべきところもなければこゝに暇を告ぐべし。

大和めぐり

大和は畿内にての大國なれど、山又山を以て取り圍みたる地なるは、皆人の知るところなり、されど避暑といふ遊びは山と川との二つあるにあらざればその意を得ぬはいふまでもなく、かつや既に山の重りあふ上は川の縦横に通することもいはずもがな、中には瀑布などの暑氣を洗ふよすがも多かるべし、いでや大和の諸勝を尋ねて避暑の家の東道たらんか、さはいへ、その北部には鐵道の交通もあれど、南部にはその通路さへなきが上に、山は一段と深ければ、とても千金換へがたきの勝景はあるにもせよ、汗水搾りて訪ふ人は多くはあるまじ、されば先づ交通の便てふことを經として、その他は名だゝるものゝみを書き列ぬべし、いでや先づ奈良を遊びはじめとして、これより足の向ふがまゝに案内すべし、關西鐵道に依りて港町



大より乗車せば四十分立つか立たぬ間に王子にと着くべし。こゝは早や大和に属すれど郡山、法隆寺、と共に歸りの遊びに残し置き、一直線に奈良にと志しぬ奈良は平城の都の名と共に探討すべきの名所勝景はいと多しといへども、その神社佛閣などを尋ぬるは、この次のあそびの本意にもあらず、且は既に多くの案内記などあれば、事新らしく茲には物せざるべし。たゞ好事者が奈良名所を擧げぬを以て擯斥せらるゝこともやとおもへば、それも口惜しき限りなれど、要を摘んでその所在のみを列記すべし、若し車を飛ばしてくると一と廻りするも奈良を見て來たとの土産話には足りぬべし。東大寺町の大字雜司にあり、名にしあふ奈良の大佛の本尊として安置せらるゝところ、殿舎佛像の周圍は奈良博覽會場となすを例とせり、又舊境内の正倉院は、勅封の寶庫にして、拜觀を許されぬこそうたてけれ。



興福寺町の登大路にあり、俗に春日寺とも呼べり、度々の火災に今は焼け残りし南圓堂、北圓堂、五重塔等にして、塔は高さ十五丈六尺といふ、南圓堂と共に市街の壯觀なり。春日神社町の東、春日野に在り、官幣大社にして、社殿の壯麗中々に盡されず、殊には九百八十八の金製、千七百八十九の石造燈籠をもつて稱せらる、その上方に聳ゆるは春日山といひ、彼の三笠の山といふもこれなりと聞けりその西北に隣れを嫩草山といふ、山嶺の風景は佳絶にして、春秋の登臨には頗る適せり、山麓の手向山に到る道すがらには、奈良名物の人形や、鹿角細工、鹿のまき筆など賣るも多し。手向山は秋の名所なり、紅葉の錦は早く菅家の和歌にて知らる。二月堂および三月堂は、嫩草山麓にあれば、見まじとすれど目に入るべし、中にも二月堂の水取りと人口に膾炙せられしものを。

その他、大塔宮が難を大般若經の唐櫃に避け給ひしといふ般若寺は、町の北端般若寺村にあり、尙ほ十輪院、極樂院、多門城趾、新薬師寺、安養寺など、一々擧ぐるも煩しければ、こゝあたりにて筆を留むべし。

さてこの奈良にて避暑の場所といへば、南圓堂の下に一面の鏡池あり、これなん猿澤池にして、百八十六間餘の小池なりといへども、夜間に池畔を行吟するはいと快なり、衣掛の柳など幾分の景を添へたり。

雪消の澤は、春日神社の大鳥居より南方にあり緑草繁きところに、群鹿と起臥を共にして興するも樂し、されど盛夏の頃は愉快とも感せられざるなり。

町に屬する川上村といふに鶯の瀧といふあり、高さは僅かに五丈餘幅も二丈ばかりなれど、三伏の熱腸を滌ふには足れり、西行法師が、

氷をたゝく鶯の瀧と詠せしは是なり。

奈良にては、先づ此位のものなるべし、その旅宿は武藏野、金波樓、明秀館、三景樓などその首位を占むるもの。

月瀬梅林 その梅を以て天下に顯はれしは世の知る所、今は時節はづれのことなれば、梅に就ては再び言ふまじ、言ふとも早や後れたる事なれば、言はぬは言ふに増したるものこそいふめれ、さるを殊更にこゝに掲げ出したるは、この月の瀬が避暑に適したればなり、梅の頃ならんには遊人もいと多く旅宿の選むべきもあるまじされど避暑の頃には餘程の物好きならねば、訪ひ來るものもあるまじく、その身を容るゝの地も思ふがまゝに任すぞ心地よけれ、さて谿間を流るゝ川の清く澄みわたりたるが處々の小石に堰かれて水瀬の亂るゝに、涼しき月の影映りて玉を碎くかと思ゆるなど、何んと言へたものにあらず、それは夜の景色なれ、日午とても幾万千の梅の



枝ぶりの面白さが、緑の葉をいやが上に繁らせたるさま、そを高さ
 旅宿の竹欄より眺むるなど、如何にうれしき眺望ぞや、その境は幽
 静にして、その景は閑雅なり、假寝の夢はいかに香はしくやあるら
 ん、こは夏の拙堂として案内するにぞある、その道路は上野よりす
 るを最と安しとするは、はや人の知るところなれば、物知り顔に徒
 口を叩きて胡廬となるを避くべし、もし笠置山に上りて月瀬にと志
 す人あらば、一段と樂きこともあるべし、又龍王瀧とて桃香野にか
 られるあり、僅かに三丈六尺の高さといへど、時にこゝに浴する
 もよからん、こは桃香野四十八湍の一とぞ聞えし、月の瀬とは西北
 に凡そ一里ばかりも隔つべし。

因にいふ、こは奈良のつゞきにもものするも異なるものなれど、奈
 良より東南にと行くべきたよりなければ、こゝにはさむことゝな
 りしなり、この以下は前にもとりてそこゝと導びかんめり。



郡山の停車場に下車して、そこらあたりを観るべきも少なからず、
 されど避暑としてさまでになきもの多く、寧ろ社寺の探訪といふべ
 きなり。

南都七大寺の一なる唐招提寺および薬師寺は、いづれも都跡村に属
 し、西大寺は伏見村に属す、七大寺といふだけに、その巨刹たるの
 ありさま一見の下に知るべし。

この寺々を訪ふときは、秋篠の里、秋篠寺なども遠からねば尋ぬる
 も可ならん、地は平城村に属したり。

法隆寺には、南都七大寺の一として、殊に建立以來その舊形を改
 めぬと誇れる法隆寺あり、その壯麗なるはいふまでもなく、殊に東
 の院は斑鳩の宮にしてその什寶の多きはこの右に出づるものも少な
 からん、濫りに拜観を許されぬ定めなれど、若し好き便宜もあらば
 拜観して一驚を喫するも可なり。



松尾寺は補陀落山といへるもの、矢田村にあり、境内はいと幽邃閑雅なるに、あちこちに神社や僧房の散点せるも、一しほの景を添へておのづから人世の外にあるがごとく思はる。

王寺より下車すれば、その北は多く山間の地のみにして、山間だけに避暑には頗る快味を覺ゆるところ多し、その重なるものを紹介すれば紅葉に名を得し

龍田川は、いかさま紅葉の景のよかるべきことは兩岸の楓樹てにも知らるれど、さりとて盛夏に、緑の滴たらんばかりの影が川水に映るもいと清涼を覺ゆるなれ、三室山に登臨するなど、蓋しこの邊の避暑場に數ふべきか。

丹波市の驛に近きあたり、山邊村の石上神社は官幣大社なり、その山に據りて社殿を構へたる、高潔、瀟洒なるさま、神威の高さを仰ぐべし、こゝより東にありて桃尾瀧といふあり、高さは七丈餘、幅



は一丈餘とす、白虹の瑣殿の間にかゝるものその壯快言ふべからず。長谷の觀音は、初瀬町の北端にあり、櫻井の停車場より二里に足らず、その由緒の深きことはいふも更なり、境内の森嚴にして且つ廣大なること、大和にての名刹といふべし、こゝは櫻花に著れ、殊に壯丹に賞せらる、されど夏時の蒼翠も何んぞ彼の花に譲らんや。不動瀑といふは、松山町よりは一里あまりの神戸村の南西にあり、僅に二丈五尺の小瀑たりといへども、四邊綠樹を以て圍まれたればその幽邃なること、夏も猶ほ寒さを覺ふ、松山よりは好避暑場なりとす。

松山町より一里ばかり東に入忍鳥神社といふあり、伊那佐山に對して、肅も及ばぬ風景は、道のやゝ隔だゝりしをも、その險はしかりしをも苦には思へぬ勝區とす、殊に瀑布の懸るもあれば、避暑の客は訪ふてその清味を掬すべし。



これより東北に進むにつれて、小瀑布いと多けれど、その山奥なるがために、訪ふ人も少なかるべければ、こゝには多く述べざるべし、たゞ三輪町より初瀬・榛原を過ぎ三本松といふあり、その相距ること六里ばかり、こゝには擔瀧、西瀧、東瀧、龍神瀧などいふ多くの瀑布ありて、その景致極めて賞すべければ、一遊するも可なるべし、殊に三本松には茶店旅店の設けあれば、三伏の暑を避くるには亦好場區なるべけれ。

櫻井町を東南に二十町ばかり、茲は名に聞えたる多武峯の登り口にして、談山神社の在るところ、凡そ境の幽邃と社の壯麗を稱するもの、東には日光の東照宮、西には多武峯の談山神社といふほどなれば、その如何に壯大觀美なるかは推しはからるべし、さて登り口より一町毎に樹てたる石標を數へて五十町はじめて神域に達す、もとより山間の地といへども、さまで嶮岨なりといふにもあらず、而し



てその翠巒を負ひ碧流に面したるところ、只管神威の高きを仰ぐべし、満山楓樹と櫻樹とを多しとす、春秋の風景果して如何ぞや。この山中に華嚴の瀧あり、高さ三丈にすぎずといへども、おのづから塵寰を脱したるものあり、亦觀るべきなり。

此の地畝傍の驛よりは禮原神宮に參拜すべく、壺阪の觀音、久米寺に詣つべく、下田驛よりは當麻寺に賽すべく、轉じて御所驛より鯨の瀧、茅原吉祥草寺に、葛驛より吉野山へ、北宇智より久留野地福寺へ、五條驛より榮山寺へなど、いづれも探訪の勝と參詣の社寺とに乏しからず、されどもあまりにくどくしければこれを略せり、而して吉野の如きは別項に之を紹介すべし、たゞ五條は一方高野山に通ずるの路すがらにして、殊に吉野川の鮎における、榮山寺即ち梅室院の眺望における、避暑としてはこの國西南の唯一たる場所なれば、旅装を卸して消夏の樂しみを盡すべし、榮山寺は客の請ひに

よりて逗泊を許すとも聞けり、一層の妙ならん。

下市驛は、吉野川の南岸に臨む、亦一小都會といふべし、宅田彌助といへるは、彼の維盛の舊跡にして、今に釣瓶鮓をひさぎ地方の名産たり、その邸園には假山などありて、風景頗る佳なり六田の淀もこゝよりは程遠からぬ所なり。

上市は吉野川の北岸にありて、吉野山に登るには、この地の近傍櫻の渡しよりするをよしとす、吉野川をへだて、本善寺あり、寺は飯貝に屬す、その風光就て見たき心地せらる。

上市より東北一里半ばかりに龍門村あり、その大字山口村の上に龍門山ありて、山中に龍門の瀧と白倉の瀧とあり、兩者共に高さ三丈ばかり、その蔚然と蒼翠を凝らすを以ておのづから俗塵の氣を脱せり。

吉野山は歴史上の有名なるどころにして、殊に櫻花を以て著はる、

は世の早く知るところなり、登山の路四條あり、一は高取山よりし、一は芦原峠越といひ八木街道よりし、一は多武峯より上市に出るもの、一は戸毛より草阪を越え、六田よりするものにして、第四の道を最も平易なりとす、されば山勢および險夷の度よりして、六田より登り上市に下るを普通なりとなす、所謂一ト目千本、奥の千本などいふものあれど、こゝは花の節に要あるものなれば、こゝには略すべし、この他に觀花としての奇境妙域は盡すべからざるものあれど、こゝには之を省くべしといへども、夏時も亦四面の蒼綠は、消暑の料とならざるはなく、決して捨つべきにあらざるなり、猶ほ花時の案内をなす時を待て之を詳にすべし。

吉野町の中央に藏王堂あり、堂の南に吉水神社あり、共に名あるどころにして、吉水社は瀟洒閑雅山中の第一となす、如意輪寺といひ、竹林院といひ、西行庵といひ、いづれも山中勝景を稱せし地にし



て、而して殊に歴史の材料なるところ、吉野山に遊ぶもの、餘所
すべからざるものとす、その他猶は訪ふべきもの多けれど、一たび
吉野山に入らば、おのづからその勝概を訪ふを得べし、且つ煩はし
ければこれを記せざるなり。

清明が瀧、奥の院より左方一里許りのところにあり、川上村に屬せ
り、その高さ十六丈といふ、壯觀の狀愛すべきなり、この傍程遠
からぬに大瀧といへるもあり、又壯快なりとなす。

宮瀧といへるは、吉野川の上流にして、名は瀑といへども實は潭な
り、その邊兩岸の景色より、水流の光景に至るまで、頗る奇觀にし
て、尋常の評語を以てこれを斷すること能はざるなり、吉野瀧めぐ
り中の第一奇勝となす。

山上ヶ嶽は一に大峰山と稱す海面を抽くこと六千二百餘尺、絶頂に
藏王堂あり内に藏王權現の像を安す傳へて役小角の作なりと云ふ、



毎歲夏季諸國の信徒伍を成して之に群賽すること猶は富士詣等の如
し、吉野の奥院より登れば東南に距ること六里許、其間山路峻岨に
して大天井、小天井の二峰を踰ゆ路に沿ふて茶店あり中、ハと云ひ
守屋と云ひ足摺りと云ひ百丁と云ひ今宿と云ひ洞辻と云ふ洞辻の茶
店は洞川村に屬し之を過ぐれば鐘懸岩あり又西覗岩あり是れ等の峻
峻を歴て即ち此に達す、三面巨巖多く南面に涌出岩あり東北二面に
蟻の門渡、飛岩、東臨岩、行者岩、屏風岩等あり西方には稻村嶽を
遠望すべし、是れより又東行して小篠に至れば行程凡そ一里許、行
者堂、聖寶堂、護摩石壇、大黒窟等あり、又西南に行くこと一里許
にして脇宿に達し又南すること一里許普賢ヶ岳に到り尙は南する一
里許を兒宿とし又南する一里許を行者歸とし又行くこと二里八町彌
山に入り又五里許を南すれば釋迦ヶ嶽なり其山下を神仙の宿と云ふ
又南すること十町餘にして大日ヶ岳に至り又南すること一里許小池

宿に至り又南すること三里許平地宿に至り又南すること二十町許轉法輪嶽に至り又南すること二里十六町此間佐陀辻行善宿等を経て天狗嶽に至り又南すること一里餘地藏嶽に至り又南すること二十七町許東屋ヶ嶽に至り又東南に行くこと十八町仙ヶ嶽に至り又西すること三里二十町古屋宿に至り又南すること一里十四町花折宿に至り又西南に行くこと二十五町土室嶽に至り又西南五町にして玉置山に至る、北吉野山より南玉置山に至るまでを山上ヶ嶽の峰中と稱へ所謂行者往還の靈場となし小篠に於て潔齋して之に入る、山中處々に岩窟多く其數三百八十餘、就中蟪蛄ヶ窟、釋迦の窟、菊の窟、蝙蝠の窟、笙の窟等は殊に偉大なる者にして蟪蛄ヶ窟は洞川の東方に在り深さ百二十間濶さ四尺許内に二泉あり龍沙川と云ひ彌勒淵と云ひ、釋迦の窟は一に水晶窟と稱し石乳凝結して珠玉纓絡の狀を爲す深さ凡そ五六十間、川上村大字北和田の東に在り又菊の窟は同村大



字柏木の東に在り深さ二十四間許内部の岩石悉く菊花の紋を爲すと云ふ。

十津川温泉は舊十津川郷内に三箇の温泉あり一は十津川村大字武藏に在り之を東泉寺の温泉と云ふ泉質硫化水素、硫酸、鹽化等を含むし消渴、疝氣、痲疾、瘡毒、打撲、金創等に宜し、一は柳本湯と云ひ東十津川村大字桑畑に在り泉質東泉寺温泉に同じく其効亦之に異なるなし、一は西十津川村大字出谷に在り土人之を新湯と名く泉質亦右の二泉に彷彿し痔疾、脚氣、痲疾、瘍瘡、及び婦人帶下に宜し。川上温泉 舊川上莊亦二ヶ所の温泉を有す一は入之波温泉と云ひ川上村大字入之波に在り泉質硫化、炭酸、硫酸等を混じ疝癩、痔疾、微毒、打撲、金創等に宜しく一は菊の平温泉と云ひ泉質効能共に上に同じ。

善山 中十津川村大字小原の南に在り山甚だ高峻ならずと雖ども四





望稍や開豁にして蘆瀬川の清流其麓を繞る。昔護良親王の逃れて熊野に趣き給ふや此山頂に憩ひ善き山と稱し玉ひたるより其名を傳へしとぞ又當時親王此に一首の和歌を咏せられたりと云ひ土人路傍に石碑を建て之を刻す曰く琵琶酒音毛昔爾變江天物凄志蘆瀬川廻瀨々酒水音と蓋し古來十津川郷に琵琶の里の異名あるより歌意之に及ふ乎、附いて云ふ其異名に就き或人の説に郷中午夜人静かなる時鏗鏘たる音響甚だ琵琶に似たるを聞き其發する所を知らず故に琵琶の里と名くと著者亦嘗て屢々同郷に泊したることありて其音響を聞けり惟ふに深谷の溪流、山嶺に反響し風に隨ふて或は聞え或は聞えず自ら美音を爲すものなり。

郡内諸瀑 山多く溪多く 隨て又瀑布多し一々之を掲げんと欲せば僅々の紙數能く彈記すべきにあらす故に今高さのたかきものを撰び表を以て其所在地及び高瀬等を示すこと左の如し。



瀑名	所在地	高	瀬
七尾瀧	高見村木津	三十丈	二丈
中ノ瀧	上北山村小像	百一丈二尺	一丈五尺
西瀧	同村同所	六十丈	四丈八尺
男瀧	同村白川	六十五丈	一丈二尺
女瀧	同村同所	二十五丈	同上
千尋瀧	同村同所	九十丈	一丈五尺
深瀬瀧	同村同所	五十五丈	六丈
大瀧	下北山村前鬼	七十二丈	一丈
不動瀧	同村同所	五十七丈	一丈六尺
千手瀧	同村同所	四十八丈	同上
馬頭瀧	同所同村	三十六丈三尺	同上
止瀧	同村同所	三十丈四尺	一丈



瀑名	所在地	高	濶
唐大戸瀧	同村上池原	五十二丈	一丈七尺
紫流瀧	天川村籠山	三十五丈一尺	一丈八尺
猿木瀧	同村河合	廿四丈七尺	三丈
阿弘瀧	天川村洞川	三十六丈	三丈
箒木瀧	同村同所	三十丈	一丈二尺
宗門瀧	同村北角	三十丈	二丈
瀧脇瀧	大塚村篠原	三十丈	二丈五尺
東瀧	同村清水	三十丈	一丈八尺
中西瀧	北十津川村杉清	四十五丈	一丈
十二瀧	同村七色	三十六丈	三丈
飢生瀧	同村重里	四十丈	二丈三尺

(山上ヶ嶽以下は野崎ぬしの地誌より萃録したり)

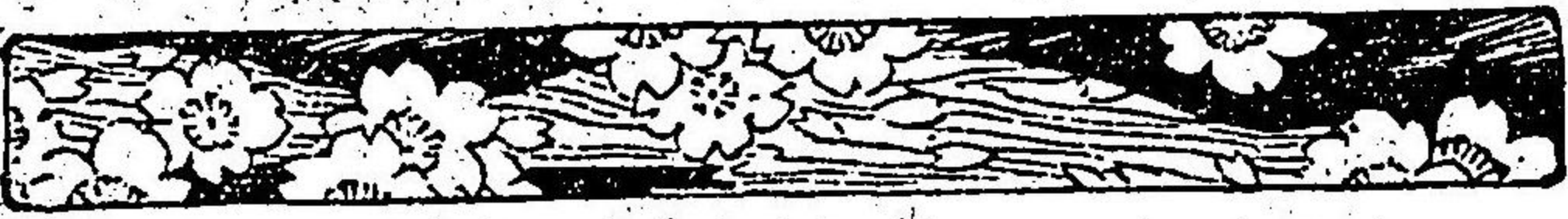
河内の避暑

河内には關西鐵道が便利を通せしめれば、その勝景を避暑の間に、
 くに尋ねんものと、さて避暑はいつこにや首をひねりても飛び切
 つた案も出でず、先ず元寺の瀧、清瀧、権現瀧、生駒山、長尾瀧、
 信貴山、葛城山、金剛山など、は、誰人も數ふるところなり、さ
 れどこれだけでは本意なくもおもはるれば、いでや三日の旅と覺期
 して、避暑の好區を探らんに、まだ人に知られぬ一番駆けの功名を
 博することもあるべきか。

關西鐵道の網島大驛より、四條畷の驛にと着く、別格官幣社の四條
 畷神社は飯盛山の西麓にあり、小楠公及び一族戦死者の靈を祭れり
 、この地は高燥にして、一方に飯盛山を負ひ、三方は攝、河、泉の
 平野を瞰下し、遠くは淡路島を水天髯の間眺め、播丹の諸山を

河内の避暑





も望むべし、その快潤なるは遊人をして、賽人をして、低回去る能はざらしむ、彼の四條畷の古戦場や、野崎の觀音は、いづれも社よりは七八町乃至十町の間であり、訪はんと欲せば訪ふべし、こゝより程遠からぬは清瀧なり、同名の嶺の西にありて、四十五尺の直下、十八尺の幅とす、その地は頗る幽邃にして、懸泉に對するときは、夏時の炎熱も知るに由なし、この瀑に隣れる茶臼山といふの半腹に、龍尾寺といふ寺あり、その路は崎嶇なりといへども、その眺望は西に茅渚の海を望み、又遠く播州の山を認め得べし、この一室を假りて暑を避けなば、夏を知らずに過すことを得べし、深夜萬籟なきのところ、遠く鑿々の聲を聞くものは、この山の奥なる權現の瀑なり、幅は二丈四尺、高は五丈ありといふ、心氣清爽塵外の思あらしむ。これより北して妙見山を訪ふ、山中の明星水はその名に違はざるも



のなりといへども、路の峻險なるは、とてもこの水を一掬するに價すべきにあらず、これより北にすゝめば磐船村に出づ、村の宇私市には獅子窟寺といふあり、こゝは亦一避暑場たるに適するの地なり、寺は敢て廣しといふにもあらねど、その境内には種々の奇石怪巖あり、加ふるに四望の快潤なるを以てして、西南には大阪城を糺糊の間に望み、澱川の流は屈曲して横はれるなど、畫も亦如かざるものあり、一二泊するとも倦むを知らざるべし。こゝより倉治村に向ふ、道路平易なり、こゝは名を聞かれたる桃の産地にして、春花の候には定めて絳霞のたなびくを見るべし、村より六七町へだて、元寺の瀑は掛れり、高五十八尺、幅六尺といふ、絶崖の中間に不動岩といへるあり、方凡を三丈ばかり、こゝに踞して瀑に對すれば、



河内の避暑

清爽の氣人の肌骨に沁し、夏も猶ほ粟するものあり。

此地より牧岡村までの間は、これといふ避暑の休み場もなし、村の不動寺といふより十町ばかり、長尾山の溪間に二條の瀑布はかゝれり、これなん長尾の瀑にして、一は雄瀑といひその高さ三十五尺、一は雌瀑といひその高さ二十尺、いづれもその幅は廣からずして、水勢もおのづから緩なりといへども、地境の閑静にして深遠なるが故に、一遊の價は十分なり、道のはどりに一小庵あり、一睡を貪るに適せり。

この途上に、暗時を訪ふも可なるべく、牧岡神社に賽するも可なるべし、社地には胡枝花および梅樹を栽えて遊園となしたれば、花時には大に風光を添ふべし。

信貴山は中高安村より二十五町にして山巔に達すべし、大和を東にし、攝河泉を西にし、眺望頗る快豁なりとす、然れども別に避暑に適するの地を見出さず、これを説くは單に觀眺の佳なるのみ、山下の南高安村には、教興寺といへるあり、その庭園の泉石は頗る風致に富めり、一室を假りて暑を避けんには、いと樂しき夏を過すべし。

此よりは二里ばかりを隔て、玉手村といふあり、こゝに安福寺といふ古刹あり、境内の風趣は頗る掬すべきものあり、避暑の客年々こゝに逗留するものありと聞けり、躑躅は殊に名所なり。

道明寺天神は、こゝより程遠からねば、賽するもよろし、たゞ避暑の具としてはこれなきなり。

譽田神社も亦道明寺天神と同じ、別に避暑として案内すべきものなし。

河内の避暑

き山にして、赤阪村より上るに一里半とぞ聞こゆ、岩橋と呼べる有名の橋あるのみにて、別にこれぞといふ偉観もなし、金剛山はその山つゞきにて、猶ほ七八百尺も高ければ、登阪の路も四里といふ、高ければ高いはと眺望の佳なるは自然の勢にして、その眼界遠く百里に達すといふべし、山上の金剛山寺に滞留すれば避暑に可なるを知る。

千早の城趾は、金剛山の半腹にあり、楠正成の舊城址として、今も本丸二の丸の礎石を見る、當時のさまを想ひ起し吊古の情に勝へざるものあらしむ。

南河内の南西部にして、川上村といふあり、こゝに観心寺と呼べる寺ありて避暑の宿を假るに適せり、その門は溪澗の流に對して、懸崖俯して瞰るべく、橋は兩崖の間に跨がりて、勢傍觀するを得ざらしむ、境域は高大にして樹木鬱蒼翠色滴らんとす、もとより屋

俗の氣なくして、又暑氣の侵すを見ず、猶ほ寺内に觀るべきものも多ければ、地の僻在せるを以て訪はざるなかれ。

金剛寺も亦由緒ある寺なれば、一遊するも可ならん、舊記等の觀るべきもの少なからざれば、寺僧に請ふて一覽するも樂しかるべし、後村上帝の宸居なりしとて名を知らる。

こゝより程遠からぬ光瀧寺といふは、寺に觀るべきものなけれど、光の瀧をはじめ、多くの小瀧ありて炎熱を驅るに適せり。

河内の避暑としては、先づこれ位のものなるべし。

泉州路

和泉の國は畿内にての最小國なれど、その一面の海に瀕せると一方の山嶽をたゞみかけたるが故に、山に海に探ぐるの名所の多さが中に、避暑としての勝地も少なからず、されどこゝには南海鐵邊の便

と、高野鐵道の駛ると共に、その沿道に就てのみ案内せんとす。
堺の大濱とは堺の停車場より程近き、堺港の南につける濱を稱したるものにして、前は一帶に茅渚の海を擁し、遠く淡路島と相對して、その左右には紀伊の翠巒より、攝播の煙峯を望み、海水浴場あり。白沙清く連りて避暑には屈指の地なりとす、その旅館としては茅海樓、丸三樓など、二層三層の樓を構へ、その魚は鮮にしてその風は清し、これなん泉州路第一の遊區といふべけれ。

堺の市中およびその近傍に、探るべき寺社いと多し、妙國寺の蘇鉄における、南宗寺の茶室における、少し離れては開口神社、大山の御陵、家原寺、法道寺、さては陶器山の十景など、遠くて三里内外の地なれば、堺を避暑の本城と定めて、時々これを征討するも亦愉快なるべきなれ

濱寺公園 堺を南に去りて港の停車場を越せば、濱寺の停車場なり、



この邊一帶に翠松蔚々と林を爲し、その濱は一面の白沙にして、須磨、明石、淡路島、紀伊の山々、一の谷、六甲山など、指点するまに、笑を含みて接するさま、なんともいはれたものにあらず、時に海水に浴し、浴了れば蒼松の間に徘徊するなど、いかなる病客も蘇生せではあるべき、料亭もあれば便利はいとよろし。

高師の濱とて名に高きは、こゝらあたりもその中にして、殊に本尊はこの濱寺にありともいふべきなれ。

このあたり遠近に、信太の森、大津の松原などあれど、別に語るべきはどにもあらず。

牛瀧山 此は楓樹を以て稱せらるゝところ、少しくかたよりたれど、見すてがたきは瀑布のかゝればなり、一二三の三瀑にわかれて、その高きは二十五丈の一の瀑、後の二つは二三丈ばかりなり、いかにも楓樹は山に満ちたれば、その頃の景色も想ひやられるれど、また

緑を凝せる楓林のさます。いと涼味を分つぞうれしき、大威徳寺、といへるは三四町をはなるのみ。

犬鳴山とて、紀州界に連れる一山あり、この山中に七瀧ありて、高きは三十六丈、低きは一二丈のものもありと、瀑と聞けば涼しさうなれど、その路すがらの峻しければ、わざく見にも往かじ、又見たとて別に涼しくなるほどのものにもあらずとのことなり。

深日の浦は深日の驛より下車して一里ばかり、その海濱は凡そ一里ほどの間、青松白沙例に依つて例の如し、遠近の眺望も頗る佳なり、而してこの間に烏帽子岩、冠岩などいふ奇岩の時てるもありて、殊に避暑には好き地なり、むかしは月と千鳥とのみをとこの名物の如くに稱えしとのことなれど、それもそれなり、これもこれなり、徒らに古への勝にのみ奪はるゝ勿れ。

猶ほこの他にも訪ふべきところは少なからず、今その名ばかりをも

のして参考とせんぞす。

施福寺 河内の界なる榎尾山の山嶺にあり、こゝには清水の瀑、隠れ水などありと、路は極めて険悪なり。

岸和田 國の中央なる一市街なり、海岸なればその風景もあしからねど、堺、濱寺などには迫も及ぶべくもあらぬなり。

石の寶殿 躑躅ヶ岡 金熊寺 飯盛山

などもあちこちにあれど、避暑としては別に稱すべき程にはあらざるなり、要するに和泉の風景は茅海の海を主人とし、紀、淡、阿、播、攝等の山を客として、いと面白う配合せしものといふべきなれ。

中國旅行 其一

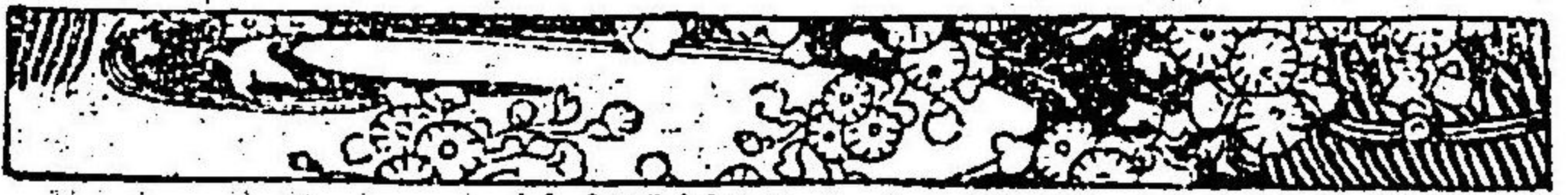
攝播……………但北 但北……………丹播

この次の旅は、目ざす敵は城の崎にありとの出立ちなれど、もとより急がぬ旅のことなれば、先づ一般方略としては左の如く定めぬ。

- 神戸 布引の瀑
- 須磨 海水浴 敦盛塚 松風、村雨の舊蹟
- 舞子 海水浴 五色山、遊女塚の舊蹟
- 加古川 高砂の松、曾根の松、手枕の松、尾上の鐘
- 姫路 内外
- 香呂 炭酸泉 播磨富士
- 福崎 文珠菩薩七草の瀧
- 生野 銀山
- 山口 銀山義舉十七士の墳墓
- 豊岡
- 城崎



斯くも一般の方略が定まりし上は、今は市中の塵喧雑沓を耳にせんも、本意なきわざなればと、旅衣一振はやくも梅田の停車場にと駈付け、行く手の樂しさを想ひ成せば、轟き走る汽車さへも尙は遅きを感じられ、一時ならぬ中に、神戸にと着きにけり。わが爲めの東道は、車夫の脛骨あまりに太とからで、背の高く年頃三十になるや、ならずのものこそ然るべけれど、やがて撰りに撰りて、布引の瀑へと、わが身を挽きもて案内せしめぬ。布引の瀑布は、神戸市葺合村の布引山の半腹にあり、雌雄の二瀑を稱せり、阪路を辿ること數町にして雌瀑はか、れり、高さは七丈三尺といひ、幅は一丈あまりに過ぎず、その水は旱天のためや、多しといふにあらざる上に、岩角に衝觸してその勢を殺がれ、奔下のさまは頗る緩なるを覺ふ、こゝより更らに上ること數町にして一瀑の掛れるあり、これぞ雄瀑と稱するものにして、高は十五丈幅も



前者よりは二三尺も風がらん、雄は雄だけにその奔下の状も頗る急にして、こゝにて布引の瀑といふに満足せらるべし、阪路には茶亭ありて、客を引けりその佳絶のところを撰びて一憩するに、瀑の全景を俯瞰すべく、はや塵俗の氣を洗ひ初めたり、これより歸路に就きて、布引山麓の

布引温泉に立寄り、この邊すべて物淋しきに似ず、戸數の二三百もあらん、軒を並べて何んとなく山家らしからぬは、この温泉の御蔭に外ならず、處々に別荘なども見えたり、温泉は炭酸質鍍泉にして、過る明治十八年に、生田川の上流姥ヶ口の岩間に湧出するを見出し、この浴槽に導き來るものにして、儂麻私斯、子宮加多兒等に著功ありとかや、一浴を試むるに、浴室は清潔にして心地爽然たりしむ、浴客の集り來るも宜なる哉、菊水、富貴、常盤等の料亭あれど、午餐は諏訪山にてこの豫定なれば、車を急かせて諏訪山にと歸

り向ふ。

山は、神戸の山本通りの北にあり、山上に旅館あり、料亭あり、公園あり遊覽の人常に集まれり、一旅館に午餐を喫するに、神戸、兵庫の海は兩陣の中部落ち、東は住吉、御影の濱、西は二の谷、須磨の浦、遙かへだて、は淡路島なども、悉く指顧の中に合すれば、鮮魚膾炙の美味よりは、一入美しく食はれたり、こゝにも亦鍍泉ありて浴室を設けたり、その質等は、布引のものと同じ。

午憩の傍ら、主婦を呼んでこの山中に避暑としての借るべき家もありやと訪ぬるに、主婦のいふ様、こゝには然るべきところを聞かず、若し意もあらば、摩耶山こそ然るべけれ、とて、その状を語るに摩耶山といへば、六甲山の峻嶺のいひにして、菟原郡の上野村よりは山嶺まで十八町ばかりと聞きし、こゝに天上寺といふ寺ありて、遠く大阪灣十餘里の海上を望むべく、風景既に可にして、塵

俗の境にあらざれば、神戸よりは年々この山に上りて避暑するもの多しと聞けり、寺にては其座敷を貸し、もしくは料理の望にも應ずるとかや云々、今より來年の避暑の豫想せらるゝもをかし。神戸にて名高きは、湊川神社、生田神社などあり、兵庫には和田岬、清盛の塔など、その探るべきものも多けれど、そは諸書の既に記し盡したることなれば、茲には云はず、唯だ和田岬は、和樂園と稱する遊園地あり、園内に種々の設備あるが上に、海水浴もなし得べければ、一日がけの遊びは、こゝあたりも亦可なるべけん。

猶ほ一つの案内すべきは、湊山の鑛泉なり、こは湊川の上流にありて、神戸よりは半里あまり、地は奥平野村に屬せり、田舎めきて閑静なれば、避暑には一興あるべし、泉質は炭酸冷泉にして、沸して以て浴を取らしむ。

神戸驛より汽車にて西行すれば、僅かに十七分時にして須磨に着すべし、この須磨の浦といふは、東西の須磨村といひしにて、その海濱は例の白沙青松といふの外なし、風光の明媚なるはいふもおろかなることにして、和泉よりして紀伊、して阿波なんどの諸山を前に遠望し、近くは淡路島を盆水の一山と眺め、こゝにては汽船の烟を一抔して快走するよりは、白帆の点々と、坐して動かぬ風情こそ勝りて見ゆめれ、海水浴に適當なるはその浴客の多きにて知られ、わきて脚氣病に適當するとて、轉地療養にと入り來る人もいと多し、こゝには名高き松風村雨磯馴の味噌を賣る家多く、又戸毎に簾を掲げたるも、昔しをわすれぬさまの殊勝らしく見ゆ。

浴餘の散策には、第一が須磨寺まうでなるべし、街道よりは二三町に過ぎざるの道程にして、その本號は福祥寺となん呼べり、昔しの嚴めかしかりしことは、いふも無駄なり、今は荒れ廢りて、彼の青

葉の笛、辨慶が櫻の制札、敦盛が筆の和歌などいふ寺寶のみ残り、若木のさくら、義經の腰掛松も、これなりとて小僧の案内するに領くのみ。

一の谷も、西須磨よりは三四町なり、二の谷、三の谷、鏡拐ヶ峯など、ついに立ち並びて、源平咽喉の激戦を想ひ出さる、見るものとは別にこれあるを聞かず。

敦盛塚といふは、全く首肯する能はざるも、兎に角一丈有餘の五輪の塔にして、むかしをしのばれたり、敦盛蕎麥と稱するものは、塚の傍にあり、名物に旨いものなしといへば、風味は如何なるや知るよしもなければ、一椀を喫するも亦嘸の種ならん。

須磨の浦の風光は、飽くことを知らぬと、この行先に舞子といふもあれば、二十五分間ばかりを汽車の窓に、猶は海岸の翠を合みて、はやくも舞子にと着きぬ。

舞子の濱といへば、誰れ知らぬものもなき、播州路の海濱にて第一の地にして、その風光の佳絶なるは、彼是と筆を呵するこそ愚かなる業なれ、一口にてはこれも亦白沙青松といはんの外なければ、その松は高さも一丈四五尺に上らず、その枝ぶりの面白きこと、舞ふとか、踊るとか、臥すとか、蟠まるとかの外は、形容すべき文句も想ひ出たさるなり、そして淡路島を前に見晴し、畿南の翠を漂渺の間に隠見するなど、とても畫にもかうは書けぬものなり、海水浴はこの濱の名物たることいはずもがな、宜なるかな、夏時の遊人常に多きこと、萬龜樓、松菊樓、左海屋などの旅館は、名あるものにして、その款接のさま、人をして一段と歸るを忘むしむ。

こゝに探討すべきは、濱邊の松露拾ひなどを最とし、浴餘には五色塚、遊女塚などを訪ふも可ならん、五色塚は停車場と濱との中間にある小丘にして、その何の古塚なるやは、信すべき説を聞かず、そ

の東の遊女塚も、たゞ江口の遊女が建てたりといふまでにして、その餘のことは聞くも答ふるものなきぞ遺憾なる。

この前程は明石なり、明石の浦も音に名高きところなれど、須磨や舞子とは劣れりといふべし、若しこゝに立寄らば、左の處々を尋ねるもよからん。

明石城趾 城は元和年間小笠原忠憲の築く所といふ、地は高燥にして古松枝を交へたる上に、近時新たに櫻樹を移植したれば、春花の候はいと目覺ましき眺望なるべし、この城趾今度宮内省の御用邸となれりといふ

人丸神社 歌仙人丸を祭る、城の東の山續にあり。

これより姫路までの間に、名所の松あり、避暑としては似合はしからねど、翠色滴らんばかりの松の緑を擲するも一興ならんとおもふ人あらば、途中の驛にて下車し一訪するも妙ならん、そを下に示



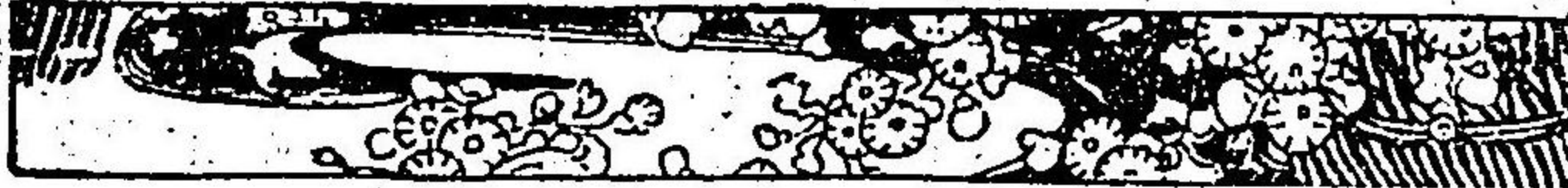
さんに、

相生の松 これは高砂神社境内尉姥神社の前にあり、枝葉の繁茂すること、二十間四方なりと。こは加古川驛にて下車すれば、程遠からぬところにあり。

尾上の松 加古川驛に下車し、加古川を渡りて東すれば尾上村なり、村に尾上神社あり、境内に、相生の松、片枝の松あり、相生の松は雌雄一根より生じ、地を離れて二幹となる、片枝の松は、みやこ戀しきかた枝の松といひ、枝悉く東に向へり、序にいふ、こゝに尾上の鐘といふ名高きものあり、就て見るべし。

手枕の松 尾上より三十町の東にあり、東西四十八間、南北十三間餘、幹は二圍にあまれり。

曾根の松 加古川驛よりも行くべけれど、阿彌陀驛よりするを便なりとす、その距ること二十餘町、東西十七間、南北二十間、そ



の幹は三圍あまり、菅公の手栽のものなりと、曾根天満社内にあり。

路ぐさは波どくしにして、汽車姫路にと着く、こゝにて先づ目に立つものは白鷺の城なり、今は第十師團の營所となりて、練兵の聲いささし、この地より西北二里ばかりに書寫山あり、地は曾左村に屬し車して行くべし、世に書寫山といふは、圓教寺てふ天台宗の巨刹にして、山麓よりは二十四五町も上らざるべからず、夏猶は寒さ好避暑場なり、境内は六萬餘坪の廣潤なるものにして、中に天吼岩 甲石 六本杉 雲井の水辨慶水 如意瀑

などあり、一遊せば歸るを忘るべし。書寫山の麓より二里ばかりに塩田の鑛泉あり、亦澡浴に可なり。姫路よりは、播但鐵道と乗換へて生野に向ふ、この間にも勝景の遊ぶに適するものなしとせず、その二三を擧ぐれば



野里驛を距る十町に足らずして廣峯神社あり、社は廣峯山の上にありて有名に且つ宏壯なる社なり。

香呂驛に到れば、東北部に笠形山を望むべし、山はその容の富士山に肖たるをもて、播磨富士と呼べるも何んとなう心地よし。福崎驛には、七種の瀑と呼べるあり、一に名草と稱せり、直下二丈幅は一丈に過ぎず、樹下鬱葱の間に掛るを以て、おのづから陰森の趣あり、夏時の遊場には頗る可なりといへども、地の僻在するが故にや、人の訪ふもの多きを致さず。

さて姫路より二時間餘にして、瀧車は生野に着くべし、こゝは播但鐵道の極所にして、これよりは車行せざるべからざれば、暫くこゝに休憩して前程の案内を請はざるべからず。

生野は但馬國朝來郡に屬し、戸數一千五百の一市街なり、この地は銀、銅、鉛等の鑛坑あるを以て、その名夙に著はる。この鑛はもと



御料屋の所領なりしを、近年三菱の所有となれり、聞く年々純銀十五六萬貫目を産すと、その規模の壯大なることは、實に目を驚かすばかりなり、これが觀覽のことは、その地の宿舎に就て問ふべし、宿舎の佳なるものは、對山樓、ぬしや、濱屋などなり。

生野には、別に訪ふべきほどの勝もなければ、こゝより人力車にて前程に向ふに、その途すがら山口、竹田、和田山、養父、八鹿、江原、豊岡等を通過せざるべからず、其の間およそ半日餘にして達すべきなり、山口にはその驛端に、維新前の銀山義舉十七士の墳墓あり、これを訪ふも可なるべし、和田山は牧田村に屬す、阪鶴線にて福知山よりするものは、こゝに出づるを便利なりとす、養父驛は、但馬五社の一と稱する養父神社あり、別段の迂路にもおらねば賽すべし、これより八鹿、江原の二驛を過ぎて、到る處は豊岡驛なり、驛は千二百餘戸を有する一市街にして道路四達し小繁華をなせり、

町の字本町なる日吉神社は、その域内廣しといふにあらずといへども、地の小丘の山にあるを以て山水の眺望頗る佳に、加ふるに老杉の亭々として社邊を圍むがために、おのづから幽邃の狀を呈はせり、養源寺は、字新屋敷町にあり、前年有栖川熾仁親王同妃殿下と共に一泊せさせたまふと云ふを以て、その狀を推すに足るべし。さて、目ざすところの城崎の温泉は、こゝよりは二里二十餘町の北にあれば、二時間ばかりにして達すべしと雖ども、既に車行にも倦みしことなれば、こゝよりは城崎川を舟にて下るも、亦一興を添ふべし、殊にこの川は香魚を産することの多きを以て名を知られたれば、舟中その鮮を割くも樂しかるべし。

城崎の温泉は、但馬國城崎郡にあり、兵庫縣に屬す、三面は山を環らし、東の一方は圓山川に瀕し、僅かに三十丁にして日本海に出づべし、さればたゞ山水の風光に富めるのみならず、空氣頗る清爽に



して氣候の變化少なく、河海の魚類常に清鮮にして、療養には好適地たるを失はず、市街は一條の溪流に臨みて軒を列ね、樓を設け、而して温泉は處々に湧出せり、實に山間といはれいへ、塵俗を超脱し、清爽を擅にするにおいては、有数のものなりといふべし、惜いかな交通の便未だ全たからざることを。

されど、交通も強ちに不便とのみいふことを得ず、大阪よりするに、山陽線と播但線とによりて、姫路に至り、生野に至り、而して生野より人力車とすれば、急ぐときは一日も要せざるべく、阪鶴線によりて福知山よりするも、亦前と徑庭あるまじ、又京都よりするも丹波越を経てこゝに至る三十七里、その途中鶴岡より舟して城崎川を下るも可ならん、乃ち二日を費さは足れるのみ、殊に敦賀前よりは毎日宮津港に汽船の便あり、宮津とこの地とは僅々のみ、世人や、もすれば、少しの足をも勞せず、いつも大阪より東京に、若しくは



廣島にといふが如きの意あるは、抑も間違なりといふべし、唯だ坐してのみ居りては、眞の旅行ともいふべきにあらざるならめ、殊には避暑の旅なんどは、日數の限りありといはれいへ、必らずしも何處まで行かねば用が足りぬ、何日かゝりては、事を缺くといふが如きの、小むづかしきこともなかるべし、もしこれありとすれば、初めより遠行は思ひたゝぬこそよけれ、讀者それこれを如何んとか考へたまふぞ。

さて此地は前にもいひしが如く、山水の勝あり、加ふるに有名の温泉場なれば、浴客の湊ひ來れるは、常に多きは三千人、少なきも五百人に下らざるべし、殊に土地は海面より高きと、二十尺の上に出づれば最も三伏の避暑には好適の地とす、今左にこの地の温泉の起源より、泉質および効能を詳にし、次に浴槽等をも記さんとす。

この温泉湧出の起原は、今より千二百有餘年のむかし、舒明天皇の

頃にして、その後元正天皇の時に至り、道智なる旅僧の終に住して浴槽を開きしなりと、土人は物知り顔に語りぬ。

泉質は、幾多の分析を経たりといふ、その一を示さんに、

大抵透明にして、無色無臭なり、塩様の味を有し、その反應は、

「アルカリ性」にして、その異重は、攝氏十三度の温において、一、

〇〇三五 七に居る、〇一リーテル中に含む固形分の量、五九五

ヘガランム、其内水に溶解すべきもの、五六〇ガランム、水に溶解

すべからざるもの、〇三五ガランムなり。

又効能は中々に多けれ、その重なるものを擧ぐれば

慢性腸胃加答兒 慢性氣管支カタル

腺病 微毒性諸症

貧血病 癩瘰癧質斯

子宮諸病 金創打撲

肺結核

脚氣 胸膜炎、腹膜炎

など、また多けれどもこれを略せり。

浴槽は六所あり、鴻の湯、曼陀羅湯、御所の湯、一二の湯、柳の湯、

地藏の湯、これなり、いづれも宏壯なる結構にして、中にも曼陀羅、

御所、一二の四湯は、最も清潔にして、都べて浴客の用便を満足な

らしむ、柳の湯は、不潔者の入浴に供するものなりといへども、今

は新築して清潔となれり。

旅館の大なるものは、西村屋、油筒屋、まんだらや、丹後屋、かめ

や等を最とす、この地戸数は四百戸に足らず、而して旅館の数は大

小四十數戸とす、その如何に温泉の恵に浴するやを知るべし。

聊か贅辭に涉れども、少しく市街の景況を陳せんに、市街は一條の

街路にして、家は皆二階造、中には三階に構へたるもあり、酒樓、

割烹店は十數戸あり、妓女も多く徘徊せり、四所神社前および薬師堂の境内に、大弓、揚弓、遊覽場等あり、遊覽の地は第一は温泉寺、極樂寺、秋葉社、辨天山、本住寺等なるべし、旅客をして倦めしめざるを覺ふ、食物も海邊に近きが故に、清鮮にしてその調理も亦佳なり、避暑の客は洵とに聞さしに勝るの想ひあるべし。土地の産物としては、麥稗細工、桑細工なり、土産物としては好きものなり、その細工も中々巧みなり。町を少し離れては、愛すべく賞すべきもの二三あり、たとへ温泉はなしとするとも、これを賞して遊覽の娛樂を満たすものあらん、それをこゝに略記せん、一は日。和。山。といひ、神。武。山。とも稱するものにして、下の町の西にあり、百尺内外の小丘とす、丘上より觀望すれば、城崎川は市中を串流して帶の如く、來日嶽は北に屹立して呼べは答へんとす、而して遠く



北海の波濤を眺め、山水の景色眞に畫くが如し、茶店あり遊人の小憩に供す、飯後の散歩には遠からず、近からず、至極妙なり、北の麓には桃島湖といふありて、鯉、鮒の類を養ひたり、前に述べし本住寺とは、この麓なる寺なり、夏夜の納涼には一入の適地なるを覺ふといふ。

城崎より二十六七町の北を瀬戸といふ、北海の涯にして、津居山とは僅かに、一つの橋をへだつるのみ、海水浴に適するの地なれば、時としてこゝに遊ぶも可なり、岩石の形狀千姿万態にして、何んどもいはれぬ風趣を存せり、舟にても車にても行くことを得べけれど、舟にて網打を雇ひ、舟中その獲物を料理するも一興なるべし、こゝより西に御待山といふに小車の瀧といふあり、瀬戸より舟を雇ふて行くべし、この間の風景も覺ふるに物なきなり。今一つは實に妙不可思議のものにして、これを玄武洞といふ、城崎



より一里ばかり南なる、城崎川の東側にあり、洞の長さ四十間、左、右、中の三房に分れ、その大小も同じからず、左房は口十三間、行十七間、中房は口十二間、行十五間、右房は口十三間、行十七間、中房はその内側より泉水流下し、洞底に溜溜して鏡の如し、右房は、外側の上より小瀑水懸下し、その状甚だ奇なり、凡そ此の洞は恰も千百の石柱を縦横に積み重ねたるが如く、仰げば蜂の巢の如し、實に奇妙稀代のものにして、親しくこれを見ざる人には、その状を談ずるもこれが妙を覺ゆべからず、これを邦内無比の偉觀といふも誣ひざるべし。

以上は城崎に係る遊觀の場區にして、こゝに滞留して暑を避くること、十日二十日に至るとも、別に倦むといふ心は起らざるべし、猶ほ其の淹留の間、又は歸路に立寄りらんとせば、出石町なども半日の遊びには足るべし、而して迂回して久美濱より汽船に便乗し、丹後

の宮津に到り、それより天の橋立など御望して、或は京都街道に、或は大坂街道に出づるも不可なかるべし、されど、この行は城崎より、前路を逆戻りして和田山に出で、こゝより福知山に向ひ、阪鶴鐵道の便に依るものを掲げんとす、その天橋の勝は別にこれを尋ねるの時に誘導すべし。

さて城崎を辭して和田山に出るまでは、何のいふこともなきなり、これより道は二つに分れて、右すれば播州街道に、左すれば丹波越となる、いざ左して丹波路にむかはん。

和田山の驛より八名瀬驛に向ふ、こゝは但馬と丹波の境にして、別にこれといふ路ぐさもなし、たゞこゝより東南一里にして、粟鹿神社といふあり、日脚をいそぐことならば立寄るべし、社は山間には稀有の莊嚴なるものにして、老檜は枝を垂れて日光を蔽ひ、境内に御手洗の池といふあり、五尺も垂るといふ藤架あり、その境外には

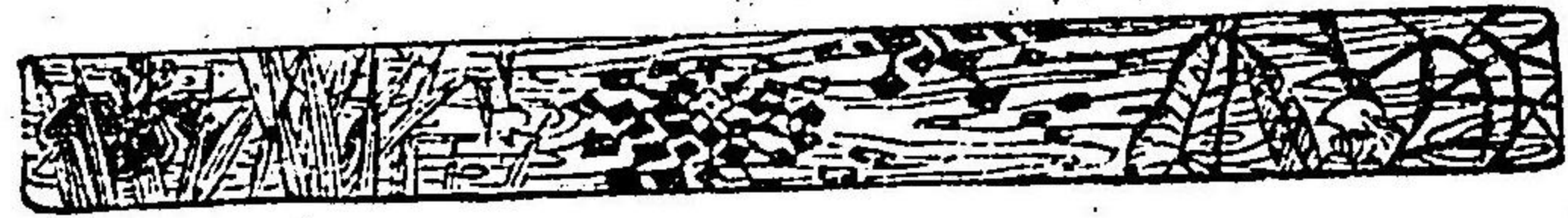
栗鹿の岩窟と稱する古窟あり、二瀑の下に掛るなど、風景頗る佳なるものあり、訪ふと訪はざるは、旅行の客の意に任すべし、これより瀬山、立原を経て福知山に達すべし、城の崎を出で、この地に直行すれば凡ろ八九時間にして着到することを得べけん。福知山は阪鶴線の停車場所在地なり、此國北部の小都會にして、丹後の宮津までは日々馬車を往復せしむ、その距離十五里餘とす、こゝには別に觀るべき程のものなし。こゝより沿道の各驛、別に下車して尋ねるほどのところなし、途上の川に沿えたる絶景は、汽車の走るを憾むものいと多し、篠山は一丈一憩するの價値あり、町より三十町西南に倚れば、少將山といふあり、山といふも名のみにして、一小丘たるに過ぎず、満山緑樹より成れるに、前には大川の清流に枕み、東北にあたりて樹陰に隱見するは篠山の町、それより遙かに見渡せば、西ヶ嶽、御嶽など、こ



ちらから呼ばんとすれば、彼れ先づ呼ぶの觀あり、川には大瀧、小瀧および琵琶の淵などの名あるところあり、いづれも夏日の清遊には、以て來いのところなり、わけて螢には名を得たりといふ、されどもあまりに他國より此を目ざして來る人も見ざるは、その名の未だ顯はれぬがためならん。

篠山より東南に行く二里ばかりに、籠防の鑛泉といふあり、鹽類冷泉にしてその効能も著しとのことなれど、道路の崎嶇たるがために來浴の人は極めて少しといふ、この地海面を抜く千百餘尺の高地なれば、避暑には適するならん。

篠山よりは東にあたりて、八ヶ尾山といふあり、その麓なる上篠見といふに、愛すべきの瀧ぞあるゆゑ、こは辨天の瀧と名づくるものにして、土地の人は四十八瀧ともいひ、又大瀧ともいへり、その最も大なるは高さ九丈、幅一丈二三尺、小なるもその高さ一丈に下ら



ず、斷續七層、絶壁より洩下するものあれば、岩上を急奔するものあり、水聲轟々として飛沫は雪の散るかど疑はれ、盛夏といへども満身を寒からしむ、殊にその近傍は樹緑鬱蒼として、避暑には好適の地なりとす、惜むらくは世人のこれを訪ふもの少きことを、すべてこの篠山附近には二三の好避暑場あれば、汽車の便あるを幸に一遊せんことを勧告することにこそ。

三田の驛には下車せざるを得ず、こゝに案内者の呼ぶには、花山院御廟へは一里半、有馬温泉へは二里あまりと、何はすておくとも、有馬の温泉を通り越して避暑の案内者といはるべきや、いでこれよりこの温泉を案内せん。

有馬の温泉は、三尺の兒童もこれを知らざるものなからん、その温泉の効能はもとよりのことながら、たとへその温泉はなくとも、地は海面を抜く一千百五十餘尺の高さにあり、四方は鬱々蒼々たる緑



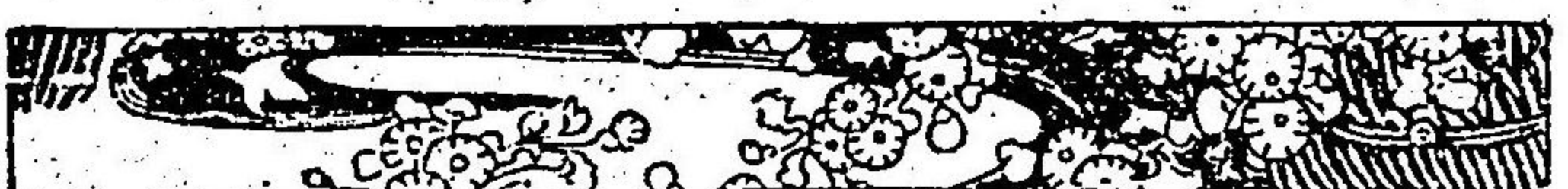
山の間を介することゝて、大氣の清潔はいふまでもなく、殊に近傍に名勝の探ぐるべきもの多ければ、避暑のためには近畿にては先づ指を屈すべきものなりとす、少しく煩に渉るを免かれざれども、遊客の便利にもとおもへは左にそのさまを詳陳せん。

有馬の温泉は、湯山町といふにあり、その戸數は五百に足らずといへどもその繁華なるは、中々に山間の僻地に似ざるなり、まづ交通の便よりいはい。

大坂よりは十三里餘にして、一は阪鶴の線路により、三田驛より僅かに二里餘にして達すべく、樂なことはこれが第一なり。

神戸よりは五里半とす、官線の住吉驛より、六甲山を越ゆれば三里餘にして達すべし、大坂よりするにも、この路を辿る人も少なからず、されど阪鶴線の氣樂なるには如かざるなり。

さて温泉の經歷を知るも亦必要なるべし、神代より湧出すとは聞き



しも、その委しきことはこれを知るに由なし、聖武帝の時にその荒廢煙没を興せしは行基僧正にして、その後承德年間より凡る百年は廢滅に歸したりしを、建久年間にこれを復興し、豐太閤の時これを修理して今日に及べりとかや。その温泉宿としては、池之坊、奥之坊、二階坊、中之坊、北之坊、御所坊など二十餘戸もあるべし、別湯と並湯との二つに別れて、別湯とは一室一人を浴せしむるもの、並湯とは男女を混浴せしむるものなり、その温度は攝氏の三十九度内外にして、泉質は、鹽化ナトリウム、鹽化カリウム、鹽化カルシウムなどを多量に含有するが故に、これを味へは鹹味を覺ふ、その水色は濁りて且つ赤褐色の沈澱を生ずるが故に、手拭の如きは忽ちにその色に染み、しばし浴すれば爪も亦これに染まれり、効能は一言せは萬病に効ありといふの外なけれど、その最なるものを擧ぐれば、

- | | | | | | | |
|-----|------|----|------|------|-----|-----|
| 皮膚病 | 腫腫 | 潰瘍 | 癩癩 | 神經弛緩 | 瘧疾 | 便秘病 |
| 子宮病 | 麻痺 | 癩癩 | 神思憂鬱 | 消化不良 | 貧血病 | |
| 月經病 | 神經弛緩 | 瘧疾 | 便秘病 | | | |

などの如し、而して含嗽劑として用ふるも可なるべく、瀉腸薬とするも可なり、たゞ内部の焮衝、大血管等の形質欠損あるもの、感觸過敏なるもの等は、浴すべからずといへり。

この湯の外に冷浴場あり、こは炭酸水を導きて入浴せしむるものとす、その効も亦大なり、その他冷温の浴場猶ほ多けれども、煩はしければこれを録せず。

以上は温泉に就ての物語なり、病者はすゝんでこの地に向ふべしといへども、たゞこれ丈けにては避暑の客は、その方向をこゝに定めざるものもあるべし、されば、避暑のためにするこの地の風景等を紹介せんこと亦贅辭にあらざるべし。

温泉宿即ち前に述べたる各坊(坊は凡そ二十坊あり)の中に、安漆亭といへるあり。こは坊中の最も風景に富めるものにして、こゝに黄檗の僧高泉和尚が、十二景といふを定めたり。即ち

愛宕松濤	三神靈廟	杉谷古宮	落葉暮雪	温泉寺鐘
三笠時雨	蜂尾歸樵	齒朶尾月	車谷行客	林溪楓葉
洗塵納涼	萬年巖花			

とす、夏時におけるの風趣は乏しきが如しといへども、中々文字にのみ編すべきにあらざるなり。

湯山町には、曾て飛鳥井雅重の撰せしといふ、有馬の六景なるものあり、その詩歌は多けれどこれを録せず、而して六景とは

鼓瀧松風	有明櫻春望	落葉山夕照	温泉寺晚鐘
功地山秋月	有馬富士雪		

これなり、亦以ていかに勝景に富めるかを知るに足るべし、今避暑

の一觀たる、鼓瀧の松風を左に紹介せん。

鼓ヶ瀧は湯山町の南方八町ばかりにあり、その高さは三十六尺、幅は十八尺といふ、怪崑巍峩として西邊に峙だてるが中に入り、急奔直瀉す、その聲藜々と山谷に鳴りひびきて、恰も鼓を鳴らすが如しといふより、この名を稱せしなるべし、近境一帶に楓樹をもて満たさるが上に、その前には六景中の一なる有明櫻あり、春に秋にその景はいふにいはいはれぬものなり、されど楓緑の夏猶ほ寒ささは避暑の好同伴たるに適するものあり、この奥に蜘蛛の瀧あり、その又奥に白石の瀧あり、いづれも一遊の價値は十分なり。

この他、温泉寺に遊ぶもよろしく、落葉山に上るも可なり、若し少しく遠きを厭はねば、大多田川に沿ひて、屏風巖の景を尋ぬるも奇なるべく、羚羊谷に遊ぶも妙ならん、もとより遠きを渉るの價値はあもといへども、遠ければこそ尋ぬるものも少きなり、その委しきは

これを省きぬ。

三田は舊九鬼氏の藩營たりしところ、播丹の街道にあたりて小繁華をなせり、然れども別に避暑のために案内すべきものを聞かず、若し少しく遠きを厭はねば、簾の瀧あり、水晶山あり、名と共に清涼の地なりといへども、その地を尋ねるものは頗る罕れなり、たゞ水晶山は、六甲山に連れるが故に、暑を六甲山上に避けんとするものは、かならずこれを訪ふべし。天狗巖といひ、柳窟といひ、姥谷瀧といひ、その奇絶妙絶なるもの頗る多しとす。

有馬の案内はこれまでにして、歸途に寶塚の温泉に小憩するも可ならん、こゝは阪鶴線の停車場のあるところ、下車すれば問もなき路なり。この温泉は浴客を引くに至りしは僅かに十二三年前よりのことなり、旅館、割烹店等の設備もあれば、避暑には好場區なり、その泉質は、多くのコロール、ナトリウムを含める炭酸塩泉にして

温度は攝氏の二十度内外とす、佝僂質私、腺病、肋膜炎、子宮病、皮膚病等には特效ありとかや、この近くには池田あり、伊丹あり、その觀眺に佳なるの地も頗る多し、避暑中に遊觀するも樂しかるべし。

蓬萊山清澄寺は、十町あまりなり、その方丈の庭は、支那の廬山の景を模せしものとて、その幽趣は擲すべく、愛賞去るに堪へざるものあり。

柴雲山中山寺は、寶塚の隣驛なる中山驛より下車すれば僅々なり、實に近境の靈場にして、山上の眺望は殊に佳なりとす、その縁起を聞けば難有きふしも多けれど、あまりに長ければ略すべし、兎に角一遊してその勝を咀ふべし、避暑の午睡などには妙なり。

池田驛の近傍にては、尋ねべきところも多きが中に、避暑としては鼓ヶ瀧を訪ふも可なり、こゝは多田川の流れにありて、十丈の飛泉墜

々と響きを傳へたり、最明寺の瀧は、また離れてあれど、春夏の交には、躑躅花藤花等の多きが爲めに遊人多し、されど別に去るに忍びずといふほどにもあらざるなり。能勢妙見とて名を得たる靈跡も、池田驛よりは四十町ばかりなれど、避暑には適せず、名たゝる木前の牡丹も八町に過ぎずといへども、時候後れなれば致し方もなし、かならずも訪はんとするものは箕面の紅葉瀧なり、こは亦四十町餘を距つといへども、往きて觀るに足れり、高さ十二丈一尺幅一丈八尺といふ、飛泉奔下し、噴沫は珠玉を轉するが如し、紅葉瀧といふほどなれば、四山は楓樹にて圍繞せらるれば、紅葉の時には目も覺むるばかりなるべしといへども、翠なす樹々の枝面白う、そして巧みに日光を遮りて、夏猶は寒さの感あらしむるもの、その絶景は筆にも盡すことを得ざるなり、瀑上の白龍石、坐禪石、錫杖石れよび三鉢の松、唐人戻り岩など、い

づれも一層の勝を添ふるものといふべし、旅店あり、割烹店あり、遊人には満足を得せしむ、一室を假りて避暑せんは樂しかるべし。箕面川の上流に、石澄瀧といふもありと、そは人の尋ぬるもの稀なりと聞けど、序ながら一遊するも面白かるべし。

城の崎のゆきかへりはこれにて筆を擱くべし、この他に猶は書くべきは、固より多しといへども、たゞその最勝のものを筆せしに止まるのみ、若し伊丹に立寄り、尼ヶ崎にあそび、その土地々々の勝を探らんとせば、更に幾多の案内すべきものあるべしといへども、そは他の書にもこれを記したるものあり、および避暑としての本題目にあらざれば、こゝにはこれを述べざるになん。

こゝに一言せん、この中國旅行の一は、この書の編輯上こゝに記すべきにあらねど、その一半の攝津にまたがれるがために、こゝに挿みたりしなり、その二、その三は、關東より北陸などをめぐ

りたる後に案内せんとす、請ふ深くどがむることなかれや。

東海一路

賀勢志の山水

東海道には名所として知られしところ多し、わけて一方に海水を控へたれば、もとより左もあるべき筈なるが、前にもいひしが如く、その鎌倉附近より、東京のあたりまでは、世にもてはやさるゝ名所もいと多く、而してその多くは避暑の好地區なれば、これを詳かにせんことはこの書の責任ともいふべきなれど、それは既に先輩各家がさまざまの手引せられしものあれば、あまりくどくしく書き立つるも詮なきわざに似たれば、この書にはかゝる名たるどころ、たとへば江の嶋である、熱海である、さては田子の浦、さては大磯といふが如きは、極めてこれを簡略にして、また多く稱えられぬところ



くを重もに案内したれば、讀者はその略したるをもて漫りに責めたまふことなかれかし、先づ筆を伊賀、伊勢、志摩より下して案内を試むべし。

假りに關西鐵道に便乗して、伊賀に入るとせんか、上野驛にて一寸休むべし、こゝは藤堂氏分城のありしところにして、その舊址を上野公園となせり、四周山なるに服部川、長田川の近く流れて、山水映帯の景はこの國の第一を推すべし。

東南に偏して伊勢の國境に馬野溪といへるあり、その地の偏すれば人の訪ふものも少なければ、奇石怪岩の千熊万狀にして、しかも境の幽邃なるは、以て避暑の地に供するに足るべし。

上野より四里半ばかり南に傾きて名張町あり、同名の川を帯びて香魚の名と共に知られたり、こゝの市守宮は眺臨佳絶なれば、登臨するに宜しとす。



名張の東に赤岩尾といへるあり、山水の奇絶なるは、遠くこゝに遊ぶの勞を慰むるに足るべし、屏風岩などわけて絶妙なりとす。

これより又東に三里ばかり、種生村といへるありて草薺寺と呼べる一寺あり、吉田兼好が幽栖を卜せしといふだけを以ても、その境の如何に愛すべきかを知るべし。

名張町の南方にあたりて二瀑あり、一は赤目瀑布とて瀧川村あり、世に赤目四十八瀧といへるもの是なり、その最も高きは十八丈といふ、この瀑のはどり奇景いと多し。

一は青蓮寺瀑布といふ、飛泉三段に分れたり、その下流香魚を産するが爲めに、訪ふもの多しといふ。

柘植の驛を経て伊勢に入る、この驛の近くに玉瀧寺といへる勝景の寺院あり、立寄るも亦可ならん。

伊勢に入りては關の驛あり、この地の地藏院は訪ふて風景を愛する

に宜し、この他關町には、名勝多くして彼の鈴鹿の入勝なんど、いづれもこの中にあり、その景を眺望するには、觀音山（町の大字新所の北方）を最とすといふ。

關町より西北三十町ばかりに筆捨山といへるあり、むかし狩野元信がその山水の眞景を寫さんとして能はざりしといへば、この名の存すると共にその境のいかに奇なるかを知るに足るべし。

龜山驛は、關西線の分岐するところ、公園は舊二の丸にありて、眺曠甚だ佳絶なり。

一身田には有名なる専修寺あり、眞宗高田派の總本山といふはゞに、城内も廣くその境も幽致ありて樂むべし。

津は關西線と參宮線との聯結せるところ、伊勢は津でもつ、津は伊勢でと歌ひしはゞの所なれば、その繁華なるはいふまでもなきことなり、津の城址あり、津の公園あり、園は市の北部にある小丘にし

て安濃川に枕めり、丘上の眺曝は近境の多く見る罕れなるところ、この他市中にては四天王寺、観音寺をはじめとしていと多ければ、こゝに幽趣を掬するも快なるべし。市の東方一帯を阿漕の浦といふ白砂青松映帯の状は、以て消暑唯一の樂境とするに足るべし。津より二里足らずを離れて久居町といへるあり、香魚れよびあられ酒の産地を以て稱せらる、小憩するにもよろし。高茶屋驛は久居より遠からず、こゝより二十町あまりの矢野村といへるに、香良洲松原ありて、白砂青松相連れるものその景いふべからず、海水浴場ありて、松坂屋といへる旅館は投宿によろし。雲出川に溯りて、その南北に名勝あり、北は榊原といへるに七栗温泉あり、南は家城村といへるに瀬戸ヶ淵あり、二所ともに避暑としての好地區とす



一志郡の西南隅に入幡村あり、若宮八幡宮のあるところ、この邊頗る風致に富めるあれば、もし便道として訪はんには汗を滌ふに足るものあらん。

松坂町は亦有名なる地なり、こゝに小坂某の撰びしといふ十景あり以てその光景に富めるを推すべし。

- | | | | | |
|------|------|------|------|------|
| 松坂金城 | 宮森杜鵬 | 五曲桃花 | 篠川螢火 | 西莊行人 |
| 井村早雁 | 堀坂晴月 | 神岡暮雪 | 布引積雪 | 聚嶺遠眺 |

こゝの公園は、松坂城の遺址にして、土地の高燥なるが上に、古木森然と四邊を圍み、頗る幽邃の趣あるに、況して遠く内海を往來ふ帆影のちらりと見ゆるなど、消暑の具これに越したるものあるべきかは。

菅相寺は、町の一雅境と傲るべきもの、清光寺、龍泉寺、亦探勝の地となすべし、而して阪内川即ち前に記したる十景中の篠川は、この



町にありて夏夜の遊場としては唯一なりとす。

松阪町より一里半ばかりに岩内山あり、その麓に瑞巖寺といへるありて、その風景が奥の松島に似たりといふより、小松嶋の名を呼べりといふ、寺の境内にて名あるものは、奇石怪岩にして、その千態萬狀なるが間に老松の偃蹇せるもの、何とも形容すべき言葉もなきなり、その遠近の眺望に至りては、殊更に掲ぐるも懋かなるわざなるべし、避暑としてはこの地方に於て觀ずして止むべからざるものとす。

松坂より十里餘も西に傾きて森村あり、風折の瀧、布引の瀑、御所の瀑こゝにかゝれり、風折は高さ五十丈、布引は九十丈、御所は二十丈、この國にての大瀑にして、實に銷夏の好地なりとす。松坂より正東の海濱を大淀浦といふ、北には尾、參の岬をのぞみ、東には二見より志摩の嶋々をながめ、一帯の海濱松林白砂と相映す

るもの、たゞ繪の如しといふの外なし、時に海水浴を試むるも可なるべし。

宇治山田町は宮川の東岸にあり、その地のいかに尊さかは世の既に知るところとす、左に少しくその概略を案内せば

内宮即ち皇太神宮は五十鈴川の上流にあり、其境内の森嚴なるは更なり、神苑の八勝など稱えて、風景も亦甚だ賞すべきなり。

外宮は即ち豊受太神宮にして、山田町の南端高倉山の下に鎮坐し、内宮と距ること一里とす、その尊さこといふまでもなきなり。

外宮の東部に豊宮崎あり、その境幽靜にして、内に宮崎文庫あり、亦その勝を掬すべきものとす。

朝熊山は山田町より二里ばかり東にあり、志摩との界にして國の名山たり、遠くは駿の富士山を望み、近くは尾、參、遠の山々を眺む、風光の佳絶なる畫も亦如かざるなり、内外宮に詣づるものはこゝ

に登臨すべきことを勸む、萬金丹を買ふも亦可ならんか。
 二見の浦、こはいふまでもなく伊勢にての勝區なり、山田町より東
 に二里あまり、車して馳すべし、後に音無山を負ひ、前に伊勢灣を
 擁し、危礁怪岩點々起伏して、れのづからなる風光をなし、明媚の
 状をもこれを何んと評せんか、海岸數間のところは二個の岩あり、
 一は高さ二十九尺、一は十二尺、その間は二十尺に足らず、注連か
 け岩とはこれなり、その近傍の好景猶は筆につくし得ざるもの多し。
 海濱に賓日館あり、その隣りに清渚亭あり、海水浴場ありてその清
 潔なる、空氣の清爽なる、蓋し多くは得がたきものとす、清渚亭主
 は若林徳平といふ、旅客に接すること懇切なりとす。
 二見の東に連りて伊氣の浦あり、亦風光に富めり、東北端の萩島殊
 に稱すべきなり。
 これより志州の鳥羽に至るまでの間に小濱村あり、これより二十町



にして鳥羽町に至るべし、東に遠州灘あり、西に熊野浦あり、その
 險波に介まれたる良港にして、地の繁盛は四日市に亞くともいふべ
 し、この風景に富めるは左の九勝にても知らるべし。

海城朝暉、小島晚照、寛山春景、鮑石秋月、鵬溟征帆、
 津口客船、佛巖群鷗、坂手炊烟、鍋島暮雪

鳥羽の西北に一小丘ありて日和山といふ、僅かに二百尺に足らざる
 丘阜に過ぎずといへども、遠近の眺矚頗る佳絶にして、これを他の
 名勝中に求むれば奥の松島と似たりといふべきか。

答志島、菅島、大王崎、淺間山、濱島港いづれも風光佳絶にして、
 その眺矚のさまはれのづから多少の異なるものありといへども、山
 奇にして水美に、水壯にして山快なるものならざるはなし、夏日に
 はこの邊に遊觀を縱まゝにする、その爽絶快絶なるもの果して如何
 ぞや。



東海鐵道の河原田驛、または關西線の一身田驛より白子濱に至るべし、こは白子町近傍の海岸にして、その風光の佳絶なるは一幅の畫といふの外なし。

奈古の濱、神戸町、御幣川、日永城址など、各驛の間に見去りて四日市驛に至る、この驛の國の都會たるは皆人の知るところなり、それより進んで、便道水澤村字西野の楓溪を觀るべし、こは秋冬の交に佳なるはその名の標するところなりといへども、綠蔭の景も亦清爽を覺ゆるものあり。

湯之山温泉は避暑の好區なり、四日市より下車して西に三里半を行くとときは菰野村といふあり、こゝより一里半餘を徒歩して温泉に達すべし、西南北の三面は山嶽連亘し、東方は一望開豁にして空氣清涼に、風景亦頗る愛すべし、泉質は硫酸を含まざる亞兒加里性の單純泉にして、胃腸加答兒、子宮病等によろしく、咽喉加答兒には飲

用するも可なりといふ旭亭、壽亭など浴樓の最も佳なるものとす、その他風景の絶佳なるは一々これを述べず、

桑名は揖斐川の下流なる地にして、繁華なる一市街となり、丸山(一に高塚山といふ)および長島などこの近傍にありて、いづれも眺矚佳絶の地なりとす。

多度山は一に箕山ともいふ、この地方に遊ぶものは一たび登臨せば歸るを忘るべし、その詳なるはこゝに之を説かざるべし。

愛知のしるべ

愛知とは、その縣の支配せる地方を呼びしものにして、つまり尾張と三河との二國を稱せり、この二國は北の方より見るときは、足なき蟹の巨指を張りて、挟みよらんとするものゝ如し、この二國における避暑地は極めて多けれど、その最なるものを抜くときは下の如



くなるべし、全体この二國にての交通をいへば、尾張には東海線ありて、その大府よりは武豊に分岐し、名古屋にては一は關西線を分ち、一は多治見線を分ち、而して一の宮、彌富間に尾西線を通ず、その便は極はまれりといふべし、三河にては東海線のあるに、豊橋よりは別に大海に分岐せり、加之ならず、この二國は海水を控へたれば、實に海陸に便なりといふべし、今少しくこれが案内を試みんとす。

伊勢より屋張に入れば、その取り付きの驛は彌富なり、尾西線の分るゝところ、こゝより程近きところに立田蓮池あり、宛然たる湖水の如き大池にして、夏曉蓮花の開くときは、その風景實に愛すべし、蓋し蓮池中の巨擘ともいふべきものか。

尾西線によりて津嶋に至れば、津嶋神社を拜すべし、境の幽邃なるは更なり、その例祭(舊曆八月十五日)には天王川に船を浮べて神事



をいとなむ、その盛なるはこの國の壯觀といふべし。

萩原驛の西にあたりて祖父江松原あり、木曾川に瀕して風光殊絶なるには、塵俗の氣を頓挫せしむるに足るべし。

國道を岐阜境に進むときは、木曾川の岸に犬山町あり、その城趾れよび瑞泉寺は、頗る壯觀にして而して幽雅の景に富めるものとす。

尾張富士といへるも亦有名の山にして、その眺望の佳なるはいふまでもなく、夏季には登觀を試むるものもいと多し、地は今井村に屬して、犬山町よりは西南にあたり、入鹿の池といへるに臨めり。

内津村なる内々神社、掛川村なる定光寺いづれも秀靈と奇觀との勝に富めり、こは多治見線を東西に分れたるところなれば、往くに難しとせざるなり。

龍ヶ淵の三河の界にある、玉野川の庄内川の上流にある、いづれも尾州の一勝地として古來名あるもの、山水相待つて奇を呈するもの、

その名を擅はしりするに亦故なきにあらざるなり。
高藏寺驛を南西に距る一里ばかりにして龍泉寺あり、勝川の流に臨みて、風光頗る佳絶、遠く金城の光彩を望むべし、而して土地高燥に、綠翠四隣を蔭へば、避暑にはこよなき地とす、わが友祝霞城なるものこゝに一夏を消して、七年の病を痊したりといふ、趁ふべきものとす。

清洲は名古屋に隣れる一都會なり、されども別に避暑の地といふべきほどのものを聞かず。

名古屋は三府に亞げるの都會にして、こゝには避暑は第二としても遊観すべきもの頗る多しとす、左にその二三を紹介せん

金城は天下無比の名城たるいふまでもなし、市の北邊に位して金統の光は燦爛として、名古屋をして名聲を博せしむ、今は離宮に編せられたり、以てその如何に壯觀なるやを知るべし。

枇杷嶋は市の西北に接する地なり、この町より庄内川を横断して架したる橋を枇杷嶋橋といふ、この邊の風景は別に一生面を開くといふべし。

浪越公園は門前町にあり、雅趣に富みて清遊の佳境とす、惜むらくはその域内の廣からざるを。

長福寺、東西本願寺別院、富士見ヶ原など、いづれもこの市の眺観とするに足るべし、その他猶ほ多けれどこれを説かず。

要するにこの市は東西に旅する人の足をどいめて可なるものとす、その旅亭の如きも清越なりといふべし、最も佳なるは秋琴樓、鶴鳴館、山田屋、丸文、河内屋等なるべし。

八琴山は名古屋市を距る一里半の東にあり、山上に興正律寺、遍照院あり、こゝより南望すれば蒼海茫茫、極目際なく、遠く紀勢の諸山を香渺の間に見るべし、名古屋よりの行樂に適せるものとす。



これより東に三里、岩崎瀑あり、その水勢大ならずといへども、四邊の幽邃なる、交通の便利なる、夏時の遊境とするに足るべし。熱田町は亦有名の商區にして、その港は大船小船常に輻湊し、而して鐵路の通するあれば、日を追ふて般賑となるを覺ふ。熱田神社は、町の大字旗屋町にあり、神威の仰ぐべきはもとより、城内の風光は森巖の情を起すに足るべし、こゝには必ず拜養すべきなり、旅舎は伊勢久、濱田屋等をよしとす。大府は東海線の分岐するところ、随分と繁盛なる地なりとす、これより南して龜崎を過ぎ半田町に達す、衣浦に濱する一港津にして、亦繁華を譲らず。武豊町は半田の南一里ばかり、武豊線の終点とす、こゝは大船巨舶を泊せしむべき良港にして、海陸の便を得たれば、その繁華なること日と共に増加せり。



この町に鳳翔山といへるあり、曾て陸海軍の大演習ありし時、大元帥陛下の蹕を駐めたまふところ、近來こゝに養生館を營して患者静養の地となせり。町より南に四里半の岬端を帥崎といひ、海水浴場ありて避暑に供す、風景も亦佳絶なれば、頗る來浴の客を引けり、養春館は眺望佳絶にして、客に接するもいと懇切なり。この海上にある、日間賀嶋、篠嶋など、時に舟して遊觀するも亦消夏の一たるべし。豊濱海水浴は前者の西一里ばかりの地にあり、前者より優るとも劣ることほなかるべし。大西屋梅屋など、頗る手輕るに客を滯泊せしめて、遊入もおのづから多しとす、聞く一ヶ月の滞在費四圓八十錢乃至六圓なりと、來浴者の多きも宜なるかな。大野海水浴は西邊にあるものにして、伊勢の四日市と相對するが故

に、舟行の便あると、一方は鳴海驛より陸行の便あるとにて、來遊者亦甚だ多し、ことに風光の佳絶なるは、前の二者にまされりといふべし、海濱館などは浴樓中の最なるものとす。こゝに海音寺といへるあり、浴後登臨するによろし、寺寶の觀るべきものあれば請ふて觀るも可ならん。今や三河に入らんとするにあたりて一言すべきは、木曾川と庄内川とのことなり、この二川は國中の巨流と稱して、前者はいふまでもなく著名の大河、後者もその上流の奇石怪岩に富めるを以て、舟楫の利はなしといへども、これを尋ぬるによろし、木曾川に至りては舟楫の利二十里に達し、兩岸の風光も擲すべきもの多しとす、亦訪ふに足るものか。

三河に入りての初めの驛は荻谷なり、こゝより衣浦の東に沿ふて南すれば、その岬端は大濱港なり、その繁華なるはいはず、西南の



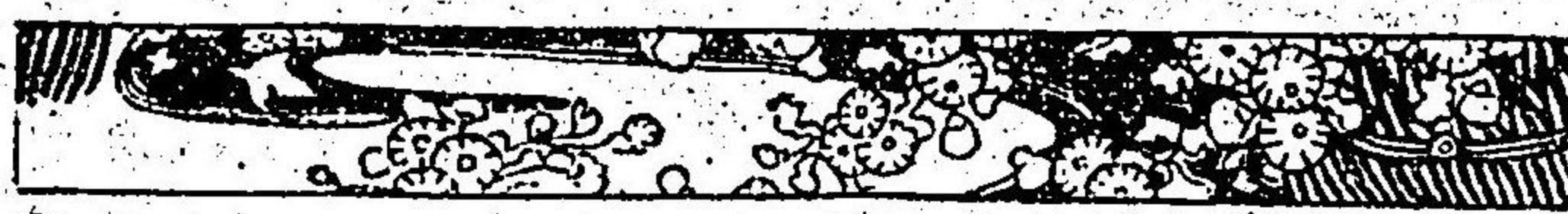
權現岬は海中に斗出して、衣浦第一の勝といふべし、海水浴場もありて夏時は頗る賑かなり、この町に稱名寺あり、寺中の眺矚は近境の罕に見るところとす。

荻谷の東北にあたりて牛橋村あり、村の無量寺は頗る風光に富みて、殊に舊蹟もその中に多ければ、これを尋ぬるもいと樂しかるべし、寺の數町東に入橋古蹟あり、杜若の名所とて世に知られたり、三州第一の勝地といふべし。

これより前程に向ふに矢矧橋を渡るべし、橋は矢矧川に架するもの、長さ二百八間といへば東海道第一の長橋とも稱すべきか。

矢矧川をさかのぼりて北すれば野見村あり、野見山といへる高丘これに屬して、その山水の絶勝なること、以て泉石の痼疾を癒やすに足るべきなり。

岡崎驛は、岡崎町より西南一里にあり、矢矧川と太平川との間に介





在したるものにして、亦繁盛の區とす。岡崎公園の佳絶なる。大林寺の名刹なる、いづれもこの町の観るべきものとす。

矢矧川に沿えて二里ばかりを遡れば、圓福寺ありて岩津村に屬す。その洗心の勝區たるは、蓋しこの國にありて有數なるものなるべし。町より東に一里に小美村あり、男川に沿ひて頗る幽寂の地とす、三伏の暑を知らぬとはこの邊のことをやいふらん。

岡崎より信州に通ずる間に足助町あり、この邊に稱すべきものもあれども、地の僻在せるが爲めに、一々指擧せざるべし。

岡崎驛より西に國道を進みて中島に出で、こゝより南せば平原の瀧に出づべし、世人これを小養老といふ、蓋し濃の養老に似たるがためなるべし、溪水奇石の狀畫も亦如かざるものといふべし。

南海岸に宮崎海水浴場あり、その地勢頗る浴場に適せり、前には多



くの嶋嶼ありて、大小の船この間に往來し、後に翠巒ありて黛を曳くに似たり、その絶景なること明石と淡路島のさまの如し、洵に以て國の一仙寰とするに足るべし。

この南西海上に佐久島あり、海岸よりは一里十町ばかり、島上に四百ばかりの人家あり、海水浴場は南面の灣内にありて、その近傍に小嶋あり、崖岸あり、頗る愉快なるの地とす。

佐久嶋と最近半町ばかりに辨天嶋あり、嶋上に辨天祠あるより稱したるなるべし、こゝに登臨せば風光極めて佳絶にして、殊に佐久嶋との間に一條の大なる綱を渡して、これに縋り自在に両嶋の間を往來するなど、極めて愉快妙絶なるものとす。

蒲郡の停車場を去ること二里餘に三根山といへるあり、山は南面に内海を望みて一大鏡の如く、こゝに觀音寺ありて境内の眺望は三河第一と稱せり、避暑の客は多くこれを訪ふといへり。

蒲郡海水浴は、同名の驛を距る數町にあり、三面に山を負ひ一面海に面して、しかもその前に大小多數の嶋嶼を列ね、宮崎に譲らざるの浴場とす、海月樓、健碧館などの浴樓ありといへども、近傍寺院の閑静なるものを借りて避暑する人も多し。

御油驛より遠からぬ、長澤村に、歌例ヶ岳といへるあり、山光水色の相映帯して詩料に供する、實に消夏の境とするに足れり、この村に小瀑布あれども、別に紹介するほどにわらず。

御油驛より東南一里半ばかりにして、前芝海水浴場あり、こゝは山明水媚の佳境にして、殊に豊橋あたりより近ければ、夏時の浴客は常に多きなり、然れども人工を加へたる浴場にして、宮崎、蒲郡には及ばざるを覺ふ。

有名なる豊川稻荷は、豊橋驛の北二里ばかり、豊川村の豊川にあり、妙嚴寺の境内に安置するものにして、吒积尼天を祭れりといふ、

この寺はその庭池の幽雅なるを稱し、又寺といへどその構造は神社の如くなり、賽人常に絶えず。

鳳來寺は三河第一の靈境と稱す、烟巖山とはその別號なり、豊橋よりは九里、御油よりは八里、いづれも山路崎嶇たらざるはなし、然れども通常こゝに賽するには、次の遠州にていふところの秋葉山に詣で、山づたひに此に賽するを多しとす、寺域頗る廣くして、境内に名あるどころも亦多しとす。

この寺の塔頭松高院の下方に妙法の瀑といへるあり、高さ僅に五丈餘なりといへども、その奇觀は得もいはれぬものなりとす。

因にいふ、設樂郡の北部山中に鳴澤瀧といへるありて、その高さ六十丈の巨瀑なりといへども、地の僻在せるを以て案内すといへども訪ふ人のあるべくもあらざればこゝには踏すべし。

井川の驛より北に石卷山といへるあり、山頂は四顧開豁にして、

愛知のしるべ

石巻山

三二大因主余

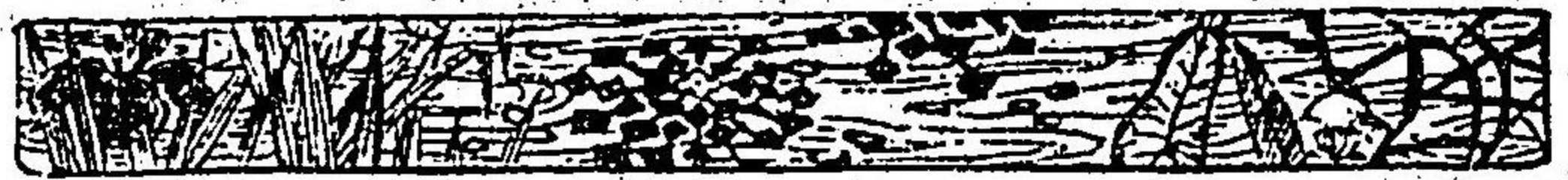


眼下には濱名湖をながめ、東北には白扇倒懸の山影を望み、その他
他の風光一眸の中に集りて、一幅の畫を披きたるが如し、山に温
泉もありといへば、三伏の熱を驅るにはこれに勝りたるものはな
し、豊橋より登るも亦便なりといふ。

これより東北にあたりて、主河の七瀑といへるあり、その風光の
佳なるは筆すべからざるものありといへども、あまりに山中なれ
ば、その順路等は略すべし。

城山といへるも亦觀月の地として稱せらるれども、亦前項の如く

なればこゝには述べざるべし。（例）大井町にありて、觀月寺あり、
豊橋は有名の一驛なり、烟火の製造に名高きは皆人の知るところなり、
り、こゝに吉田神社あり、悟眞寺あり、請はんと思ふ人は訪ふも佳
なり。神ありて、神像あり、
二川驛は遠州に通する一驛にして、停車場も亦こゝにあり、別に觀



るべきものは窟觀音に過ぎざるべし、こは東海鐵道の汽車中より、
首をさしのべて臨まば見ることを得らるべし。

蘆の池といふは、吉田村にありてその周圍は二十六町に過ぎずとい
へども、波光漣漪時として輕舟を泛べば、その風光の佳絶なること
、亦以て銷夏の料とするに足るべし。

伊良胡崎は、尾州の師崎と相對して三河灣を擁す、風光佳絶にして
遊ぶによろしとす、その岬端は、巖岩相連りて、舟行には艱めるも
の多しといへども、眺觀するには頗る奇絶と稱すべし。

すべてこの邊渥美郡に屬し、海中に斗出するの地にして、風景の稱
すべきものは多しといへども、一々こゝに紹介するは茲にはあらず
るなり、若しその地名を示さんとせば、小澤村の東觀音寺、田原村
の田原灣などを觀るに宜しかるべし。

遠 駿 豆

遠江より東すれば、さるほど名勝の多くして、避暑に適するところも亦少なからぬと、その多きだけに既に案内書の世に出でしもの多ければ、その委しきはその書に譲りて、ざつと手びきせるまでとなるべし。

さて三河の國より汽車の便によりて遠州に入れば、先づ足をと、むべきは潮見坂なるべし、こは白須賀町にありて、僅かに六町餘のところを、上り下り折れる屈ると、さまざまなるが中に、遠近の眺望はいと快なるものあり、羅山林翁の詩に

天地豈識幾層瀾。舒卷古八方寸端。滿目不遮潮見坂。

大鵬飛盡水漫々。

といへるもの、能く寫し得たるものなるべし、坂の中央に潮見觀音

あり、こゝに佇立せば觀望に可なりとす。

鷺津村は停車場のあるところ、濱名湖に瀕して風景に富めり、この濱名湖といへるは、東西二里餘、南北三里に足らぬ湖水にして、その風光の佳絶なるは、江州の琵琶湖と併べ稱せらる、鷺津よりこゝに舟を泛べて明媚のさまを賞すれば、三伏の暑も忘れ得べきものなるべし。

引佐細江は、この湖の支湖ともいふべし、江口はせまくして、その両崖に岩石の起伏せる、老松の枝ぶり面白う生へたる、遠州中の勝景を推すべし。

濱松は井上氏の城市たりしところ、舊址の願望は頗る快濶なり、諏訪神社など觀るべきもの、こゝより北へ一里ばかりに三方原の古戰場あり、英雄鬪争のあとを訪ふも可なるべし。

中泉町の停車場より少しく離れて根堅鑛泉あり、山上の眺望に富め

ばにや、僻地としては浴客の多きを見る。

光明寺といへるは、中泉驛より行くをよしとす、光明村字山東にありて有名の寺なり、境内に稚子瀑ありて頗る雅趣を添へたるに、猶ほ八勝の稱すべきあれば、こゝに投宿して暑を避けんには、極めて快味の掬すべきものあるべし。

これより見附の町、袋井、掛川の停車場など、訪ふべきの勝もあれど、いづれも割愛して秋葉神社に詣でんとす。

掛川より森町に三里ばかり、森町より六里あまりの坂路を、徒歩もしくは肩輿にて上るべし、境内一萬八千餘坪、東北西の三面は老杉鬱々として叢生し、前は懸崖に臨みてその下に清流の消々たるを觀る、境幽にして山深く、避暑には屈竟の場所なりとす。

秋葉社の北七里に山住神社といへるもあれど、地の遠僻なるがため訪ふには難きなり、尤も歸路には天龍川を舟にて下るの便ありと

いふ、若し然らんには風景の奇に飽くものあるべし。

前にいへる森町に至るの路すがらに、可睡齋三尺坊を訪ふべし、こは掛川よりも、袋井より至るべし、もとは秋葉山に祀りしものなりといふ、火難を除けるとて、遠近の賽人常に多し。

御前崎とは、金谷驛より正南にあたり、相良町より西南にあたりて、沙磧海中に斗出すること二里、そのささに沖御前、駒形岩などあり、この地は太平洋に面して、東西に豆州、參州等の遠巒をのぞみ、風光殊に快濶なるを覺ふ。

この西二里間を志留波磯といふ、亦遊ぶに適するものとす。

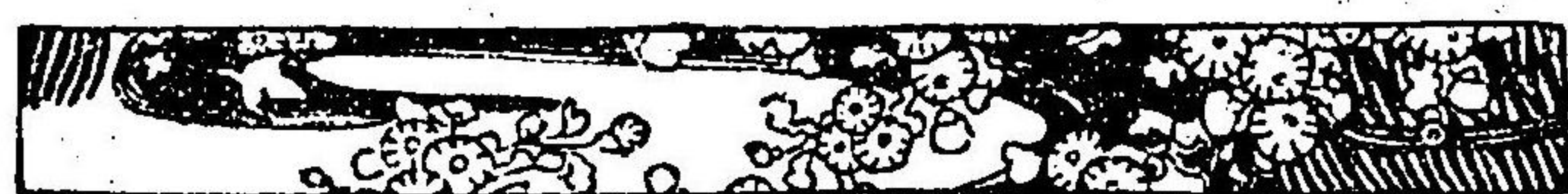
金谷驛の北二十五町に五和村鑛泉あり、この地丘陵を後ろにし、前に大井川の長流を帯びてその風光頗る佳なるが上に、鑛泉の効能く儂麻質斯、脚氣等に適せりとて、來浴の人多し、避暑には極めて佳なるものとす、泉質は塩類泉なりといふ。

この驛より東は大井川の鐵橋にして、その長二千三百二十九尺といふ、而して西には牧野原の隧道あり、亦三千二百七十三尺といへば、一寸心をつけて観るべきものなるべし。

大井川の鐵橋は實に遠駿の國界にして、これより駿河に入るべし、さてこの大井川とは東海道にての有名なるものにして、その源は甲信の界より發し、延長四十六里にして、その廣きところは十二町ありといふ、平時は水少くして徒歩渉るべしといへども、一たび强降雨に會はば兩沚を辨せざるものとす。

嶋田驛を経て藤枝驛に至る、この蓮生寺は有名にして且つ風光の佳なるものあれば、逗留するによろしとす。

町より西に凡そ二十町、志太鑛泉ありて、潮生館なんぞいへる旅館はなかく賑へり、こゝに消暑の計をなして、浴後時に神代塚、鳥帽子岩、人穴なんぞを訪ふも快なるべし。



燒津は停車場のあるところ、こゝに燒津海水浴場ありて、東は駿河灣に面して伊豆の翠色を含み、東南は茫々たる外洋を受けて時に船舶の快走するをながめ、而して東北に富士山をかしらとして、愛鷹高草の諸山をのぞむ、實に海水浴としては適當のところなり、秋月樓はこゝの旅館に冠たり、消暑の意あらん人は遊べよかし。

静岡市は屈指の都會にして、山には賤機山、川には安倍川、清水港は海運に便にして、鐵道は陸運に利あり、駿府といへりしものはこれなり、この市にての概觀を擧ぐれば

静岡城趾は追手町の北にあり、本丸の庭中なる蘇鐵は頗る奇觀なり。賤機山は静岡市にまたがる小丘にして、青葉ヶ岡といひしはこれなり、満山青松を生じ、丘上の眺望頗る快豁なり、その麓に鯨池といへる小池あり、曾て今川義元の築きたりしところとす。

淺間神社は賤機山の南麓にあり、その結構輪奐の美を盡したり。



静岡公園は淺間社の境内を以てこれに充つ、その俯仰の風光は登臨者にあらざれば共に語るを得ず。

市の南端に寶臺院あり、亦訪ふべきものとす。

臨濟寺とて賤機山の東北に隔たりしところあり、臨濟派の總本山として尊崇せらる、その地幽邃なれば賽して苦熱を消するも宜しからん。

安倍川は大河内川、中河内川、西河内川を合稱したる名にして、静岡市の西を過ぎ、延長十六里その幅三百六十八間といふ、亦橋上の眺望によろし。

安倍川の上流、梅ヶ嶋村に同名の温泉あり、その東北數町に大瀧あり、然れども地の僻在せるがために、訪ふ人のなきを遺憾なれ。

海岸なる、三保、久能、大谷の三村にまたがる海濱を總稱して有度の濱といふ、その間五里ばかり白沙相連りて風光奇絶なり。



この濱の近くに草薙神社あり、路すがらなれば拜すべし。

久能神社は同名の村同名の山上にあり、徳川家康を祭る、清水町より西南一里半なり、この山上の風景は、この所在を一考すれば思ひ

蓋し半ばなるべし。

清水町は清水港を擁したれば、その繁華はいはずもがな、港は國の

第一なりといふ、この町より南に十餘町、不二見村といへるに龍華寺なる法華宗の巨刹あり、山海の眺望は頗る佳絶にして、龍華寺の

十二景なるもの一眸の中に收まれり、友人岡田竹亭去々年の夏この寺に避暑すること三旬餘、静岡みやげの著あり、その一節にいふ、

龍華寺の十二景は、朝暮に變幻して二十四景三十六景終に四十八景

どなるを見たり、未だ奥の松嶋を賞せずといへども、天橋、嚴洲、には優れるものあるを覺ふ云々と、以てその風光を推すべし。

清水港より南、三保村字三保ヶ崎を三保の松原といふ、一帯の沙嘴

海上に斗出し、青松の上に生じて相映帶するの景、彼是と評するは野暮といふべし、羽衣の松など亦觀るべし、松は高さ九丈周圍一丈一尺といへり。

興津は清見瀨と對して絶勝の地、殊に停車場ありていと殷賑なり、線路の傍に清見寺あり、その寺門より眺望すれば、三保の松原は眼下にあり、うしろには富士の諸峰は呼應の間にありて、その風景畫の如しといふの外なし。

停車場より七町を行けば、その海濱に海水浴場を設く、沙濱一帯の間に大小の奇岩起伏し、山水明媚風光佳絶にして、避暑にはこよなき場所なりとす、この地の旅館は、海水樓、一碧樓などを推すべし。薩陲嶺はこの停車場よりは東にあり、この山の風景を採らんとせば、坂路を攀ちて眺欄を縦まゝにすべし。蒲原驛を過ぎて富士川にかゝる、その源は甲斐より出で、國に入り

ては五里その濶さ五町餘、有名の急流にしてその舟行の間は、奇勝頗る多く甲州の猷ヶ澤より下るに最も佳絶を稱すべし。

富士川の海に注ぐところを總稱して吹上の瀆といふ、風光の絶佳なること、三保、清見の間にありといふべし。

吉原町の字鈴川に停車場あり、こゝより大宮町に至る三里の間馬車、鐵道の便あり、關西地方より富士山に登らんとするものは、この大宮町よりするを可とす、これを富士登山の衣口といふ。

大宮町に淺間神社あり、その社頭に十二勝ありて訪ふによろし。

さて富士登山の表口は、淺間神社の背後より村山まで一里、それより草野、木立、沙山、胸突などを経て絶頂に至る、その里程九里八町といへば實は七里に過ぎずといふ。

そもく富士山の我邦第一の高山たるは、皆人の知るところなり、二萬二千四百尺の峻秀にして、甲駿の二國に跨り、八朶の芙蓉とか、

白扇倒懸とか、古よりこれを賞せしものその數を知らず、表口より登山の順路を詳記すべき筈なれど、東より登山せしのみなれば、そのみちくを委しくすることを得ず、依て仮りに御殿場より登山するの順次を左に記せんとす。

御殿場驛 旅店松屋、大黒屋、富士屋支店等にて用意を整ふ。

但し、これより八町の舊御殿にて準備するも可なり。

一。合目 御殿場より三里八町車馬を通すべし、途中に瀧川原、太郎坊あり、旅舎もかねたる家あり。

三。合目 までの間は、一面の焼原なるに、小砂利の堆くして歩行困難なり。

四。合目 以上は石室を築きて、旅人の休憩にあつ、この上には凡そ二十町又は十町ごとにこれあり、酒飯の類を供せり。

この邊にて困るは飲水の乏しきことにて、雪を解かして得たる



もの一杯一錢といへり。

六。七。合目 以上は空氣稀薄にして、火力十分ならず、飯も半熟なるを多しとす、登山者は鐘詰などの用意あるべし。

八。合目 より上ること數町、大なるみと稱する十町四方の凹處あり、氷雪中消ゆることなし、こゝを越したるところが、胸突八町といへるところなり。

銀明水 と呼べるはこの側にあり、かならず一掬すべきものとす。

銅馬堂 淺間神社奥の宮なぞあれど、こは別に案内を略して

噴火坑 の周囲は五十町あり、この坑内に千秋不盡の雪を滿たせり、このほとりが富士の八峰と呼べるものなり。

割ヶ峰は八峰の最も高さものにして、その麓に野中氏の側候所あり。

白山嶽の麓には金明水あり、亦掬すべきものとす。



山頂の景は一々いふまでもなし。下り路は前者に比すれば天壤の差にして、飄然と風に乗りて飛ぶ如しとは、能く形容したるものといふべし。富士登山のこと、これを委しくせんは一朝夕のことにあらざれば、別に「富士詣で」なるものを草したれば、その出づるを待てこれを補はんどす、而してその登山の口は、または是に留らず、そはその地において略記することゝなすべし。この富士につけて名あるは、人穴および白絲瀧にして、瀧は高さ八十七尺、幅四百三十尺、その狀白絲をかけたるに似たり、人穴は山の西麓にありて、亦尋ぬるもよかるべし。序にいふ、世に富士の裾野といふは、富士山の南麓にして、東西五里三十町、南北三里二十町、彼の頼朝が狩獵せしところといふ。鈴川停車場の南にある小丘を沙山といふ、丘上の眺望頗る快爽にし



て近傍の好遊場とす。

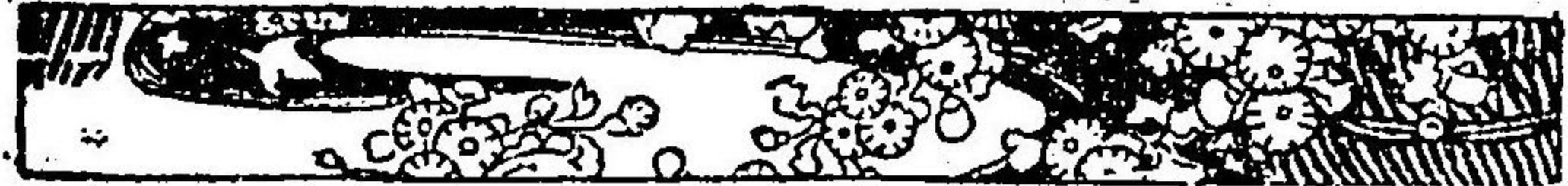
田子の浦といへるは、亦著名の勝地にして、三保の松原と共に兄弟たりがたきものとす、亦鈴川驛の近くにあれば、遊人の見通すべからざるところなりとす。

原町も亦風景に富めるところ、こゝを乗り越して東せば沼津驛なり、その地は高燥にして空氣清潔に、海濱の風色いと佳絶なるものあれば、來遊の客常に多し、今その優なるものを掲げん。

千本松原は町の海岸にあり、駿河灣は鏡の如くにして、西には田子より三保まで、遠くは清水港までも模糊の中にながめ、風光絶佳にしてこゝに避暑するものもいと多し。

日技神社、丸子神社、沼津城址など、いづれもこの町にて尋ねべきものとす。

我入道海水浴場は、沼津の南二十町にあり、その風景は千本松原の



如くにして、しかもその前面に不動岩などの奇なるものあり、避暑の好地區なりとす、松風館は旅館の白眉とす。

牛臥海水浴場は前者の近きほとりにありて、その風光の偉觀なるはこれに勝れり、山水映帶の狀、奇崑出沒の景、遠近濃淡のさまなど、飽くことを知らざるものとす、されば貴顯のこゝに別莊を構ふるものもいと多きなり、旅館は三島館を第一となす。

佐野瀑園は佐野停車場より西北十二町にあり、園内に五條の飛泉あり、一を雪解の瀧といひ、高さ四丈幅十五尺、二を富士見瀧といひ、高さこれと同じく幅は三尺せまし、次は月見瀧とて高さ四丈幅八尺、次は銚子瀑とて三十三尺幅七尺、その次は袂衣瀧とて、三十三丈に十五尺の高さとす、この瀧の水は溢れて池となり、池には鯉、鮒など多くありて釣を垂るゝによろしく、又小舟を泛ぶべし、園はもと湯山某の有にして、近時旅亭を設けて宿泊に自由ならしむとい



ふ、こゝより二十町ばかりに景ヶ嶋といふあり、亦眺望に富めり、園には八勝の名ありといへども今煩はしければこれを略す、兎に角避暑としては得がたきの場所なりとす、遊客はかならず一訪せらるべし。

前に述べたる富士登山の東口は、御厨町より少しくはなれたる、御殿場よりするを順路とす、そのあらましは既にこれを掲げれば、こゝには再びせざるべし。

三嶋町は箱根と沼津との中間の驛市にして、亦一都會と稱すべし、三嶋停車場よりは十餘町の南にあり、こゝは豆相線の分岐するところにして、殊に探勝の地多ければ、下車の客も多く随つて繁華なるところなりとす。

三嶋にて避暑は兎に角、訪ふべきものは三嶋神社、本覺寺等なりとす、然れども避暑としての便なければこれを案内せざるなり。



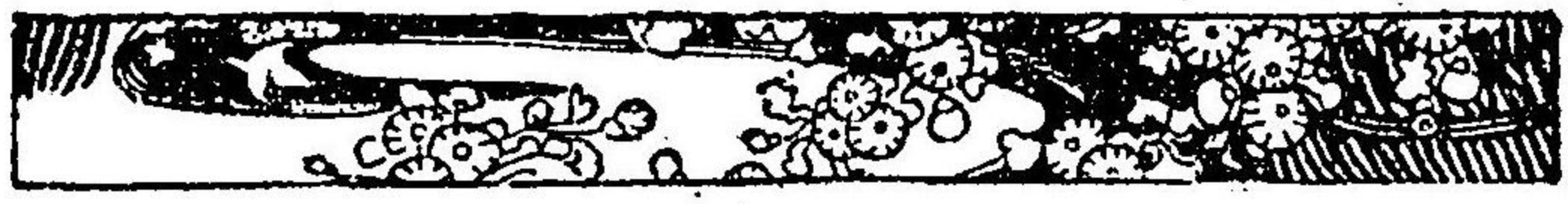
修善寺温泉は、豆相線の終点大仁驛にて下車し、それより馬車の便ありて一里八丁にして達すべし。桂川その中央を流れ、奇岩は河身に出没す、この地にてはこれを修善寺川といふ、架するところの橋は虎溪橋、渡月橋、柳橋といひ、橋上の眺望佳絶なり、この地の幽邃に富めることは、彼の熱海の名高きの比にあらざるべし、泉質は塩類泉にして、その効能はその湯によりて多少の殊なるものあり、皮膚病には河原湯これに適し、脳病精神病には細鈷の湯これに適し、胃腸病、れうまちち等の石湯における、子宮病、眼病等の珍の湯に滴するが如し、旅館としては、養氣館、淺羽樓等を第一とし、柳屋、中田屋、橋本屋等これに亞がり、鮎を此地の名産となす。この邊の名あるものは、修禪寺、正覺院などにして、而して三洲園（一に指月の岡）の勝景に富める、九華瀑布の壯觀を成せる、いづれも近境の訪ふべきものなりとす。



修善寺村と戸田村との間に達磨山といへるあり、山頂囑目の佳なるは世既に定論あり、地の兩間に遠からざれば、時に杖をこゝに曳くも愉快なるべきなり。

戸田海水浴場は戸田村にあり、沼津よりは南に四里半とす、こゝは海水の灣入するところにして、その灣口狭くして波浪高く揚らず、潮水極めて清くして海水浴には適當の地とす、保養館は旅舎中の最も宏壯なるものとす。

湯ヶ嶋温泉は修善寺温泉より南に三里とす、天城山を負ひ狩野川を帯にし、遠く富嶽を半天に望み最も銷夏に逸せり、泉質は塩類泉にして、効能は修善寺温泉と異なることなし、温泉宿は落合樓を第一となす、友人岡田竹亭のいへるに、伊豆の温泉場にて、湯ヶ島が第一の地ならんと思ふ夏時蚊帳を要せざるは數層の好區たるを思はしむ。



國清寺といへるは韭山村にある名刹にして、その境内は天台に擬せりとして殊に稱せらる。竹亭氏が國清寺の十二景および雨中の國清寺などいひて、同寺に宿しながら粗密の畫卷を示したるを觀しことあり、亦銷夏の地といふべし。

田子港、下田港はいづれも國の南端にありて、下田は東に田子は西に位し、その良港にして風景に富めるは人の知るところなり、およびその邊温泉に富めれば、下田あたりにも他の温泉を引き來りて、入浴に便にせりといふ、如何にや。

堂ヶ島洞窟として伊豆の西海岸、仁科村大字濱より行くへき勝地あり、こは野崎左文氏が破天荒ともいふ勝地にして、その詳細は同氏の著漫遊案内にあり、沼津より下田に航行するもの松崎に寄港せば、勞せずして見るを得べしといへば、一遊を勸むるものなり、その景色は請ふこれとその書に見よ。



大仁驛の東南に中大見村あり、その宮上に最勝院といへるありて、いかにも最勝の名に違はざるものと聞けば、便道訪はるゝもよろしからん。

東海岸に伊東といへる村あり、この近傍は多くの温泉あり、一々これを紹介せんは煩はしければ、その名稱のみを左に掲げ示さんとす。

猪戸温泉

旅舎は柏東館、山田屋、旭屋など

出來湯

旅舎は寶來屋、なべ屋等

和田湯

旅舎は大坂屋、扇屋など

この他猶ほ多ければ略すべし。

熱海温泉といへば誰も知らぬものもなきは著はれて、それは常に繁華なるも亦もとよりのことなり、されども識者に聞くに、湯治は第二の客なれば、夏は箱根に、冬は熱海をよしとすと、そは何を目途としての割出しにや、熱海の熱をわつしと解してのことなれば



箱根の箱の底も、亦あつしとおもふべけれ、とに角東京と比して寒暖計が三四度も低くしといへば、何んぞ避暑するに適せざることのあるべし。

さてこの地は日金山の東麓なる海濱にありて、三方は山をめぐらし、一面に海風を受くるのみ、殊に三里の海上に初島の景をながめるなど、たまつたものにあらず、三島よりは大場、八溝、大土肥、平井、軽井澤などを経て行くべし、その道程五里とす、この湯はむかしより七湯と稱したれども、今は中々に多きを加へて二十餘湯となり、而してその泉質効能ともに大抵は同じとす、即ち質は食塩泉、効能は胃病、腸加答兒、氣管支加答兒、子宮病、脚氣等に最も可なりとす。

旅舎は一等より六等までありて、富士屋、相模屋、眞誠社、氣象萬千樓、對孝館、鈴木屋、阪口屋、露香館、小林屋、尾張屋などを、

その内の上乗なるものとす。

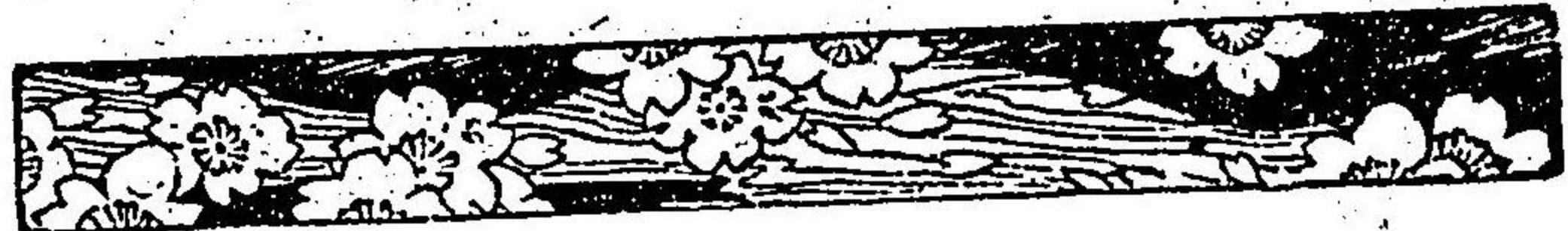
岩倉故大相國の立案になれる噓氣館は、大湯の傍にありて大に患者に利するものあり、

熱海公園は、熱海の本町より北にあり、丘陵起伏し清泉その間を流る、幽趣揃すべきなり。

温泉寺は、町の新宿といへるにあり、清水山と號して、その境内はいと清爽にして坐ろに歸るを忘れしむるものあり。

初嶋といへるは、熱海より海路三里にあり、穩波の日こゝに航して採貝漁網を試むるもいと樂しかるべし。

錦浦とは、魚見岬より錦浦までの間十七八町の総稱にして、海岸の奇絶快絶なるが中にも、碁盤石、烏帽子岩、雀島、馬脊島などの勝ありて、而して胎内竇、狗竇などの怪奇なるもあれば、實に名状すべからざるの形勝を具したりといふべし、成島柳北翁が撰びしとい



よ熱海の八景中に、錦浦秋月といへるあり。その賞は月を第一とすべし。

伊豆山は熱海の北半里のところにあリ、伊豆山神社その上にあり、この山の麓に伊豆山温泉あり、相模灘に對して眺望頗る佳絶なるに、この温泉は硫黄と明礬との氣を含み、高さところより落ちて湯瀧となるといふより、伊豆の走り井ともいへるなり、江島屋、相模屋等の旅舎あり。

日金山の勝は人の知るところながら、熱海より三島に至るは熱海峠、箱根に出づるは十國峠といふ、熱海よりは一里十八町とす、山上の眺望はすでに十國峠といふにてこれを推すべし、而してその詳細はこれを漫遊案内に譲らんとす、唯だ一語これを評すれば、東海第一の壯觀といふの外なかるべし。熱海近境の奇勝何ぞつきん、然れども他日を約して前程に就かん。

海なし國

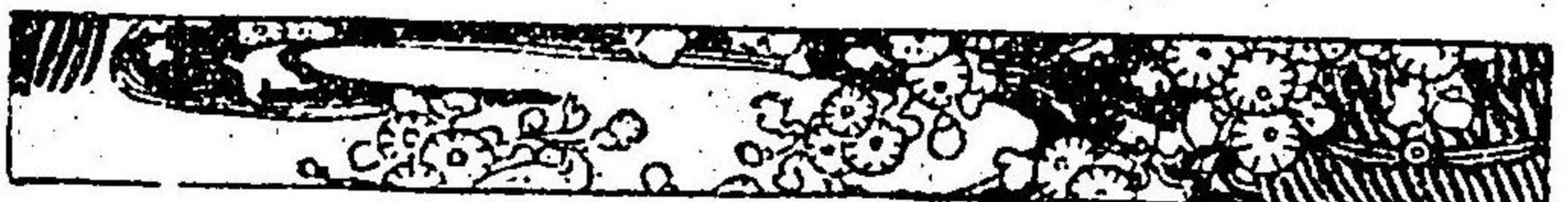
甲斐の海なし國は誰もよく知つたこと、その山深きなかにも勝景の稱せらるゝもの多かるべし、されど交通は不便なり、他に好勝地の多くあれば、何もこゝばかりを詮索すべき要なければ、ざつとその最なるところを拾ひあるかんとす。

猿橋驛は甲州街道にあたり、桂川がその中を貫流して、川には有名なる猿橋を架したり、こゝの觀望は他にめづらしきもの、橋は飛弾内匠が構造になると、いかにも巧みをつくしたるものなり。秩父街道の笛吹川の岸に差出の磯といへるあり、山中にて磯をいふは奇なるが如しといへども、奇なればこそ觀るべきもの、この邊避暑にもよろしきなり。

この街道に沿ひて鹽山温泉といへるあり、その眺望佳なりとて浴す



るもの多し、甲府よりは平坦の道なり。
 甲府は國の中央にありて、第一の都會なりと稱せらる、甲府城址を
 觀て次に甲府公園を探る、公園は市の南端にあり、假山や泉池やそ
 の宜しきになへ、遊ぶに適せる地とす。
 城址の東北に三藤温泉といへるあり、塩類泉にして硫化水素の氣を
 帶ぶ、甲府に近きがため、沐浴の人甚だ多し。
 市より北十餘町に大泉寺ありて避暑には佳適の地なり、この近傍に
 善光寺といへるもあり、その後山は甲斐八景を一時の中に收むとい
 ふの風光を有せり、亦登觀するに宜し。
 前記の大泉寺の傍に入幡神社あり、寺に遊ぶものはこゝに立寄りて
 その勝を咀ふべし。
 御嶽山金櫻神社といふは、この國にて有名の地なり、甲府よりは三
 里半ありて、近頃新たに便道を通せり、その途上の奇景妙勝は、筆



の能くつくすところにあらず、且つ沿道に小瀑布もあれば、避暑の
 客はかならず訪ふべきものとす。
 天澤寺とて甲府の北一里半のところに禪寺あり、境内幽靜の風致は
 一の小仙境と稱せらる、亦以て消暑の區とするに適せり。
 北巨摩郡には瀑布多し、しかれども地の僻在せると、山間にして交
 通に難きとにて、訪ふ人は甚だ稀なり、今二三の大なるもの、みを
 掲げて參考となさんとす。
 梯瀧 駒ヶ嶽の東にかゝり、高さ三十六丈幅二丈四尺。
 精進瀧 新富村にあり、高さ三十五丈幅二丈三尺。
 千丈瀧 増富村にあり、高さ十五丈幅三丈。
 この他この郡に海岸寺の幽邃なる、入幡社の絶勝なる、および各所
 に小温泉あれど、これを略せり。
 猷澤は甲府より四里半餘をへだつ、富士川の西岸にして、こゝより

駿の岩淵停車場へ舟を通ずるの便あり、その里程十八里、六時間にして達すといへば、その急迅なる想ふべき、兩岸の風景亦推はからるゝなり。

箱原天神とて、富士川の岸なる五開村にありて、川岸に突出せる岩上に鎮坐す、その邊の風光は畫も及ばざるものあり、富士川の奇を探らんものはかならず一觀すべきものとす。

身延山久遠寺は名高き寺にして、日蓮宗の総本山なり、南巨摩郡身延村なる身延山の南麓にあり、その境の内外の壯觀と偉大なるは觀るものを一驚を喫せしむるものあり、こゝは緞澤驛より、岩淵通ひの川船にて行くを可とす、行程は十里とす。

七面山は身延山の西に屹立する高峰をいふ、身延村よりは山路四里半といふ、こゝには多くの奇勝に富めれば、避暑の客は險々險とせずして來り訪ふもの多し。



下部温泉とは西八代郡にて有名なるものにして、富里村にあり、その山間に僻在するに拘らず、浴客は年々に多しといふ。

富士川の東岸、地の共和村字宮木に屬するところに、屏風岩の奇勝ありて、むかし詩佛老人が、

元是双流爭激處。驚破捲雪瀧舟中。

といへりしものは、こゝの景を賞したるなり。

こゝより程遠からぬ地に内船寺といへるあり、榮村に屬して一方に僻在すといへども、夏日の納涼には頗る可なるものありといふ、富士川に沿へる地なれば、訪ふも亦可なるべし。

天目山は東八代郡の東北なる高嶺にして、山麓よりは三十町を上るべしといふ、日川を南にし、星川を西にし、古木森然として景致頗る幽雅なり、その麓に景德院といへるあり、武田勝頼自盡の地といふ。





十。ヶ。嶽。は南都留郡の大石村に屬し、登路は一里半とす、その間一歩一喘極めて峻悪なりといへども、山頂に登れば風色佳絶にして、往路の險を忘るべし。

御坂嶺は富士見三景の一と稱せらるゝほどありて、その風景極めて愛すべし、この邊に旅行せば訪はざるべからざるものとす。

妙法寺とて河口湖(後に記すべし)の南岸にあり、その境内頗る幽寂にして雅致に富み、風光人世にあらざるものあり、近時は外國人なとの來りて長夏を避くるもの多し。

富士の登山口はすでにこれを駿州の下にてのべたり、今左に富士の八湖と稱するもの、その五つ六つを紹介せん。

河口湖 は八湖中の大なるものにして、東西二里南北一里といふに、三方は山をめぐらし、南は富士の裾野をのぞみ、而して湖中に小嶋あり、風景頗る佳絶なりとす。

山中湖 は東西一里二十八町南北十二町の楕圓形なる湖にして一湖中に鯉魚を産し、冬月は野鴨の來るもの多しといふ。

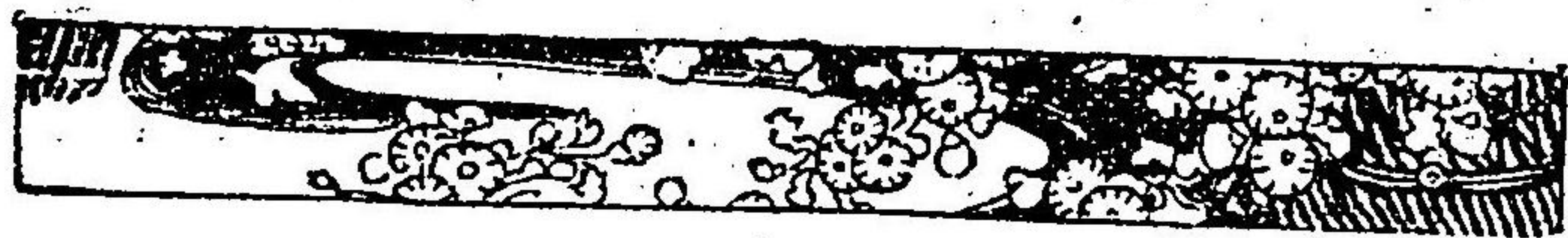
西湖 は東西一里十四町南北三十町にして、三方は山なりといへども一方の飲たるところよりは、富士その他の諸山を望み、風景頗る絶佳なり。

精進湖は東西一里南北二十町にして、もとは西湖とつゞきといふ、湖邊の勝景に加ふるに、湖中魚を産すれば遊ぶによるし。本栖湖 東西一里南北一里二町、また風景を以て稱せらる。

四尾連湖 は正圓にして、その直徑は十三町なり、これを湖水の最も小なるものとす。

他の二湖は小なれば録せず。

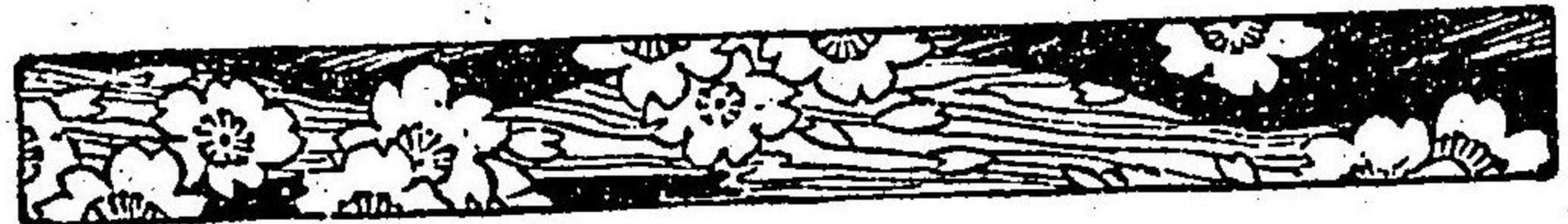
田原瀧は桂川の急流が、こゝに至りて瀑布となれるものにして、その高さは僅かに七丈なりといへども、水聲は百雷の轟くかと訝り、



飛沫は十里の霞かと疑はる、その偉観は極まりなきものといふべし、この他猶紹介すべきものは多けれど、そは他日を以てこれを補ふべし、たゞ大概を掲ぐるのみ。

相摸と武藏 其一

相摸と武藏とは、東京附近にて名勝の本場ともいふべきものなり、されどこは前よりたびく述べたるが如く、いやといふほど案内したる書冊のあれば、こにはざつと書きおくことゝなすべし。先づ駿州より相摸に入れば、停車場のはじめは山北なり、この驛の西南に半里ばかりに蛇水瀧といへるあり、一二三の三つにかさなりて、その近くには楓樹多ければ、消夏にはいとよろし。この他尼瀧、棚澤瀧、下の瀧など、いづれもこの驛より訪ふによるし、中にも尼瀧は五十丈ちかき高さを有すれば、壯なるながめなるべし、地は中川村に屬せり。



べし、地は中川村に屬せり。

驛より二里七町、南足柄の字關本に最乗寺といへるあり、この關本が街道筋なれば、みちすがら訪ふもよからん。

この寺の境内に道了薩埵殿といへるあり、こは老杉の繁茂して、風致いと幽なれば、避暑には頗る可なるものあり。

松田驛は別にいふべきはともなけれど、後に示すところの大山雨降神社に徒行するに便あり。

國府津は大磯を東に、小田原を西にひかへ、殊に小田原を経て箱根まで馬車鐵道の設けさへあれば、東海道にての有数の地といふべし、又海濱には海水浴場あり、國府津館などは有名の浴館なりとす。

こゝより西へ二十四五町のところに酒匂川の流れあり、この川は富士の麓より發して、およそ六里の間川は深く勢は激しく、いと愉快なる川なり、この川下に海水浴場あり、松濤園などは名ある旅館と



小田原はその地西北に丘陵を帯び、南は海に面して、その砂は清くその波は静かに、海水浴にはもつて来いのところなり、この邊は馬車と電氣との鐵道ありて、交通の便利なること、他の及ぶところにあらず何んぞのためにと左にその表をかゝぐ。

國府津より湯本行の電車鐵道は

小田原を午前四時二十分に發して、湯本に四時五十分に着くべし。

國府津を午前五時に發して、湯本に六時に着くべし。

この間は日々およそ二十回の往復なり、その賃金は二等國府津より小田原へ十三錢、小田原より湯本へ十三錢にして、一等は四十錢づゝとす、いづれも官線の鐵道に、國府津にて連絡することゝなれり。

豆相の人車鐵道は

小田原より午前七時二十分に發して、熱海に十時二十分に着く定めにて、午前四回、午後二回づゝ相方より發車するさだめなり、その賃金は下等が六十六錢にして、中等は二分の一を増し、上等はその一倍とす、別にかり切りの定めもあれど略せり。

序なれば箱根の湯本より各地への人力車及び駕籠賃を紹介すべし、即ち左の如し。

湯本村より	片道	上下
宮の下まで	三十五錢	六十五錢
堂ヶ島まで	四十錢	七十錢
木賀まで	四十五錢	八十錢
小涌谷まで	五十三錢	九十八錢

蘆の湯まで 七十錢 一圓二十五錢

瀧坂まで 六十五錢 一圓二十錢

箱根まで 七十錢 一圓三十錢

うば子まで 八十錢 一圓四十錢

こはその大概なり、時によりて多少の差を生ずることもあるべし。さて、しばらく傍道に入りしが、前に立ちかへりて述べんに、その町は頗る繁華なるに、海濱は海水浴場ありて中々に賑へり、而して名高き館 春畝侯の滄浪閣などもこゝにあり。

小田原城趾、二宮尊徳翁を祀りし報徳神社など亦訪ふべし。

この西南一里ばかりの石橋山なども史上に心ある人は訪ふも可なるべし。

早川は、その名の如く水流急速にして、兩岸の風景頗る観るべきものあり、その延長は五里といふ。

これより温泉を紹介すべき順となれり、而してその委しきはこゝに新らしく述ぶるまでもなければ、大要をかゝると共に、その泉質より浴樓の名のごときは、合せて後に示さんとす。

湯本は湯本村の湯本にあり、これを箱根峠にのぼるのはじめとして、これより次第に峠を加へたり、箱根峠までは二里二十八町とす。塔の澤は湯本より北へ六町、三方は丘陵にして、中に早川の流れをひかへて風色極めて雅致にとめり。

宮の下温泉は湯本より一里半といふ、地勢たかくして南西北の三方は山にてつゞまれ、東方は遙かに相模灘をのぞみ、その風景の佳絶なること、箱根七湯中の巨擘となす、したがつてその繁華も他の比にあらず、常に内外人の足をどゞひるもの多し。堂ヶ島は宮の下より五町とす、土地は低くして遠眺の観はなしといへども、その幽邃に至りては他の比なき所とす、殊に緑樹深蔭日光

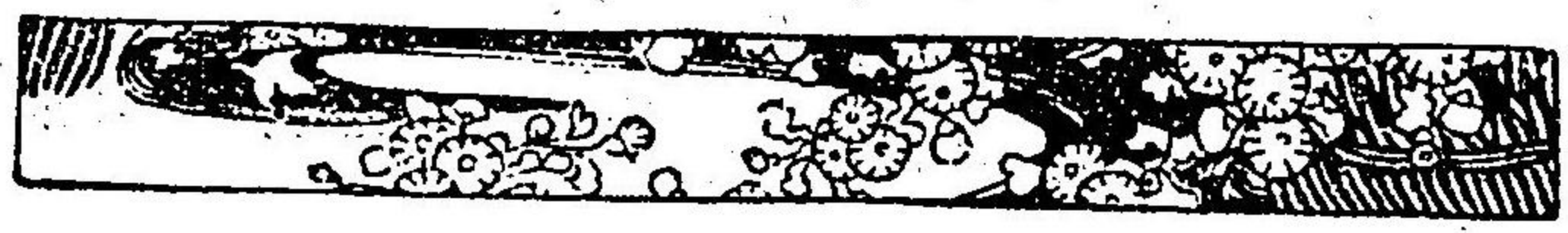


をさへざりて、夏を消すには極めて妙なり、宮の下よりこゝに至る途中に、木葉隠れの瀧といへるあり、又こゝに別荘をいと名める平松某氏の庭内には、調の瀧といふあり、恰も琴の調ぶるが如く、至つて清絶なり、その高さも十五丈と聞けり。底倉は宮の下よりは三町の村つゝさにして、蛇骨川の懸崖に接す、別にいふほどのことはなし。小涌谷は底倉よりは十五町あり、その地および家屋とも清潔なり。木賀は底倉より西北十町あり、後ろには丘陵あり、飛泉かゝりて辟邪泉といふ、山光水色の美賞するに足るものあり。蘆の湯は木賀より一里半といふ、山峯をもてつゝまれがるが中に、北の方はやゝ開けて、眺望快潤なるものあり。化石下の湯は木賀より西に一里といふ、この邊の温泉としては下等なるものとす。

この他姥子温泉、湖尻温泉などありといへども、一々はあぐるに違あらざるなり。

大地獄といふあり、こはひかし箱根山中を冥土になぞらへしときの一つにして、温泉といふにはあらず。さて温泉に就ての大略をかゝげれば、前に約束せしが如く、その泉質、温度、旅館等を記すべし、尤もその主治効能は大同小異にして一々はこれを掲げあげざるなり。

温泉名	泉質	温度	旅館
湯本	単色透明泉	四四度五	福住樓
塔の澤	單純泉	四七度三 乃至四三度	玉泉樓 環翠樓 福住樓
宮の下	鹽類泉	八一度乃 至四六度	富士屋 奈良屋
堂ヶ島	單純泉	四七度	江戸屋 大和屋 近江屋





相模と武蔵

底倉	弱性塩類泉	七二度 至四三度	葛屋 仙石屋
小涌谷	酸性緑礬泉		開化亭 三河屋
木賀	塩類泉	三八度 至四五度	龜屋 伊勢屋
蘆の湯	硫黄泉		松坂屋 吉田屋
仙石下湯	硫黄熱泉	七二度	

以上はその大概にすぎずといへども、その一半を知るに足るものあらんか。
 蘆の湖は箱根の山頂にありて有名なるものとす、その周回は五里ばかり、その形は瓢のごとく、西の方遙かに富士山を望み、時にはその山影湖上に落つるといふ、箱根の逆か富士といへるはこれなり、この湖の下流は早川にして、川口は香魚を生じ、湖には鱒を産して名あり。
 箱根の驛とは、箱根の嶺上にありて、芦の湖の南岸にあり、その風



景の佳絶なるはいふまでもなきことなり、殊に夏季に適すれば、避暑には極めて適當なるところとす。
 こゝより東南二里ばかりに湯河原温泉といへるあり、地はさばめて幽絶なりといへども、浴客は甚だまれなりとす。
 大磯は有名の驛次にして、停車場のあるところ、こゝに海水浴場ありて、騰龍館はその旅館の最なるもの、風光の絶佳なるはいふまでもなきことなり、招仙閣、松林館など亦名あるものとす。
 この地の延臺寺にある虎子石なるもの、これを観るも可なるべし、その謂はれを聞くも何かの種なるべし。
 驛の近くなる高麗山も、眺望に富み且つ深遠の地なれば登つて見るもよかるべく、鴨立澤にたち寄りて、その風景に飽き西行のむかしを想ふも亦可なるべし。
 平塚驛も停車場ありて、こゝより大山雨降神社へまゐるに順路なり

相模と武蔵

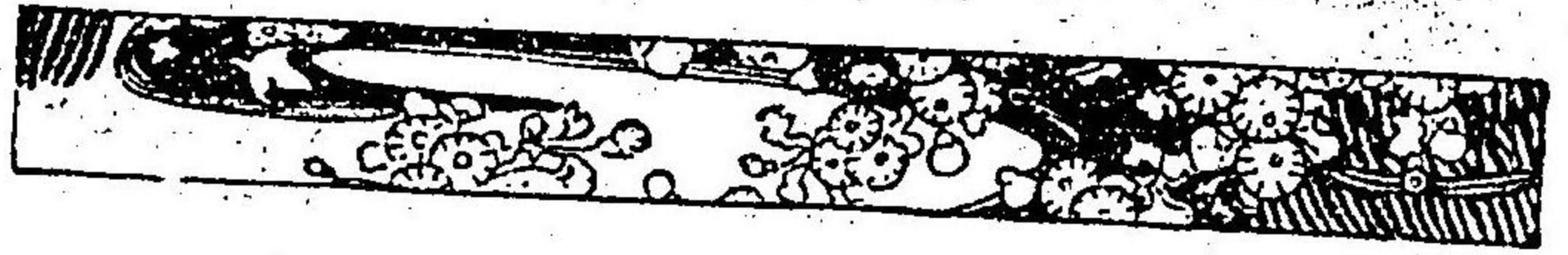
とす、尤も西よりせば、前にのべたる松田よりゆくも可なるべし。大山雨降神社は、有名の社にして、山下までの里程は三里半といふ、山は高くして路は可也になやめりといへども、山上の眺望は頗る可なるが故に、こゝに登臨するもよろしかるべし。この前程に茅ヶ崎の停車場ありて、同名の海水浴場あり、濱は一帯の白沙にして、四方の眺観に富み、風光の明媚なるもの備はれば、こゝに浴するも快哉を覺ふべし、茅ヶ崎八景など亦賞すべきなり、松旭館、松本樓など、宿を投ずるによろしからん。藤澤驛は、江の島、鶴ヶ沼などの遊客が下車するに適すれば、中々に盛んなり。鶴ヶ沼海水浴は名高きもの、驛よりは二十町あまりもあるべし、鶴ヶ沼村の海濱にして、江の嶋は呼應の間にあり、伊豆の諸島は水雲の中に点在し、西には富士山、北には大山と、山水の取り合せ頗る



妙にして、夏に入れば浴客の多きも道理なり、鶴沼館、待潮館などは旅舎の最なるものといふべし。

江の島は周圍僅かに十八町といふ小島なり、藤澤よりは一里、片瀬の川岸よりは五六町に過ぎず、全島岩石より成り、遠山近水の眺観は極めて佳麗にして、これを詳かにせんとせば數葉の紙數の能くつくすところにあらざるなり、江の島辨天とて有名のものあり、一には風景を添ふるの料となる、漫遊案内など見なばその勝を知るに足らん、旅館および旗樓は、金龜樓、るびすや、岩本樓などを最とし、中にも金龜樓は清潔にしてその取扱ひ方頗る佳なり。片瀬川、龍口寺など、浴餘醉後に散策するも妙なるべし、一々はこれを掲げざるなり。

遊行寺もまた遊ぶによろし、こゝは藤澤の大富町にありて名を知られたり、その本名は藤澤山清淨光寺といふ、後山の富士見亭の眺望は



一しは佳絶なるをおぼふ。

大船は横須賀線の分岐するところ、これより鎌倉に入るべし。

鎌倉は歴史上には著名の地にして、史學に志あるものは是非に訪ふべきの地とす、されど今はその専志といふにもあらざれば、

鶴ヶ岡八幡宮、鎌倉宮、覺圓寺、英勝寺、瑞泉寺、淨明寺、建長寺、圓覺寺、壽福寺

などを見るもよし、見ぬもよしにて由比ヶ濱にむかふ、この各所の内にも、八幡宮、建長寺、圓覺寺などは、たとへ史學に意はなしといふとも、尋ねべきことは謂ふまでもなし、たゞ本書の主とするところならぬば、案内はせざるべし。

由比ヶ濱は、八幡宮の鳥居より五町ほどをいふ、こゝに海水浴場ありて風光亦よろし、もしこれを評せんとならば、沙白く松青しといふの外はなかるべし。



稻村ヶ崎も亦風光に富みて、殊に海濱には奇石怪岩起伏して、遊ぶには適當なるどころなりとす。

七里ヶ濱も訪ふべき地なれど、これは別に案内するほどにあらず。返子海水浴場は、水は清く波はおだやかにして、夏時の遊區には適

せりといふべし、返子の停車場より七八町に過ぎず、その海濱の眺望に富めることはたゞ壽の如しといふべきなり。

森戸の浦といへるは、鎌倉郡の西岸にありて亦海水浴に名を稱せらる、前は相模灘、その南の長者崎はわけて風光よろしく、海浴には適せるが故に、三伏の候には遊ぶもの殊に多し。

横須賀は海軍造船所のあるところとして、名はずでに隠れなきものなり、その地勢は前に海、後に山といふ御定りの文句にして、こゝにも海水浴場ありて遊客あつまれり、この町には観るべきの地多きが中に、その最なるは龍本寺の勝景に首位を占めたるを、これに亞



げる淨土寺なりとす、これより一里ばかりの西南には大明寺あり、一里の南には衣笠の城趾あり、また序あれば往くべし。浦賀の良港灣を有する、海水浴場の適地たり、毎に來人は多きが中に、夏季は殊に浴客群集せり。三崎町もよいところなれど、別にいふほどにもあらず、この町の海。南神社は眺望のよさがために頗る名あり、而して秋名山即ち大楠山は、登臨するに眼界全くひらけ、所謂馳望千里といふべければ、海にばかり遊ばんよりは、時に登山してその勝に咏するも可ならん、これにて武藏國に入るべし。

相摸と武藏 其二

東京の内外

前にいへりしが如く、すべて都會の地には幽静閑雅といふべき地は

なきものなり、むかしの武藏野の原といひし地も、今は黄金一升と土一升と換るといふ東京には、とても廣大の餘地をあますべくもあらず、随つて避暑に適するの地もこれなきは、いふまでもなきことなれば、事々しくこゝに案内すべくもあらねど、なければないで、又その中には思ひの外の好き遊び場もあるものなり、まして人の心のさまじくなれば、わが好まぬところも人の愛づるものなしとせざれば、東京の市内をはじめ、その市外に名あるところを併せて、案内せんとす、而して市外は人口に膾炙せしところの多ければ、その言葉はいと手短くザツと物したりといへども、決してこれを疎にしたるにあらねば、よろしく編者の心を推しはかりてよ。前の例もあれば、先づ相摸より驛路を趁ふて武藏に入り、東京市をまわりて、それより漸次にくるくると一遊の案内せんとす、その路すがらは一々これを示さるべし。

程ヶ谷驛を越しては横濱に到るべし、横濱市といへばすでに人の知れる五港の一にして、その繁華なるはいふまでもなく、而してこゝにて眺矚の佳なるところをいへば、

伊勢山、太神宮の社殿の清洒にして、その景勝の佳絶なるは、實に

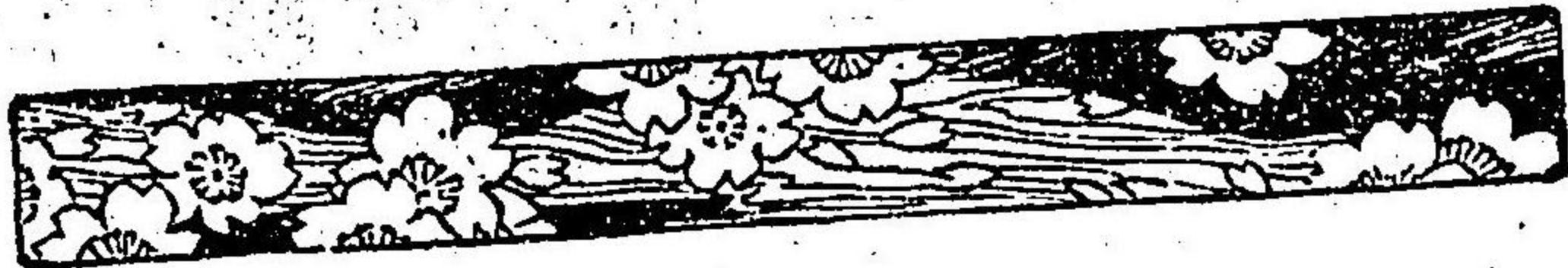
市中の第一とす。

横濱公園は横濱にあるだけに、内外人の遊歩散策には、こよなき

場所なりとす。

この他に二三の觀るべきものもあれど、そは此書としての主とするところにあらずれば、こゝには述べるべし。

金澤八景は、勝地として避暑地として、かならず訪はねばならぬところなり、横濱を距ること西南四里ありて、久良岐郡の東南にありて、西南北の三方は丘陵をめぐらし、東の一面は海に瀕し、山は青く水は深くして、風光の佳絶なる、この邊にては多く見るを得ざる



の地、すでに金澤といへば、人の知らざるものは殆んどこれなきなり、この八景とは

洲崎の晴嵐

瀬戸の秋月

小泉の夜雨

乙艦の歸帆

稱名寺晚鐘

平瀨の落雁

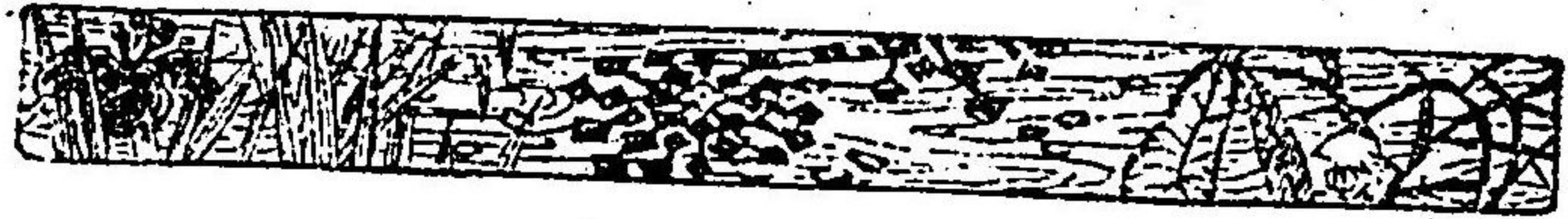
内川の暮雪

野島の夕照

にして、一里四方の間にこの八景を收めたり、而してこれを一眸の中に觀んとせば、實に能見堂に過ぎたるはなきなり、能見堂はその山を筆擲山といふ、彼の巨勢金岡が筆を投じたるの地といふ、この料亭は四時總宜樓といふ、いかにもその名に負かざるの地といふべし。

稱名寺、金澤文庫蹟なども見るによろし。

杉田梅林、弘明寺など亦順路觀るによろし、さてこゝに一つの觀るべきは本牧岬とす、岬は東京灣に斗出せる一角にして、横濱よりは一里ばかりの南にあり、海岸の快觀に富めるはいふまでもなく、こ



の地の海水浴場は、さすがに東京近くなるだけに、來浴の人も多し。

神奈川驛には別にいふほどのことなし、この先きの驛は川崎なり、こゝに川崎大師堂あり、境内に假山泉池の布置ゆきといたれば、これを探るも可なるべし、然れども梅花放香の時を第一となすべし、此地より程近き小向梅林も名たかきものなれど、時候に適せざれば案内はせざるべし。

大森驛に至りて、その西隣に新井宿の八景園あり、こゝも訪ふべきなり、驛より西南二十七町に本門寺あり、こゝに冷鏡泉の湧出するがために、夏時の遊びには妙なり。

この前驛は品川なり、こゝにては御殿山、東海寺、品川寺、海晏寺などの名あるところあれば、下車せし人は尋ねるによろし。猶は目黒不動をはじめ尋ねべき地なしとせざれど、愛を割きて東京

市に入るべし。

東京市は前に述べおきし如く、その佳絶なるところのみを案内すべし若し、市内四里四方を隅なく探らんとすれば、別にその案内記あり、就て観るべきなり。

永代橋は長さ百五間といふ、永代島に架する橋にして、橋上の眺望は優に納涼に適するものと云ふべし。

中洲町は中洲埋立地にして、こゝの枕流亭などは、消暑の好區といふに足るべし。

兩國橋は隅田川に架せる五大橋の一にして、その河開き、烟火などは世に知られたる繁華の觀物なりといへども、あまりに熱鬧をきめて、納涼には敢て好域なりともいふべからず。神田神社はその社地が丘阜の上にあるだけに、眺望稍々可なれば、遊ぶ人もおのづから多し。

向ヶ岡とは、不忍池を挟んで上野に對するより斯く名づけしものなりや、一寸遊ぶによろし。

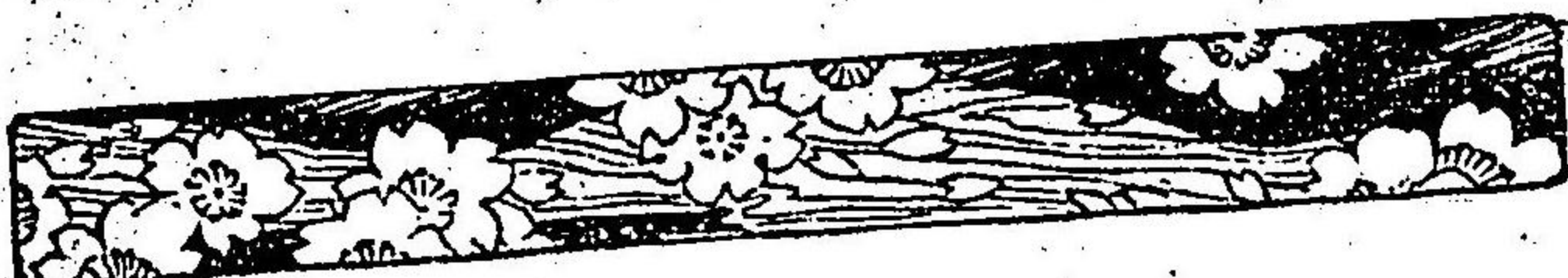
根津神社はその境内の廣大なるが故に、温泉（上州より取寄せて沸したるもの）もあり、花園もあれば、こゝに消暑の計をなすもよろしからん、温泉場は神泉亭といへり。

この近くの目赤不動、團子坂菊などもあり。

上野公園は、名にしおふ公園だけありて中には観るべきものもありされど惜かな幽邃閑雅といふはこれなきなり、園内のことは別にいふとも要はなかるべし。

不忍池は周一里あまり、滿地蓮を植えたれば、花時に至れば紅白の花影は池水に相映じて風光頗る佳なり、湖心の辨天祠はまた幾多の風景を添えたり。

入谷の牽牛花も、蓮花と同じく夏時の清娛に供すべし、早起杖を引



くによろし。

淺草公園は、その地區極めて廣濶なりといへども、その割合には俗境たるを免かれず、たゞ凌雲閣の十二層のたかさありて、眺観に富めるを見るもらるなり。

園中の淺草寺なども、雑沓といふばかりにて、別にはめたものにはあちざるなり。

待乳山とは金龍山のことにして、小丘たりといへども、丘上より眺望するときは、西には富士あり東に筑波あり、隅田川を近く前にひかへて、その風景は頗る佳なるものとす。

愛宕神社は愛宕山の上にあり、懸崖峭立、石階疊々のところにありて、通ずるに二條の磴路を以てす、男坂は険にして女坂は緩なり、愛宕館、五階の塔あり、眺観極めて佳なり。

芝公園は愛宕社の南にあり、こゝには増上寺、金地院より、紅葉館



彌生館などあるを見るのみ、唯た地域のひろきばかりにて、風景としては愛すべきほどにあらす。

氷川神社は赤坂區氷川町にあり、その社殿は清酒にして老樹これを圍み、亦一の消暑の地とするに足る。

目白不動は、小石川區關口の高丘にあり、眺望佳絶にして登臨によろし、中にも雪の朝は殊に妙なりとかや。

後樂園は東京砲兵工廠（小石川町）の構内にありて、泉池の觀は府下の巨壁なりといふ。

以上は市の大觀に過ぎずして、その他の賞すべきは少なからざるも、肝腎の避暑としての觀なければ、こゝにはこれを略せり、もしその

吹上御苑をはじめ、赤坂、濱、青山などの離宮にいたりては、もとより草莽の臣のうかゞふべきにあらざれば、こゝに聞くがまゝを案



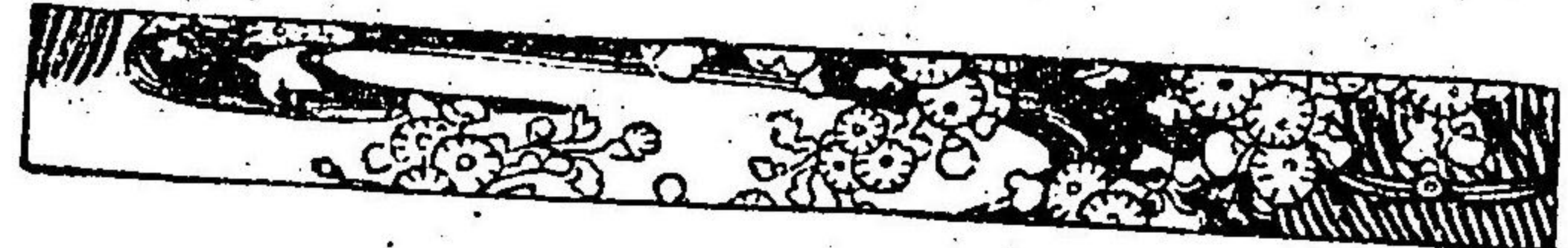
内するもその甲斐なかるべし。

便宜のため郡別にしていはんに、豊島郡にては十二所權現社は、内藤新宿の西にあり、その社殿は清瀧なるが上に、老樹四方をとりかこみ、ことに飛泉あり泉水ありて、夏日は避暑によろしきものとす。

この郡には大久保躑躅園あり、咲花園などありて、花の時にはいと妙なる景色なりとす。

北豊島郡には、飛鳥山公園あり、王子瀧の川あり、道灌山あり、いづれ遊ぶに適せざるはなし、而して殊に飛鳥山は、王子村なる一高丘にして、櫻はこゝの名を得たるものなりといへども、北と西には富士と筑波をながめ、近くは瀧の川の流れより蒼田を見おろして、この邊にての勝景なりといへば、遊觀者はいつも湊ひ來れり。

瀧の川は楓林の名を得しところ、川の清きながれをばさみての緑樹は、紅葉ばかりをこの地のものとすべきにあらす、われはこの新緑





を愛するものなりとす。

道灌山は日暮里にありて、春花秋月のながめの外に、夏のすゞみのけしきもまたよろし、されど飛鳥山には一籌を輸するをおぼふ。南葛飾郡にては、その地が東京市につよくが上に、名にしおふ隅田川のながれがあれば、この川の兩岸にはなかくに見るべきところも多しとす。

隅田川は東京市の東を過ぎて品川灣に入るものにして、この東岸二里の堤上を向島といへり、向島といへば人の知るごとく、さくらの名所にして、その景色は春に如くものはなしといへども、こゝに遊舫をうかべて涼を納るゝも亦たのしかるべし。

三園神社、長命寺、花屋敷など、いづれも訪ふによろし、中にも花屋敷は墨堤の一名所だけに、その風光に賞すべきものも少しとなさず、七草など観るに足るものとす。



初夏の候には堀切菖蒲園もまた訪ふによろし、時候おくれなれば別に案内せざるべし。

南埼玉の鷺宮神社、北埼玉の忍町公園、北足立の調神社境内なる公園など、亦観るに可なりといへども、與野、大宮の二公園には數歩を譲れりとす。

與野公園は、浦和町より一里あまり西北にあたり、その名は櫻花のために知らるゝといへども、園の一隅なる小丘は遠近の眺めをわづめて、頗る佳絶なるものありとす。

大宮公園とは、氷川神社（官幣大社にして、武蔵の一の宮と稱せしもの）の境内にして、こゝは幽雅の景に富めるが上に、鑛泉浴場ありて（萬松樓）その効驗も著しといへば、訪へ来る人もいと多し、而してその近傍には螢の名所もあれば、遊人の多きも無理ならぬことなり。

秩父郡は大郡なるだけに、その名あるところも多しといへども、納涼に將た避暑に可なるところは、天龍寺および秩父神社もしくは三峯神社の境内が幽静にして、しかも樹木の林をなして日光を遮るにまされるはあらざるべし。

この郡には鑛泉あり、瀑布ありといへども、一は僻にして陋、一は小にして緩、別に案内すべきほどのものはなし、たゞ強て瀑布を觀んとせば、大瀧村の字中津川といへるに、逆巻瀧といへるありて、その高さも三十丈といへば、ちよと觀るに足るものあらん。

入間郡に出雲祝神社あり、高麗郡に高麗寺あり、この一寺一社はともにもその風景極めて佳絶にして、登觀するによつしとす。

西多摩郡にて風景の美なるところをいへば、羽村堰なるべきも、避暑に適するものは御嶽神社の境内なるべし、こゝは地盤のいと高きがために、觀眺のよろしきが上に空氣清潔にして、殊に盛夏にも他



とは凡そ十度の差あれば、遊人の避暑には頗る佳なりとす、而してこゝに通する萬年橋といへるは、多摩川の上に架して、その兩岸の奇絶なることは人をして快哉を叫ばしむ。

小河内および網代の鑛泉あれども、別に案内するほどにもあらざるなり、網代は少しく浴客を觀るに至りしといふ。

北多摩郡にては、小金井などの名高きあれど、そは櫻のころにあらねばこゝにはいふまじ、井ノ頭、貫井の二辨天は、いづれもその地清潔なるが上に、觀眺の景にも富みたれば、避暑には頗る適當なる

ところなりとす、中にも貫井には小瀑布のかゝれるあれば、一人佳良なるを覺ふ、丸山公園もあれど、別に公園といふほどにあらす。多摩川は東京より近くして遊ぶにはよろし、殊に香魚はその名産なれば、これを網して樂しむは、この川の最上なるあそびなりとす、この北岸に普濟寺といへるあり、その境内の風景は頗る觀るに足る

